長野市の埋蔵文化財第50集

浅川扇状地遺跡群

本村東沖遺跡

—長野高等学校校舎改築事業に伴う発掘調査報告書—

1993・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化と共に「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、貴重な国民的財産であると考えます。

特に埋蔵文化財は、直接大地に刻み込まれた歴史であり、当時の物質文化のみならず信仰・宗教等の精神史など、文化の始源をも内包する基準資料であり、埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考えるうえでの実証者といえましょう。

このたび長野県長野高等学校校舎改築事業にともない、浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺は過去の調査で重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた地域であり、今回の調査でも多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第50集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成５年３月

長野市教育委員会　教育長　奥村秀雄

例　　言

1　本書は、長野県長野高等学校校舎改築事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は長野県長野高等学校長の委託を受けて、長野市教育委員会が実施した。

3　調査地は長野市上松１丁目16－12に位置する。

4　本書は矢口の指導のもとに千野が執筆・編集したが、第５章１は山口明氏、第５章５は桜井秀雄氏に執筆いただいた。

5　調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。

6　本書は調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要領は下記の通りである。

・資料は検出されたものの中から、時期の明確に把握しうるものを中心に掲載した。ただし特殊なものはこの限りではない。時期・性格等不明瞭なものは資料掲載の対象から外したが、これらに関しては図面・出土遺物等閲覧し得るように保管してある。

・遺構・遺物は各時代ごとに記述した。各時代の中においても時間的前後関係をある程度考慮に入れて記述したため、遺構等の検索が煩雑になった部分もあるがご容赦願いたい。

・遺構番号は調査時に用いた仮番号を、報告に当たって再整理しており、またすべての遺構を掲載しているわけではないので必ずしも通し番号にはなっていない点、ご理解願いたい。

・遺構の測量は（有）写真測図研究所に委託し、コーディックスシステムにより１：20の縮尺で基本原図を作成し、本書は基本的に１：80の縮尺に統一してある。ただし遺物出土状況等微細を要するものに関してはこの限りではない。

・遺物実測図に関しては基本的に土器１：４、土器拓影１：３に統一してあるが、その他のものについては適宜縮尺を明示してある。

・土器実測図のうち弥生時代の赤彩品・古墳時代以降の黒色処理はスクリーンで、また須恵器は断面を黒塗りで表現してある。

・出土土器観察表の記述は次の要領で行なった。

番号：図版番号と一致する。

法量：実際の計測値ならびに推定復元による計測値を記した。

遺存度：図示した部分の遺存度を記した。

色調：灰白色（A）・淡黄燈色（B）・暗黄燈色（C）・暗褐色（D）・黒褐色（E）として、中間的なものはＡＢ・ＢＣなどと表示した。

目　　次

序
例言
第１章　調査経過……1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査体制……2
第２章　調査地周辺の考古学的環境……4
第３章　調査概要……7
第４章　遺構と遺物……17
　１弥生時代中期の遺構と遺物……17
　２弥生時代後期の遺構と遺物……22
　３古墳時代前期の遺構と遺物……70
　４古墳時代中期以降の遺構と遺物……72
第５章　考察……172
　1　本村東沖遺跡出土の縄文時代土器について……172
　2　本村東沖遺跡出土の弥生時代後期・北陸系土器について……175
　3　本村東沖遺跡出土の古墳時代中期以降の土師器編年について……180
　4　本村東沖遺跡出土の古式須恵器について……185
　5　本村東沖遺跡出土の祭祀遺物……192

挿図目次

図１　調査地ならびに調査地周辺の地形
図２　調査地周辺遺跡分布図
図３　周辺字境図
図４　長野高等学校校舎改築配置図
図５　調査区全測図①
図６　調査区全測図②
図７　調査区全測図③
図８　調査区全測図④
図９　調査区全測図⑤
図10　43号住居址実測図
図11　43号住居址出土土器実測図
図12　43号住居址出土土器拓影
図13　102号住居址実測図
図14　102号住居址出土土器実測図
図15　104号住居址出土土器実測図
図16　遺構外出土中期弥生土器拓影
図17　11号住居址実測図
図18　11号住居址出土土器実測図ならびに拓影①
図19　11号住居址出土土器拓影②
図20　16号住居址実測図
図21　18号住居址実測図
図22　18号住居址出土土器実測図ならびに拓影
図23　19号住居址実測図
図24　19号住居址出土土器拓影
図25　19号住居址出土土器実測図
図26　21号住居址実測図

図27　21号住居址出土土器拓影
図28　23号住居址実測図
図29　32号住居址実測図
図30　32号住居址出土土器実測図
図31　34号住居址実測図
図32　34号住居址出土土器実測図
図33　38号住居址実測図
図34　38号住居址出土土器実測図
図35　38号住居址出土土器拓影
図36　40号住居址出土土器実測図
図37　41号住居址出土土器実測図
図38　42号住居址実測図
図39　42号住居址出土土器拓影
図40　42号住居址出土土器実測図
図41　45号住居址実測図
図42　45号住居址出土土器実測図
図43　49号住居址実測図
図44　40号・50号住居址実測図
図45　52号住居址出土土器実測図
図46　52号住居址出土土器拓影
図47　58号住居址実測図
図48　58号住居址出土土器実測図
図49　60号住居址実測図
図50　60号住居址炭化材出土状況実測図
図51　61号住居址実測図
図52　61号住居址出土土器実測図
図53　61号住居址出土土器拓影
図54　64号住居址実測図
図55　65号住居址実測図
図56　67号住居址出土土器実測図ならびに拓影
図57　71号住居址実測図
図58　71号住居址出土土器実測図
図59　77号住居址実測図
図60　77号住居址出土土器実測図
図61　77号住居址出土土器拓影
図62　78号住居址実測図
図63　82号・83号住居址実測図
図64　84号住居址出土土器実測図ならびに拓影
図65　85号住居址実測図
図66　85号住居址出土土器実測図
図67　85号住居址出土土器拓影
図68　87号住居址実測図
図69　87号住居址炭化材出土状況実測図
図70　87号住居址出土土器実測図
図71　87号住居址出土土器拓影
図72　90号住居址実測図
図73　90号住居址出土土器実測図
図74　90号住居址出土土器拓影
図75　97号住居址実測図
図76　100号・101号住居址実測図
図77　100号住居址出土土器実測図
図78　100号住居址出土土器拓影
図79　104号・105号住居址実測図
図80　105号住居址出土土器実測図
図81　110号住居址実測図
図82　110号住居址出土土器実測図
図83　110号住居址出土土器拓影
図84　建物址１実測図
図85　遺構外出土弥生土器実測図
図86　遺構外出土弥生土器拓影
図87　46号住居址実測図
図88　46号住居址出土土器実測図
図89　106号住居址実測図
図90　106号住居址出土土器実測図
図91　５号・７号住居址実測図
図92　５号住居址出土土器実測図
図93　12号住居址出土土器実測図
図94　12号住居址実測図
図95　13号住居址出土土器実測図
図96　14号住居址出土土器実測図①
図97　13号・14号住居址実測図
図98　14号住居址出土土器実測図②
図99　15号住居址実測図
図100　15号住居址出土土器実測図
図101　17号住居址実測図
図102　17号住居址出土土器実測図

図103　25号住居址実測図
図104　26号住居址実測図
図105　26号住居址出土土器実測図
図106　27号住居址実測図
図107　27号住居址出土土器実測図
図108　30号・41号住居址実測図
図109　30号住居址出土土器実測図
図110　31号・41号住居址実測図
図111　31号住居址出土土器実測図
図112　36号・47号住居址実測図
図113　36号住居址出土土器実測図
図114　37号住居址実測図
図115　37号住居址出土土器実測図
図116　39号住居址実測図
図117　39号住居址出土土器実測図
図118　44号住居址出土土器実測図
図119　50号住居址実測図
図120　50号住居址出土土器実測図
図121　51号住居址実測図
図122　51号住居址出土土器実測図
図123　54号住居址実測図
図124　54号住居址出土土器実測図①
図125　54号住居址出土土器実測図②
図126　54号住居址出土土器実測図③
図127　55号住居址実測図
図128　55号住居址出土土器状況実測図
図129　55号住居址出土土器実測図①
図130　55号住居址出土土器実測図②
図131　55号住居址出土土器実測図③
図132　55号住居址出土土器実測図④
図133　57号住居址実測図
図134　57号住居址出土土器実測図①
図135　57号住居址出土土器実測図②
図136　59号住居址実測図
図137　59号住居址出土土器実測図
図138　66号・67号住居址実測図
図139　66号住居址出土土器実測図
図140　69号住居址実測図
図141　69B号住居址実測図
図142　69C号住居址実測図
図143　69号住居址出土土器実測図
図144　70号住居址実測図
図145　70号住居址出土土器実測図
図146　72号・73号・74号住居址実測図
図147　72号住居址出土土器実測図
図148　74号住居址出土土器実測図
図149　75号住居址実測図
図150　75号住居址出土土器実測図
図151　76号住居址実測図
図152　76号住居址出土土器実測図
図153　80号住居址実測図
図154　80号住居址出土土器実測図
図155　81号住居址実測図
図156　81号住居址出土土器実測図
図157　86号・89号・90号住居址実測図
図158　86号住居址出土土器実測図
図159　88号住居址実測図
図160　88号住居址出土土器実測図
図161　92号住居址実測図
図162　96号住居址実測図
図163　96号住居址出土土器実測図
図164　103号住居址実測図
図165　103号住居址出土土器実測図
図166　7号土壙実測図
図167　7号土壙出土土器実測図
図168　42号住居址上層出土土器実測図
図169　石製品・金属器類実測図
図170　本村東沖遺跡出土縄文土器拓影
図171　本村東沖遺跡出土弥生後期・北陸系土器実測図
図172　甕形土器型式変遷概念図
図173　土師器編年案①
図174　土師器編年案②
図175　本村東沖遺跡出土須恵器（蓋坏）実測図
図176　須恵器（高坏）実測図
図177　本村東沖遺跡出土須恵器（𤮪・壺・鉢）実測図
図178　本村東沖遺跡出土須恵器（器台）実測図

図179　本村東沖遺跡出土須恵器（甕）実測図
図180　牟礼バイパスＢ地点遺跡出土須恵器実測図
図181　下宇木遺跡５号住居址、二ツ宮遺跡ＦＭ１区９号住居址出土須恵器実測図
図182　地附山古墳群上池ノ平３号墳出土須恵器実測図
図183　地附山古墳群上池ノ平２号墳出土須恵器実測図
図184　湯谷古墳群第１号墳出土須恵器実測図
図185　36号住居址出土石製模造品未製品実測図①
図186　36号住居址出土石製模造品未製品実測図②
図187　36号住居址出土石製模造品未製品実測図③
図188　31号住居址出土子持勾玉実測図
図189　その他の祭祀関連遺物実測図

表　目　次

表１　検出遺構一覧表１
表２　検出遺構一覧表２
表３　検出遺構一覧表３
表４　出土土器観察表１
表５　出土土器観察表２
表６　出土土器観察表３
表７　出土土器観察表４
表８　出土土器観察表５
表９　出土土器観察表６
表10　出土土器観察表７
表11　出土土器観察表８
表12　出土土器観察表９
表13　出土土器観察表10
表14　出土土器観察表11
表15　出土土器観察表12
表16　出土土器観察表13
表17　出土土器観察表14
表18　出土土器観察表15
表19　出土土器観察表16
表20　出土土器観察表17
表21　出土土器観察表18
表22　石製模造品未製品計測表１
表23　石製模造品未製品計測表２
表24　石製模造品未製品計測表３
表25　石製模造品未製品計測表４

第１章　調査経過

１　調査に至る経過

調査地は浅川扇状地扇央の西端、あるいは地附山に連なる崖錐上に立地し、南西へと向かう緩傾斜地に位置する。平成２年将来的に予想される市道拡幅計画と合わせて校舎の老朽化の問題から、新たに長野高等学校の校舎全面改築事業が計画された。事業計画の概要は、現在のグランド部分に新たに校舎棟並びに体育施設棟を建設したのちに、現校舎を破壊しグランドを造成するというものである。

事業予定地は周知の「浅川扇状地遺跡群」の範囲内に位置するために、長野市教育委員会は長野高等学校長の委託を受け、事前に埋蔵文化財の存在の有無を確認するために、試掘調査を実施した。

試掘調査は平成３年３月５日に実施した。調査はグランド内の任意の８地点に試掘坑を設定したが、いずれの地点にても遺物包含層の存在を確認した。グランドは旧来の地形を大幅に切り盛りして造成されており、盛り土の厚さは平均２ｍと厚く、造成に伴う旧表上への撹乱は比較的浅い範囲にとどまっており、遺物包含層への影響はほとんど認められないことが判明した。遺物包含層の厚さは最大で80㎝を測り、平均すれば50㎝ほどと比較的厚い堆積を見せるものであった。

この結果より、校舎改築事業の着手に際しては掘削・基礎杭打ち等の工程により埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性の高い校舎棟2,200㎡・体育施設棟2,800㎡の計5,000㎡について、記録保存を前提とした発掘調査の必要性が確認されるに至った。

本調査は平成３年10月８日より実施し、平成４年２月10日に現場におけるすべての調査を終了した。

グランドより地附山前後方墳を望む

2　調査の体制

（1）平成3年度の調査

調査主体者　長野市教育委員会　教育長　奥村秀雄
総括責任者　市埋蔵文化財センター所長　小山　正
庶　務　係　〃　所長補佐　山中武徳
〃　職員　青木厚子
調　査　係　〃　調査係長　矢口忠良
〃　主事　青木和明
〃　主事　千野　浩
〃　主事　飯島哲也
〃　専門員　中殿章子
〃　専門員　横山かよ子
〃　専門員　森泉かよ子
〃　専門主事　太田重成
〃　専門主事　小松安和
〃　専門主事　羽場卓雄
主任調査員　青木一男（長野県埋蔵文化財センター）
大久保邦彦（長野県埋蔵文化財センター）
調　査　員　寺島孝典
参　加　者　岩崎勇　岩崎利一　植木温子　片山清子　片山実　木内みち子　小林キサ子　小林こまよ　小林養子　小松未喜子　坂野豊実　高垣純子　高橋宮子　西尾千枝　馬場一生　馬場孝子　樋口聖子　藤沢たつい　藤沢渡　堀内克子　松浦サトミ　松沢ナオエ　宮下悦子　宮原孝子　向山純子　山上照世　山田貞子　油井恵子　米山順夫　脇坂智子　小林栄　小林三郎　小林栄美子　花咲玲子　早川久美子　祖山和子　芳川智恵　清水敏雄　征矢野篁子　堀内幸子　佐々木慶子　鷲沢啓子　神頭幸雄　依田武平　山際和子　家塚裕美　高橋みどり　小林　さと　豊森知弘　宮沢けさよ　中島勁　百瀬正　加藤充也　小林志げる　横山ふぢ江　佐藤ひで子　佐藤君江　佐藤はま　佐藤幸子　中山やす子　成田敦子　金子ゆき　吉田久美子　滝沢友江　小出京子　白石章子　中沢信子　薄井美里　田村知子　大村久美子　中沢雄司　倉石和子　倉島紀代子　宮坂義憲　海野悦子　中沢純子　美谷島昇　松沢喜代美　宮沢由美子　宮島静美　夏目紘子　大塚博子　川村けさ江　徳永勝子　大沢寛司　高橋花美
整理作業参加者　岡沢治子　徳成奈於子　池田見紀　小泉ひろ美　西尾千枝　向山純子　武藤信子　窪田節子　関谷きく　溝端広子　宮下勝子　宮崎さちき　米田ちえ子

（2）平成4年度の調査

調査主体者　長野市教育委員会　教育長　奥村秀雄
総括責任者　市埋蔵文化財センター所長　小山　正
庶　務　係　〃　所長補佐　山中武徳
〃　職員　青木厚子
調　査　係　〃　調査係長　矢口忠良
〃　主査　青木和明
〃　主事　千野　浩
〃　主事　飯島哲也
〃　専門員　中殿章子
〃　専門員　横山かよ子
〃　専門員　寺島孝典
〃　専門員　笠井敦子
〃　専門員　山崎佐織
〃　専門員　山田美弥子
〃　専門主事　太田重成
〃　専門主事　小松安和
〃　専門主事　羽場卓雄
調　査　員　青木善子　矢口栄子
整理作業参加者　岡沢治子　徳成奈於子　池田見紀　小泉ひろ美　西尾千枝　向山純子　武藤信子　窪田節子　関谷きく　溝端広子　宮下勝子　宮崎さちき　米田ちえ子

執筆参加者
桜井秀雄（長野県埋蔵文化財センター）
山口　明（長野市立博物館）

事業主体者である長野県長野高等学校におかれては埋蔵文化財保護にたいして深くご理解を頂き絶大なご協力を賜った。厚く御礼申し上げたい。

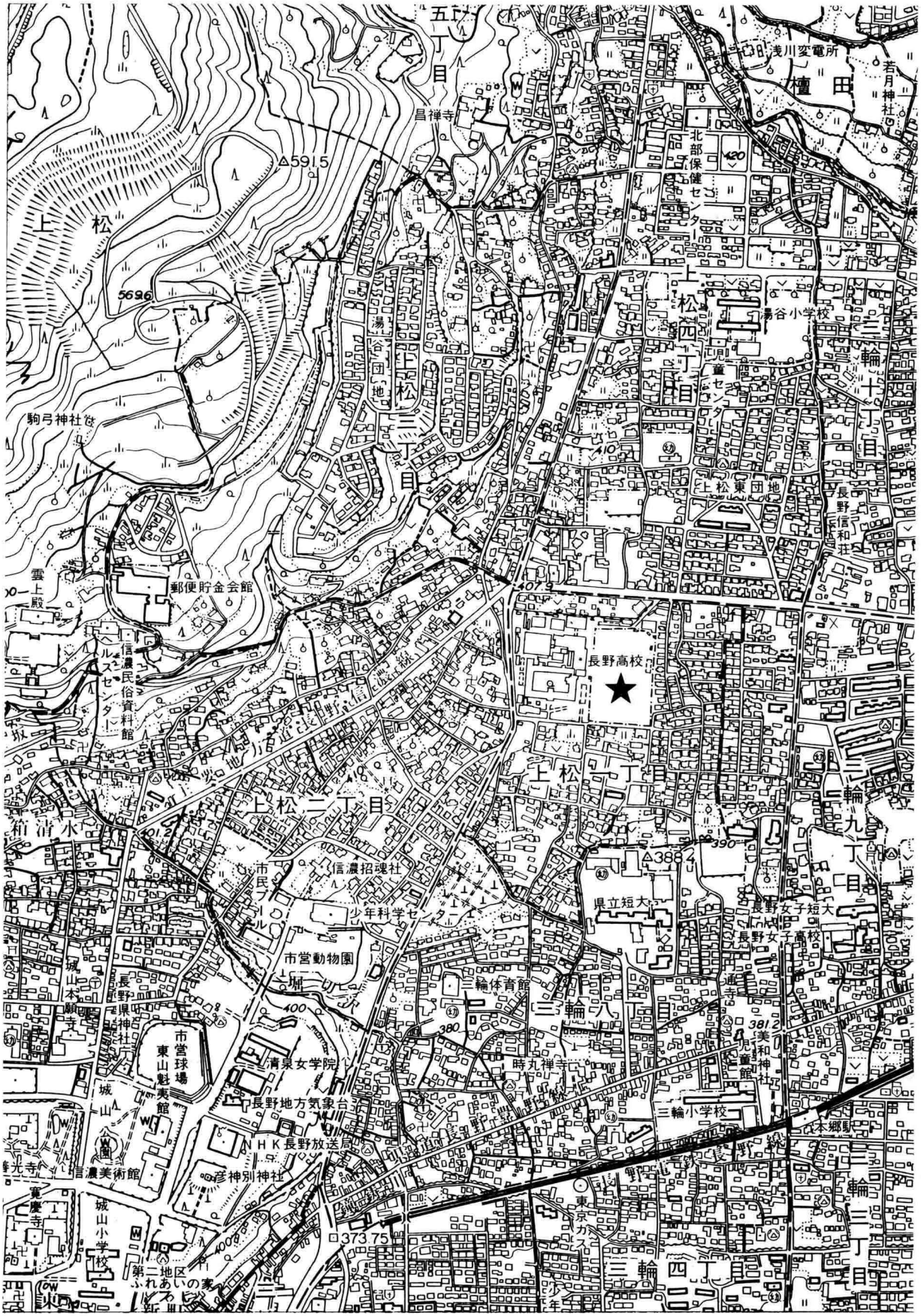


図1　調査地ならびに調査地周辺の地形　（1：10000）

第２章　調査地周辺の考古学的環境

飯綱山を水源とする浅川は山間部を浸食流下した後、浅川東条地籍の通称浅川原口を谷口として盆地に流入し、東南方向を主軸とした平均斜度1/45を計測する典型的な扇状地を形成する。この扇状地には多くの遺跡が存在し、長野市内でも有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。今回の調査地点も浅川扇状地扇央の西端付近に位置し同遺跡群の周知の範囲内に位置する。以下浅川扇状地遺跡群の代表的な遺跡について概説し、周辺の考古学的環境としたい。

旧石器時代は、浅川源流に近い猫又池・大池に遺跡が確認されているが扇状地上にはその存在は確認されていない。

続く縄文時代には、湯谷・赤萱平・刈田・牟礼バイパスＡ地点・徳間榎木田・浅川端の各遺跡が確認されている。これらはともに駒沢川と、浅川流域に集中する傾向が認められ、正式調査を受けた遺跡としては前者に牟礼バイパスＡ地点遺跡、後者に浅川端遺跡がある。牟礼バイパスＡ地点遺跡では前期前葉の住居址１軒、浅川端遺跡では同じく前期前葉の住居址１軒、土壙１基が検出されている。

浅川扇状地の本格的な開発は次ぎの弥生時代から始まったものといえる。主要な遺跡には徳間小学校遺跡・二ツ宮遺跡・本堀遺跡・牟礼バイパスＤ地点遺跡・神楽橋遺跡・浅川端遺跡・吉田高校グランド遺跡等がある。徳間小学校遺跡では中期終末の住居址２軒が検出されている。二ツ宮遺跡・本堀遺跡では中期後半の住居址、溝・土壙等が検出されている。牟礼バイパスＤ地点遺跡では中期栗林式期の住居址４軒・土壙１基、浅川端遺跡では同時期の住居址２軒、土器集積１が検出されているがともに従来不明瞭であった栗林式前葉のもので、良好な資料といえよう。吉田高校グランド遺跡は後期初頭吉田式土器の標識遺跡で、特に第３次調査では住居址10軒からなる当該期の単一集落が良好な状態で検出されている。また二ツ宮遺跡では吉田高校に継ぐ時期の単一集落が検出されており今後の集落遺跡研究に良好な資料を提示している。後期後半の箱清水式期の遺跡はその存在が希薄であり、少なくとも現状では中期～後期初頭の大規模集落と箱清水式期の大規模集落とが分布上一致することはない。この状況が善光寺平の他の地域にもそのままあてはまるか否かは不明であるが、その背後には生産もしくは生活様式の差異といった根本的な要因が認められる可能性もあり今後の重要な検討課題である。

古墳時代に入り浅川扇状地を特徴付けるのは中期集落の展開であろう。有名な駒沢祭祀遺跡をはじめとして、近年牟礼バイパスＢ地点遺跡・下宇木遺跡・二ツ宮遺跡など良好な集落遺跡の検出例が増えており、その集中度は善光寺平の中でも特異である。さらにこれらの諸遺跡では陶邑編年Ｉ型式２段階～４段階に対応すると考えられる古手の須恵器が比較的集中して出土する傾向が顕著であり、この点も善光寺平の中では特徴的である。犀川以北の盟主的な古墳群である地附山古墳群の保有した多量の須恵器の存在を合わせ考えるとき、当該期における浅川扇状地の重要性がにわかにクローズアップされてこよう。

古墳時代後期～平安時代にかけては比較的継続して集落が展開する。浅川西条遺跡・牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点、三輪遺跡などが代表的な遺跡といえよう。ただし大規模集落が長期間にわたって同一箇所に存在するのではなく、時期ごとに立地を異にしつつ中核的な集落が形成されている可能性が高い。

また平安時代末期にはこの地域に信濃28牧のうちの吉田牧が設けられており、駒弓・桐原牧神社や駒沢などはその名残と考えられ、広大な扇状地は好適な放牧地であったと考えられる。

中世にはこの地域は若槻庄の領域となり、若槻里城をはじめ本堀・押鐘・相ノ木・平林・和田などの城館址が存在する。

1．本村東沖遺跡　2．地附山前方後方墳　3．地附山古墳群　4．浅川西条遺跡　5．神楽橋遺跡　6．檀田遺跡
7．湯谷古墳群　8．浅川端遺跡　9．押鐘遺跡　10．盛伝寺居館址　11．長野吉田高校グランド遺跡　12．押鐘城址
13．宇木遺跡　14．相ノ木城址　15～17．三輪遺跡

図2　調査地周辺遺跡分布図　（1：20000）

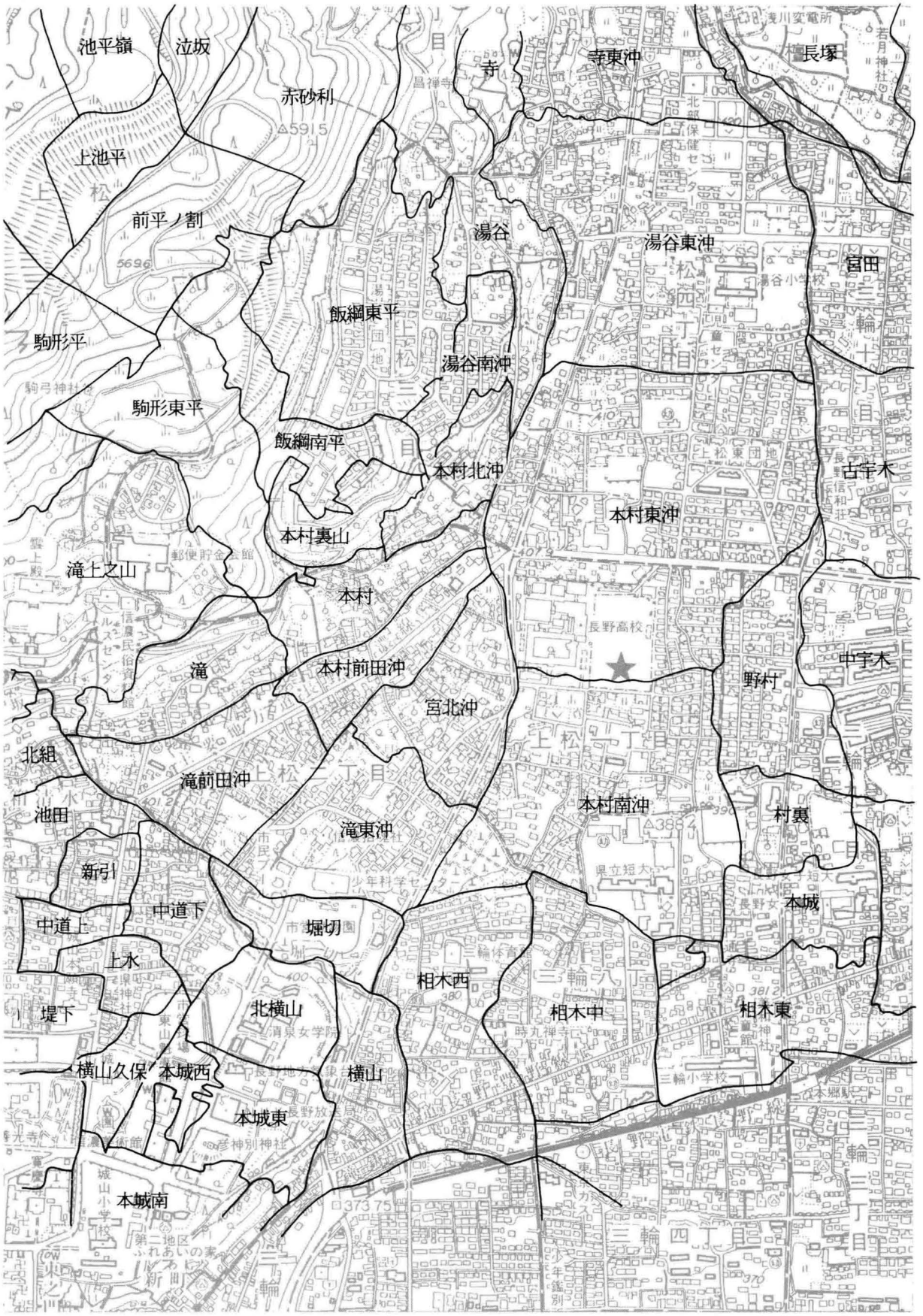


図３　周辺字境図　（１：10000）

第３章　調査概要

調査概要

今回の調査では、確実なものとしては住居址104軒、建物址３棟、土壙７基を検出している。以下時代ごとにその概要について述べる。

縄文時代

今回の調査では明確な遺構の検出はなかったものの、前期～中期にかけての土器がかなり出土している。本調査地南側で宅地開発がなされたときも縄文期の土器が表面採集されているようであり、本調査地の南側の緩斜面に縄文期の遺跡が展開する可能性が高いものといえる。石鏃、石匙等の石器類も検出面より出土している。

弥生時代中期

住居址３軒を検出している。中でも43号住居址からは多量の土器が出土しており、当該期の良好な資料と言える。時期的にはいずれの住居址も弥生時代中期栗林式期の終末期のものと考えられ、従来その様相が不明瞭であった時期だけに貴重といえる。また住居址の平面プランも隅丸長方形・隅丸方形を呈し、後期への移行期の様相をよく示している。

弥生時代後期

確実なものとして住居址41軒、建物址１棟、土壙１基を検出している。時期的には弥生時代後期中葉～後葉にかけてのものが主体をなすものと考えられる。ただし古墳時代中期以降の住居址に破壊されるものが多く、詳細は不明なものが多い。集落の構造としては、地形の傾斜にそって住居址の主軸を設定するものが多い中で、明確にそれとは直交する方向に主軸を設定する住居址が存在する。出土土器の少なさから厳密な時期比定は困難であ

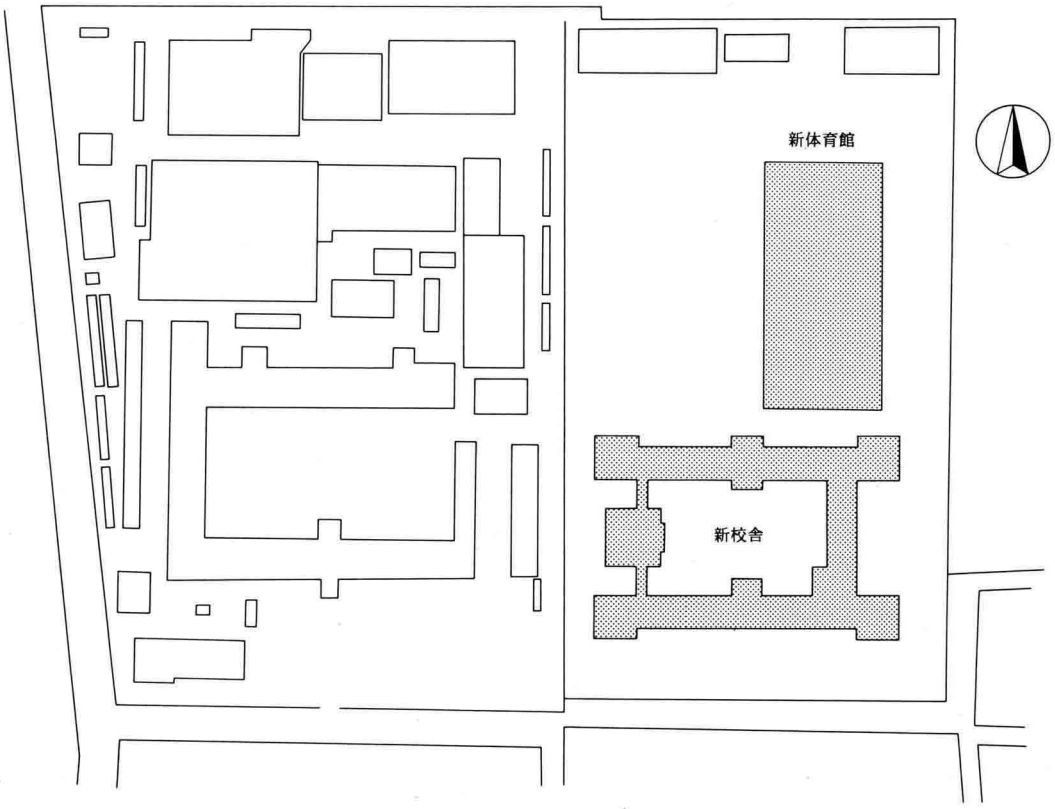


図４　長野高等学校校舎改築配置図

るが、両者が併存してある時期の集落を構成していた可能性はきわめて高いものと考えられる。住居址の主軸の一致を根拠に、同一時期の住居址群をグルーピングしてきた従来の集落研究にたいして、新たな視点を投じる資料となろう。なお同様の事例は浅川扇状地内に位置する長野吉田高校グランド遺跡や、二ツ宮遺跡でも指摘できる可能性があり、今後の検討課題であろう。住居址の形態は隅丸長方形を基本とするが、ほとんどの住居址が4～6本の長方形の主柱配列をとり、また入り口部には出入り口施設に関連すると考えられる2本一対の支柱と、その隣に円形の貯蔵穴を配するというきわめて画一的な構造を取る点も特徴的である。ただし地床炉の位置は新しくなるにつれて、奥壁側柱穴間外側へと移動する傾向が認められる。

焼失住居が多い点も本遺跡の特徴と考えられる。検出した41軒中の9軒が焼失住居址である。しかし焼失住居址床面からの遺物の出土は断片的なものばかりで、不慮の火災等による可能性は少なく、住居建替え等何らかの住居廃絶に伴う意図的な放火といった可能性も存在する。住居廃絶後に多量の円礫とともに土器を投棄する行為の存在もみのがせない。大部分は古墳時代中期以降に行なわれたものだが、18・23・58・61号住居址などのように同じ後期の中で投棄されているものが存在する。何からの宗教的、もしくは禁忌にもとづく行為であるのか、その性格は一概に断定できぬものの重要な検討課題であろう。

出土土器で特徴的なものには、北陸系土器があるが、これについては第5章でふれる。

古墳時代前期

弥生時代後期の集落はそのまま継続することなく、後期終末に一旦廃絶するようである。続く古墳時代前期も本遺跡では住居址2軒を検出したのみである。

古墳時代中期～後期

浅川扇状地上に立地する他の遺跡と同様、本遺跡でも弥生時代以降再び大規模な集落が展開するのは、古墳時代中期になってからである。今回の調査では、確実なもので56軒の住居址を検出した。当然すべてが同一時期の所産ではなく、5世紀中葉から6世紀初頭にかけての大きく三時期のものが認められる。

特に5世紀後半以降の住居址には以下のような特筆すべき点が認められる。

・一辺8.00m以上の大型の住居址が集中する傾向が強い。

・出現期のカマドとともに、間仕切り溝やベッド状遺構などの特殊な施設を、画一的とも言いうる状況で有する住居址が多い。

・古式須恵器が比較的多量に伴う。

・36号住居址のように大量の石製模造品の未製品を出土したり、27号住居址のように臼玉・管玉・石製模造品未製品を出土するなど、製作工人に関連する可能性が高い住居址が存在する。

・子持ち勾玉(37号住居址)・土鈴(47号住居址)など祭祀的な性格を有する特殊な遺物を出土する住居址が存在する。

以上の特殊性ならびに集落規模からすれば、本遺跡は当該期における中核的集落であった可能性は容易に推定しうる。調査地は地附山の直下に位置し同山頂に立地する地附山古墳群を容易に仰ぎ見ることができる。地附山古墳群は山頂に立地する地附山前方後方墳とその直下の平坦地に展開する上池ノ平1～6号墳によって構成されるが、上池ノ平1～5号墳は昭和61年に発掘調査が行なわれている。その結果、5世紀後半に比定される地附山前方後方墳に続き、上池ノ平1号・6号→2号・3号→5号・4号といった構築順序が想定され、最後の4号墳の構築は6世紀前半と考えられている。

本遺跡で検出された集落の特殊性を考慮するならば、犀川以北の当該期の盟主的な古墳群である地附山古墳群との関連を想定することは容易であり、あるいは本遺跡が地附山古墳群造営に直接係った集落として理解することも、あながち根拠のないことではなかろう。

表１　検出遺構一覧表①

遺構名	時代	形態	規模(m)	内部施設等	出土遺物等
2号住居址	平安	隅丸方形	3.60×5.00	カマド	
3号住居址	古墳	隅丸方形	4.70×4.80		
4号住居址	古墳・3	隅丸方形	4.80×4.50		覆土内土器投棄
5号住居址	古墳・6	隅丸方形	4.30×5.40		覆土内土器投棄・須恵器
6号住居址	古墳	隅丸方形	4.30×3.80	カマド	
7号住居址	古墳	隅丸方形	4.80×4.40		
8号住居址	弥生・後	隅丸長方形	5.40×6.20		
9号住居址	古墳	隅丸方形	×4.60		
10号住居址	古墳	隅丸方形	5.00×5.90	地床炉・壁周溝	
11号住居址	弥生・後	隅丸長方形	7.40×9.10		覆土内土器投棄（古墳前期）・北陸系土器
12号住居址	古墳・3	隅丸方形	9.60×10.5	ベッド状遺構・間仕切り溝・地床炉	須恵器・砥石・石製模造品未製品
13号住居址	古墳・4	隅丸方形	7.40×7.40	間仕切り溝	
14号住居址	古墳・3	隅丸方形	8.40×8.40	ベッド状遺構	鉄製品・石製紡錘車
15号住居址	古墳・4	隅丸方形	7.30×7.40	カマド・間仕切り溝・壁周溝	鉄製品・石製紡錘車・砥石
16号住居址	弥生・後	隅丸方形	5.50×5.90	地床炉	覆土内土器投棄
17号住居址	古墳・5	隅丸方形	5.80×5.80	地床炉	
18号住居址	弥生・後	隅丸長方形	6.80×9.90	地床炉・入り口施設・貯蔵穴	覆土内土器投棄・有孔石製品
19号住居址	弥生・後	隅丸長方形	5.70×9.30	入り口施設・貯蔵穴	覆土内土器投棄砥石
20号住居址	弥生・後	隅丸長方形	4.40×6.90	地床炉・入り口施設・貯蔵穴	
23号住居址	弥生・後	隅丸長方形？		入り口施設・貯蔵穴	
24号住居址	古墳				
25号住居址	古墳	隅丸方形	6.00×	地床炉	
26号住居址	古墳・4	隅丸方形	5.90×5.50	カマド	須恵器
27号住居址	古墳・4	隅丸方形	6.00×5.50	工作ピット・ベッド状遺構・間仕切溝	須恵器・管玉・白玉・鉄製品・石製模造品未製品
29号住居址	奈良	隅丸方形	4.80×4.80	カマド	
30号住居址	古墳・4	隅丸方形	5.40×5.70	カマド・間仕切り溝・壁周溝	須恵器・石製模造品
31号住居址	古墳・4	隅丸方形	×8.00	カマド・ベッド状遺構	須恵器・子持勾玉
32号住居址	弥生・後	隅丸長方形？			
33号住居址	古墳	隅丸方形？			
34号住居址	弥生・後	隅丸長方形？	4.40×		
35号住居址	弥生・後	隅丸長方形？			
36号住居址	古墳4・5	隅丸方形	7.30×7.50	カマド・ベッド状遺構・壁周溝・円礫敷設	覆土内土器投棄・石製模造品未製品
37号住居址	古墳・4	隅丸方形	6.20×6.30	カマド・ベッド状遺構・間仕切り溝・壁周溝	
38号住居址	弥生・後	隅丸長方形	5.90×9.70	地床炉・焼失住居	
39号住居址	古墳	隅丸方形	3.90×3.80	壁周溝	砥石
40号住居址	弥生・後	隅丸長方形	5.10×	焼失住居	
41号住居址	弥生・後	隅丸長方形	3.70×6.00	入り口施設・貯蔵穴	北陸系土器
42号住居址	弥生・後	隅丸長方形	6.50×	入り口施設	石製紡錘車（古墳）
43号住居址	弥生・中	隅丸長方形	5.80×8.50	地床炉	大型蛤刃石斧
44号住居址	古墳	隅丸方形	5.00×		
45号住居址	弥生・後	隅丸長方形	5.00×8.80	地床炉・焼失住居	
46号住居址	古墳・前	隅丸方形	3.80×3.50	貯蔵穴・壁周溝	覆土内土器投棄
47号住居址	古墳	隅丸長方形	3.00×3.70	壁周溝	土鈴
48号住居址	弥生・後	隅丸長方形	6.00×		

表２　検出遺構一覧表②

遺構名	時代	形態	規模(m)	内部施設等	出土遺物等
49号住居址	弥生・後	隅丸長方形	3.90×	地床炉	
50号住居址	古墳・6	隅丸方形	4.20×	カマド・ベッド状遺構・間仕切り溝	
51号住居址	古墳・6	隅丸方形	7.90×8.30	カマド・間仕切り溝	鉄製品
52号住居址	弥生・後	隅丸長方形	4.90×	地床炉	
54号住居址	古墳・3	隅丸方形	7.80×8.50	地床炉・間仕切り溝・壁周溝	
55号住居址	古墳・3	隅丸方形	10.20×	地床炉・間仕切り溝・壁周溝	
56号住居址	平安	隅丸方形	4.50×	カマド	
57号住居址	古墳・6	隅丸方形	5.10×4.70	石組カマド	須恵器
58号住居址	弥生・後	隅丸長方形	4.80×6.00	地床炉・入り口施設・貯蔵穴	覆土内土器投棄・磨製石鏃
59号住居址	古墳・6	隅丸方形？	8.70×		
60号住居址	弥生・後	隅丸長方形	3.30×4.20	地床炉・貯蔵穴・　焼失住居	
61号住居址	弥生・後	隅丸長方形	4.40×6.00	地床炉・入り口施設・貯蔵穴　焼失住居	覆土内土器投棄・北陸系土器
62号住居址	古墳	隅丸方形		間仕切り溝・壁周溝	
63号住居址	古墳	隅丸方形	4.00×	壁周溝	
64号住居址	弥生・後	隅丸長方形	3.50×4.70	入り口施設・貯蔵穴	
65号住居址	弥生・後	隅丸長方形	5.30×		
66号住居址	古墳・4	隅丸方形	6.50×6.90	カマド２・間仕切り溝・壁周溝	石製紡錘車
67号住居址	弥生・後	隅丸長方形	5.00×7.50	入り口施設・貯蔵穴	
68号住居址	古墳	隅丸方形	5.30×5.80		
69Ａ号住居址	古墳	隅丸方形	9.70×9.20	カマド２・間仕切り溝・壁周溝	須恵器
69Ｂ号住居址	古墳	隅丸方形	6.00×5.00	間仕切り溝	
69Ｃ号住居址	古墳	隅丸方形	5.20×4.70		
70号住居址	古墳・6	隅丸方形	8.20×	間仕切り溝	
71号住居址	弥生・後	隅丸長方形	5.30×6.60	地床炉・貯蔵穴	
72号住居址	古墳	隅丸方形		壁周溝	
73号住居址	弥生・後	隅丸長方形		地床炉	
74号住居址	古墳4・5	隅丸方形	6.40×	カマド・間仕切り溝・壁周溝	
75号住居址	古墳5・6	隅丸方形	9.50×9.40	カマド・間仕切り溝・壁周溝	須恵器・土製円板
76号住居址	古墳5・6	隅丸方形	8.10×8.60	カマド２・地床炉・間仕切り溝・壁周溝	
77号住居址	弥生・後	隅丸長方形	4.50×5.50	地床炉・入り口施設・貯蔵穴	
78号住居址	弥生・後	隅丸長方形	3.30×4.30	地床炉・貯蔵穴	
79号住居址	古墳	隅丸方形		間仕切り溝	
80号住居址	古墳・6	隅丸方形	5.90×5.50	カマド・ベッド状遺構	
81号住居址	古墳・6	隅丸方形	6.30×6.70	カマド・壁周溝	
82号住居址	弥生・後	隅丸長方形	4.70×	地床炉	
83号住居址	弥生・後	隅丸長方形	4.40×8.50	地床炉・炉縁石　焼失住居	
84号住居址	弥生・後	隅丸長方形	5.20×	入り口施設・貯蔵穴	
85号住居址	弥生・後	隅丸長方形	4.20×5.80	地床炉・入り口施設・貯蔵穴	
86号住居址	古墳・6	隅丸方形	9.30×	カマド・貯蔵穴	
87号住居址	弥生・後	隅丸長方形	4.90×6.20	地床炉・入り口施設　焼失住居	
88号住居址	古墳・6	隅丸方形	6.00×	カマド・間仕切り溝・壁周溝	
89号住居址	古墳	隅丸方形	8.00×7.50	カマド・間仕切り溝	
90号住居址	弥生・後	隅丸長方形	4.10×5.30	地床炉・貯蔵穴・壁周溝	
92号住居址	古墳	隅丸方形	5.80×5.50	カマド・間仕切り溝・壁周溝	覆土内土器投棄

表３　検出遺構一覧表③

遺　構　名	時　代	形　　態	規模(m)	内　部　施　設　等	出　土　遺　物　等
96号住居址	古墳	隅丸方形	6.30×6.30	カマド・間仕切り溝・壁周溝	
97号住居址	弥生・後	隅丸長方形	4.70×8.20	地床炉・入り口施設・間仕切り溝	
98号住居址	古墳	隅丸方形	6.70×6.60	カマド	
99号住居址	古墳	隅丸方形	6.00×6.00	カマド・壁周溝	
100 号住居址	弥生・後	隅丸長方形	6.90×9.20	地床炉・入り口施設・貯蔵穴	北陸系土器
101 号住居址	弥生・後	隅丸長方形	3.10×3.80	地床炉	
102 号住居址	弥生・中	隅丸方形	5.10×5.70	地床炉・壁周溝	
103 号住居址	古墳・5	隅丸方形	5.40×5.50	カマド・地床炉・壁周溝	
104 号住居址	弥生・中	隅丸長方形	3.50×5.00		
105 号住居址	弥生・後	隅丸長方形	3.40×5.10	地床炉・入り口施設・貯蔵穴・　焼失住居	北陸系土器
106 号住居址	古墳	隅丸長方形	3.50×	焼失住居	
107 号住居址	古墳	隅丸方形？			
108 号住居址	古墳	？			
109 号住居址	古墳	？		壁周溝	
110 号住居址	弥生・後	隅丸長方形	4.90×6.90	地床炉・入り口施設・貯蔵穴　焼失住居	北陸系土器
111 号住居址	弥生・後	隅丸長方形？			
建物址１	弥生・後				高杯
建物址２	平安				
建物址３	平安				
１号土壙	平安	不整円形	3.10×3.80		
６号土壙	古墳	隅丸方形	3.50×3.50		
７号土壙	古墳・5	隅丸方形	2.20×2.20		鉄製品
９号土壙	古墳	不整円形	3.20×2.20		
10号土壙	古墳	円形	0.80×0.80		
13号土壙	古墳	隅丸方形	2.90×		
15号土壙	弥生・後	円形	1.00		

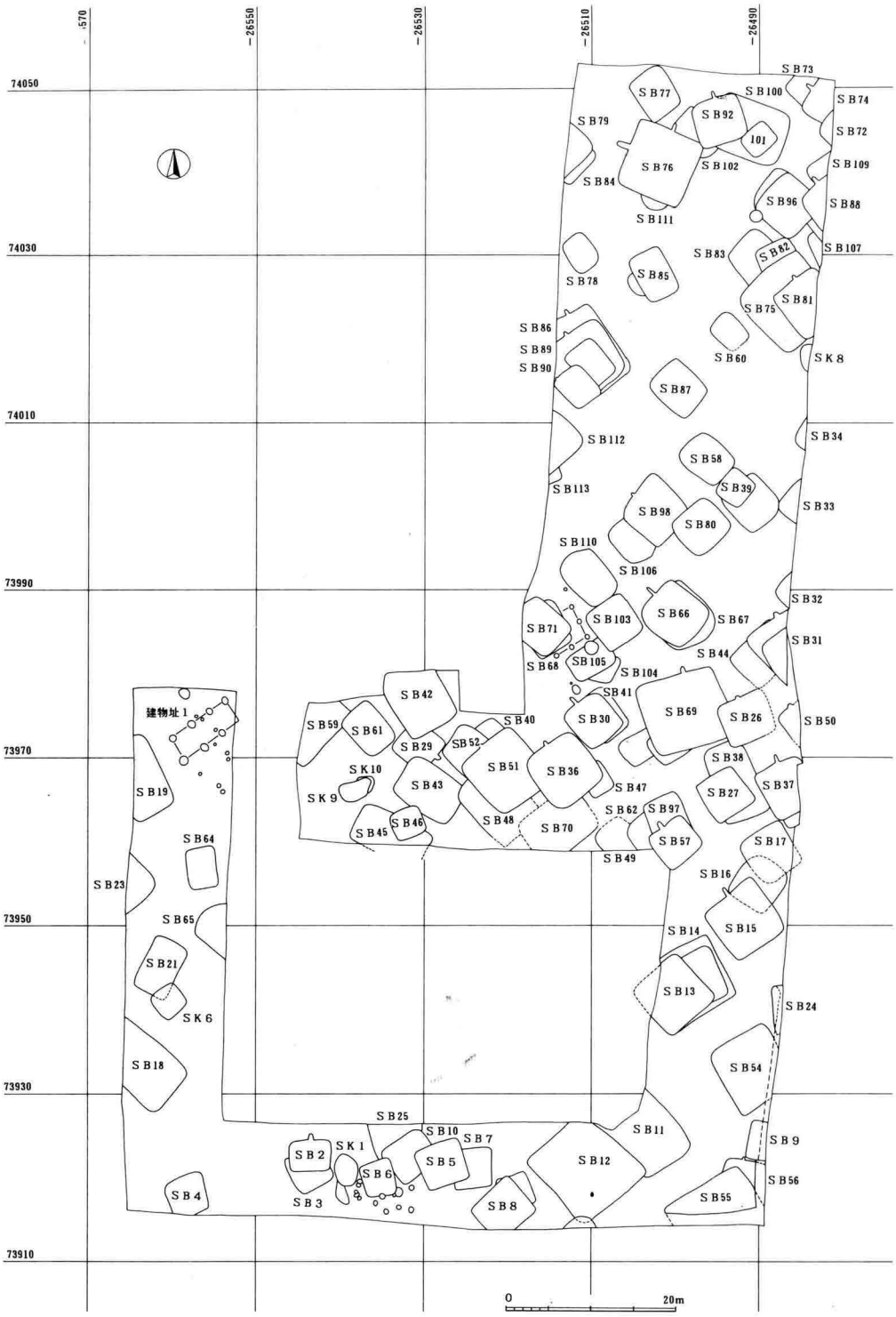


図５　調査区全測図①　（１：800）

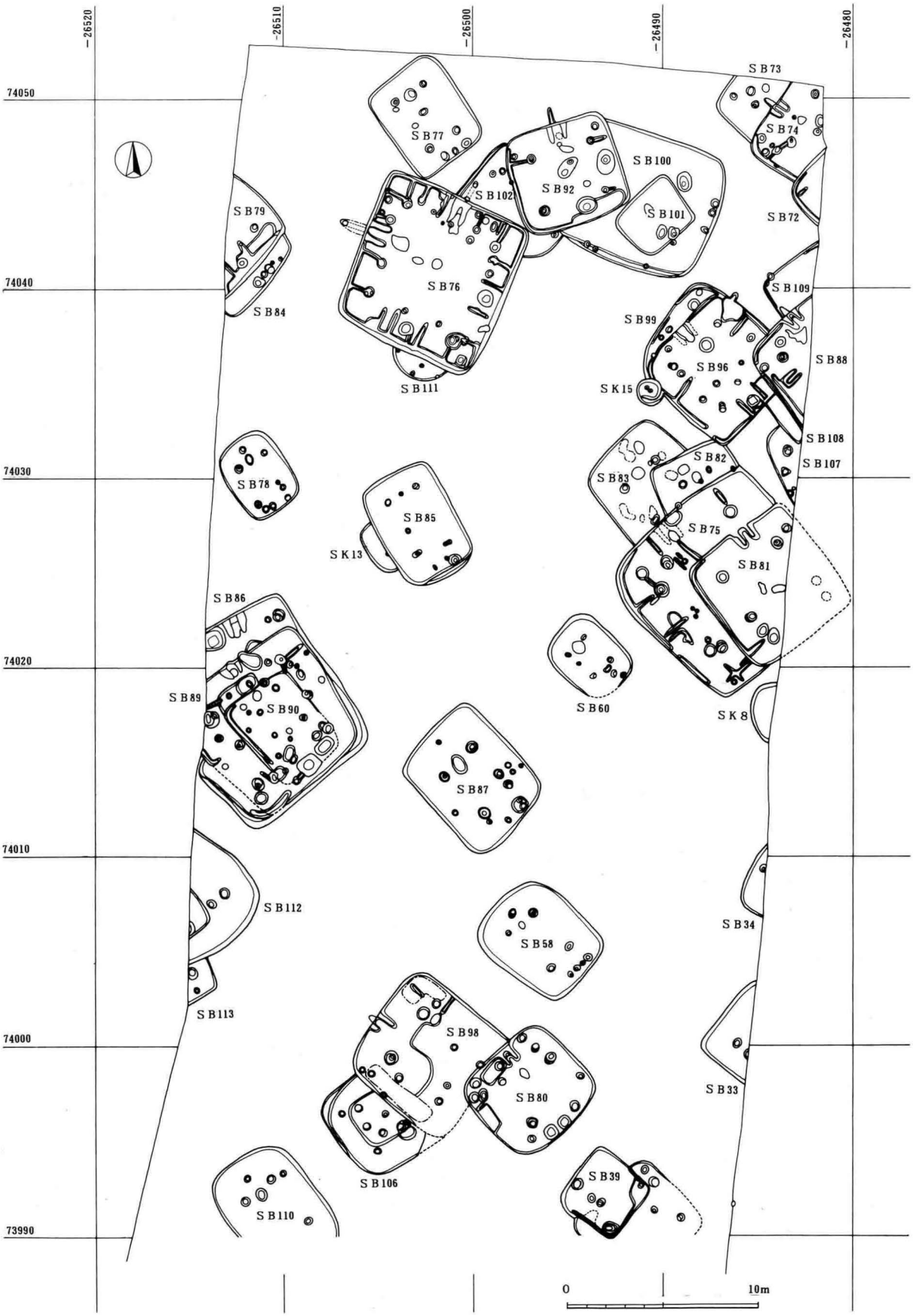


図6　調査区全測図②　（1：300）

図７　調査区全測図③　（１：300）

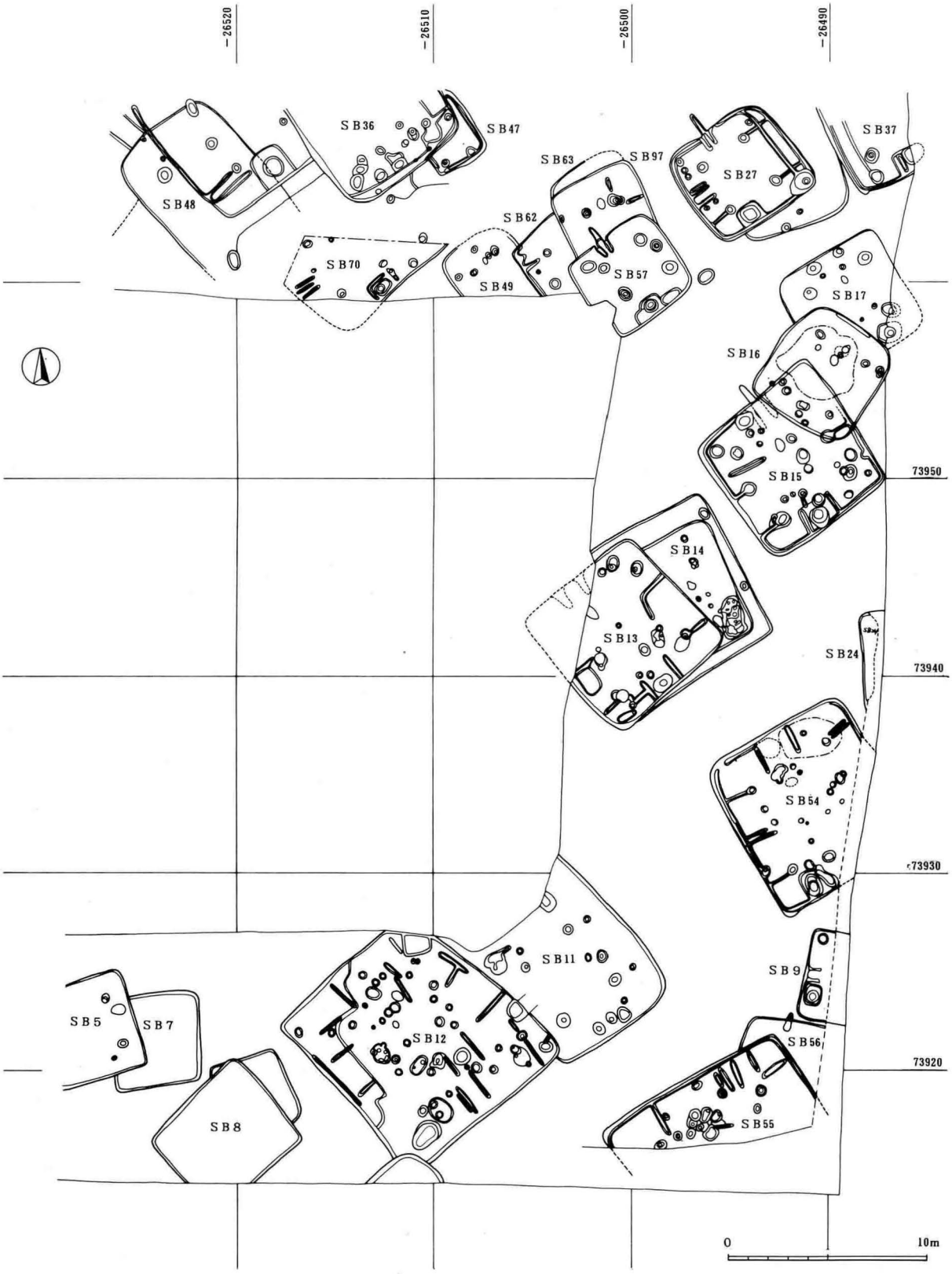


図８　調査区全測図④　（１：300）

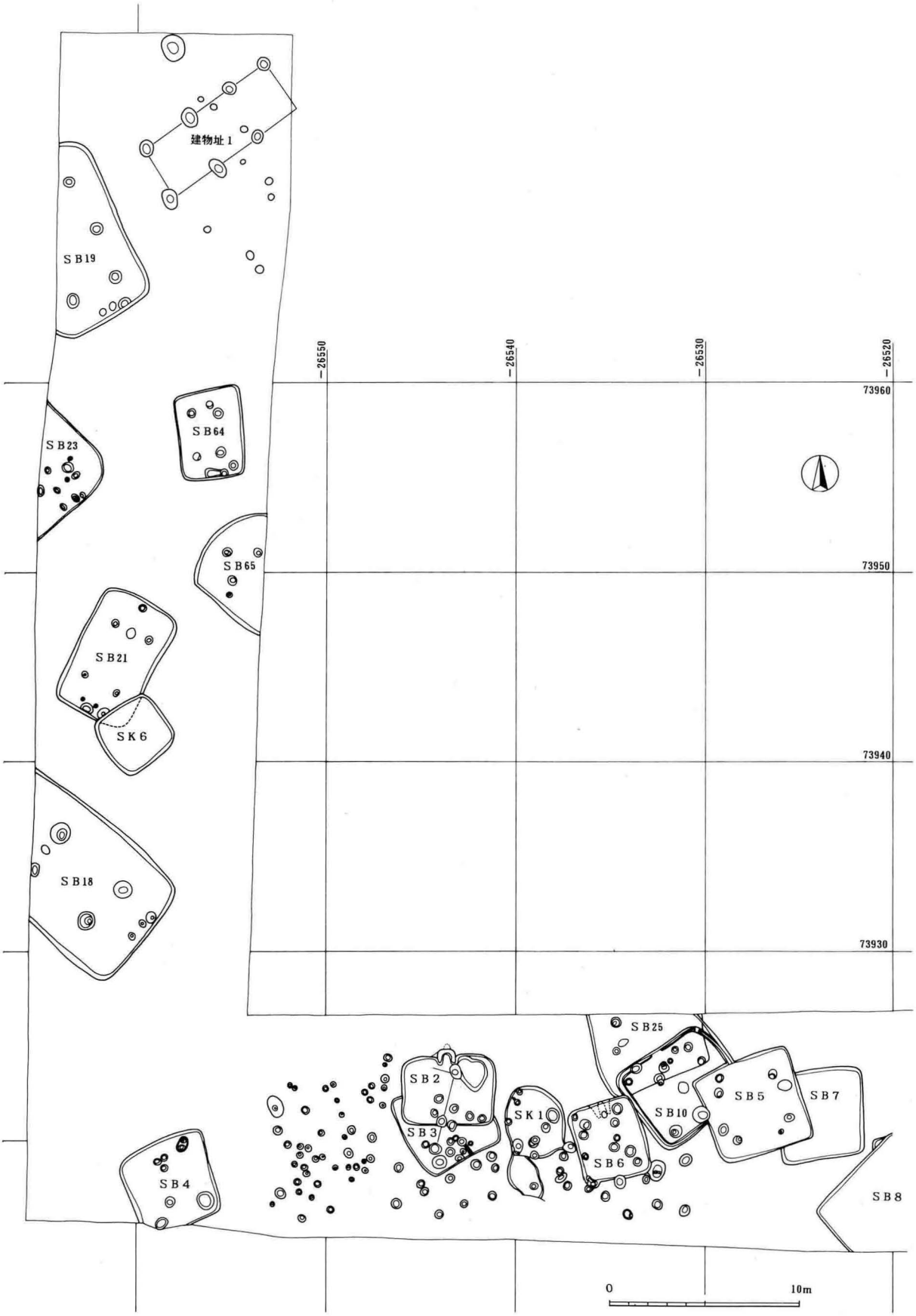


図9　調査区全測図⑤　（1：300）

第４章　遺構と遺物

１　弥生時代中期の遺構と遺物

43号住居址（図10・11）

48号・46号・29号住居址に切られる。確認面からの掘り込みは比較的浅く住居址南東側は不明である。

平面プランは5.8×8.5mほどの隅丸長方形が予想される。奥壁側の壁高は24cmを測る。柱穴はＰ１～Ｐ10が検出されているが、主柱穴はＰ１～Ｐ３と考えられ、４本長方形の柱穴配列が予想される。炉は住居址中央に位置するものと考えられ、深さ５cmほどの地床炉である。床面は比較的明瞭であったが貼り床等の施設は認められない。奥壁側主柱穴間中央付近を中心に床面上より多量の土器が出土している。

出土土器には壺（１～４）・甕（５・７）・台付甕（６）・片口鉢（８）・蓋（９）があるが図示したものはすべて床面に接する状況で出土したものである。壺はいずれも太頸化の傾向が顕著で、また（２）のように緩やかにに屈曲して内湾ぎみに立ち上がる有段口縁壺の存在などに新しい傾向が認められ、甕も（７）のように頸部に簾状文を施文するものの存在する点新しい傾向と考えられよう。時期的には弥生時代中期後半栗林式期の最終末に位置付けられるものと考えられる。

浅川扇状地遺跡群では栗林式期の隅丸方形プランの住居址はこの住居址が初例で、中期終末段階で既に後期型の住居址が出現してくる点確認しえたのは重要な意味を持つであろう。

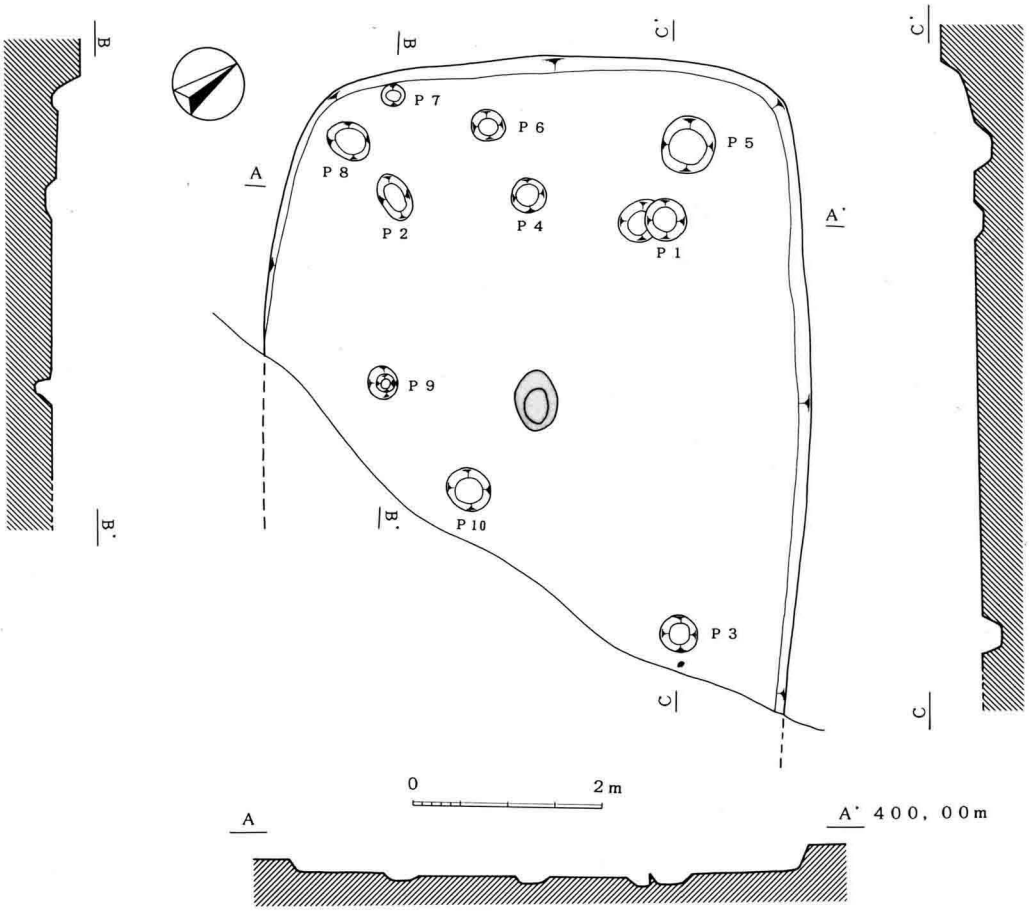
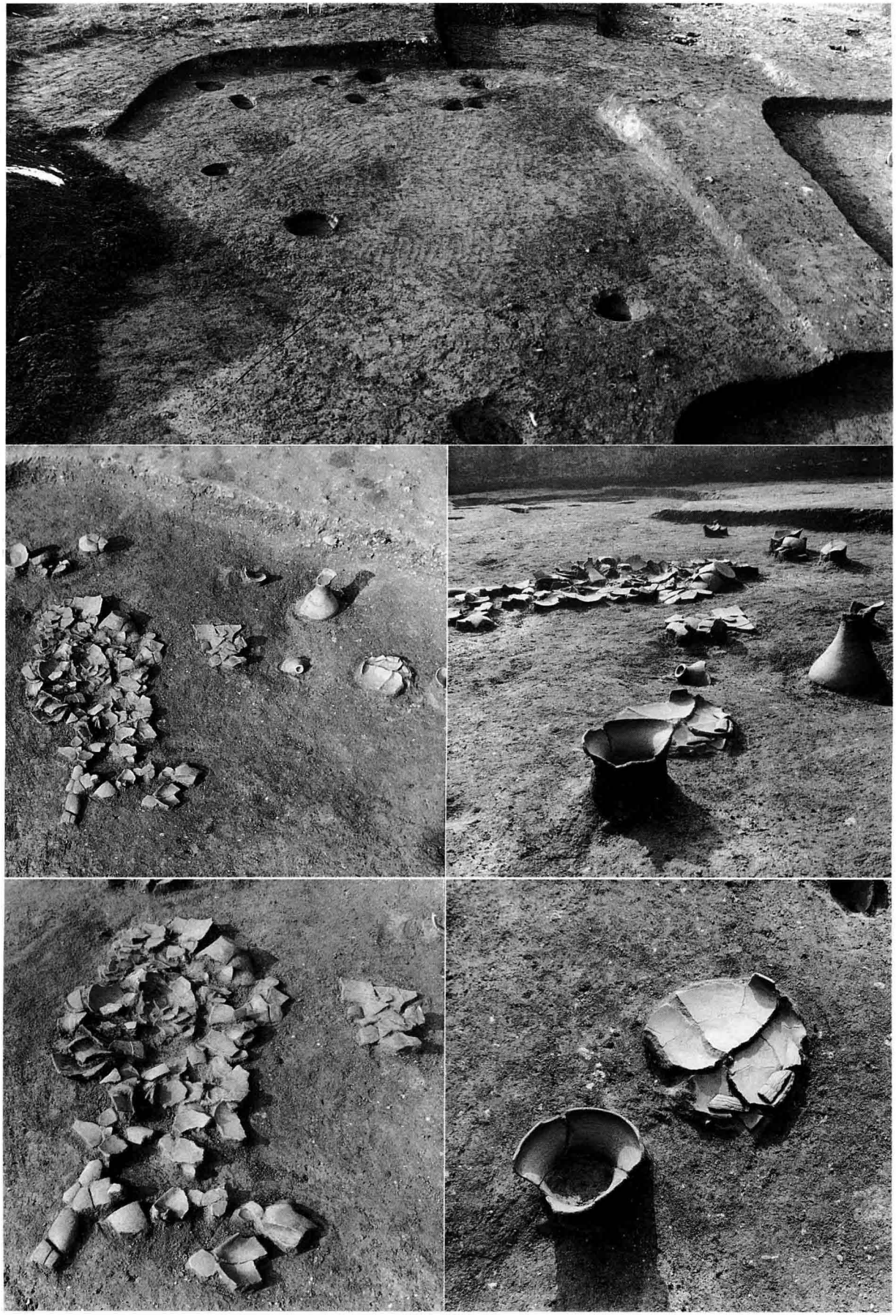


図10　43号住居址実測図　（１：80）



43号住居址

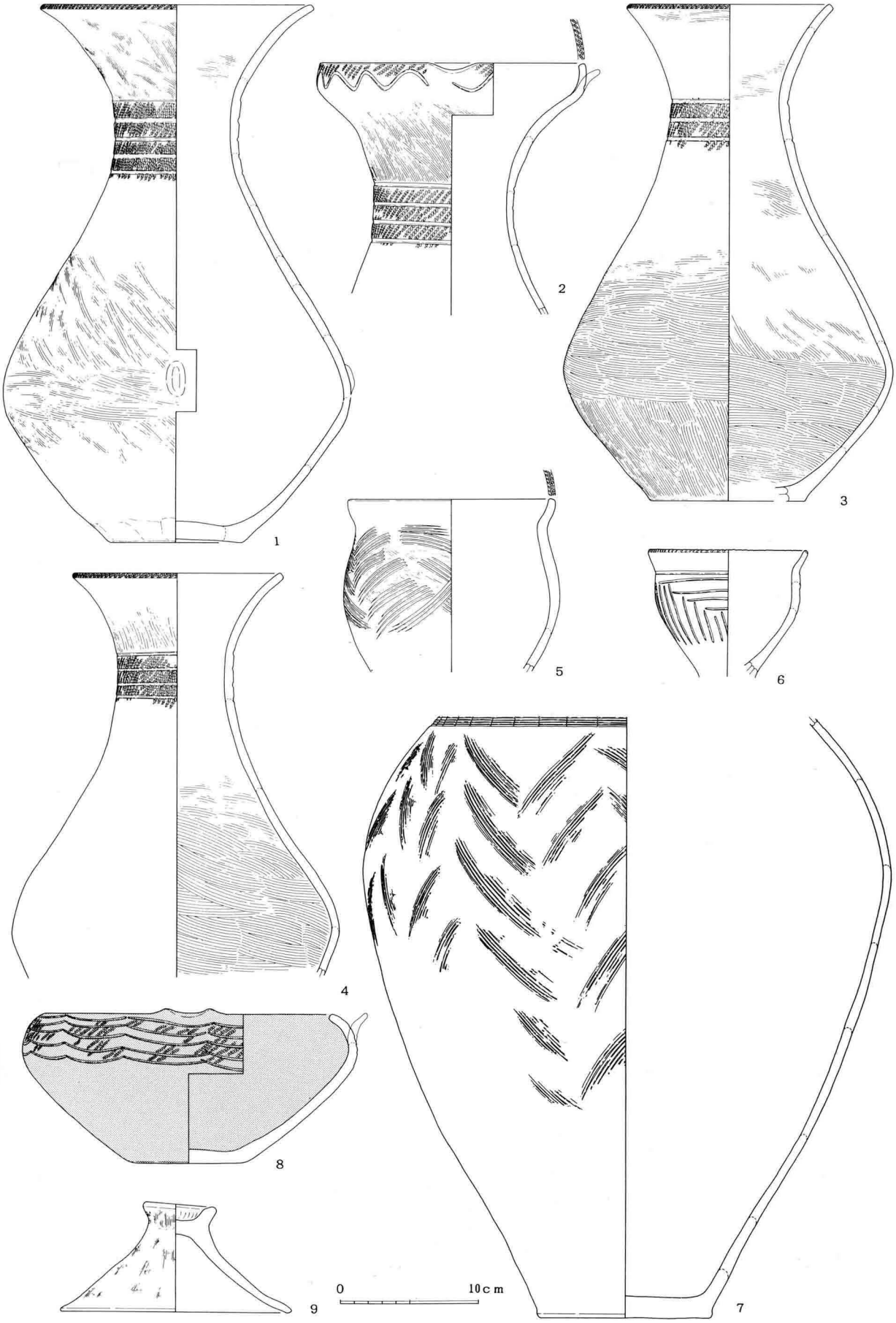


図11　43号住居址出土土器実測図

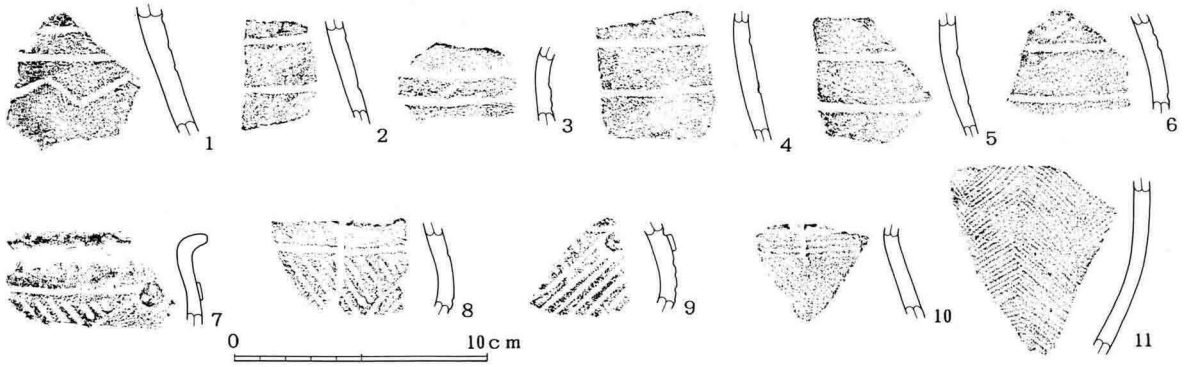


図12　43号住居址出土土器拓影

102号住居址　（図13・14）

古墳時代の76号・92号住居址、弥生時代後期の100号住居址に切られ、全体の1/3ほどを検出したにすぎない。5.05×5.75mほどの隅丸方形プランが予想される。柱穴はP1～P4を検出したが主柱穴配列は不明である。

炉は住居址中央に位置し、深さ10cmほどの地床炉である。

奥壁際に幅15cm、深さ5cmほどの壁周溝が検出されているが全周はしない。

床面より壺（1）と高杯（2）が出土している。弥生時代中期栗林式期の最終末のものといえる。

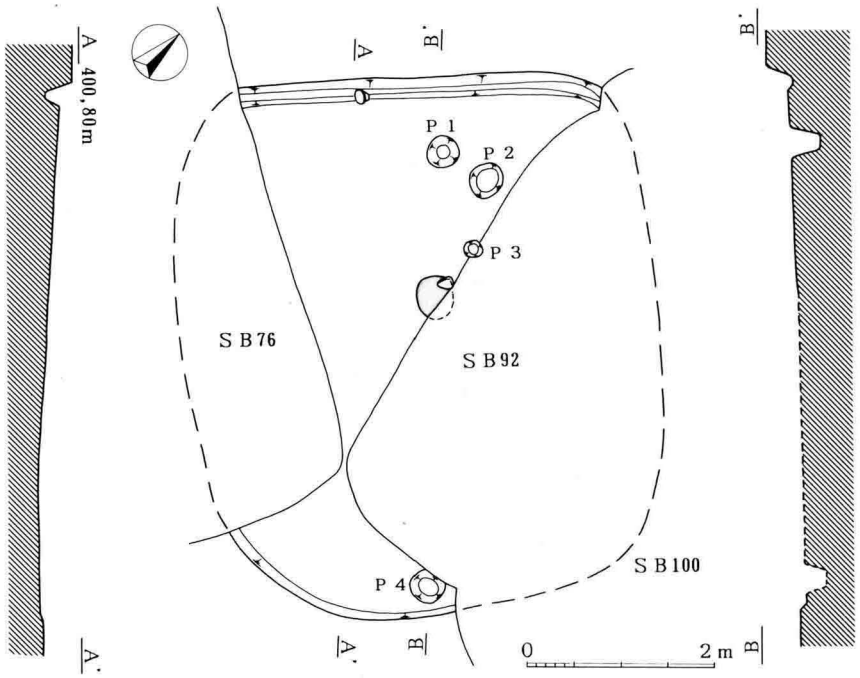


図13　102号住居址実測図

102号住居址

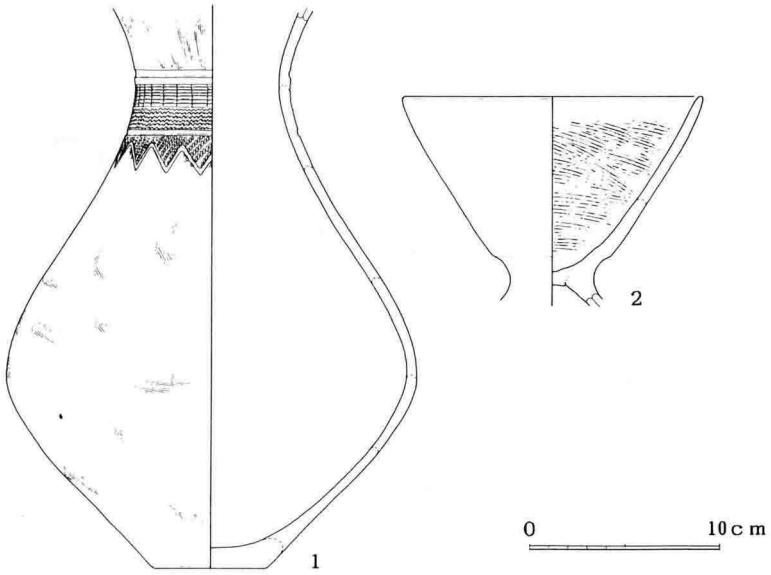


図14　102号住居址出土土器実測図

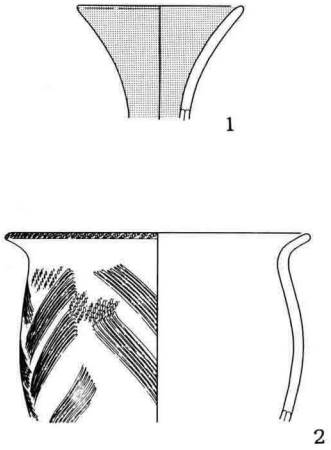


図15　104号住居址出土土器実測図

104号住居址　（図７・15・79）

弥生時代後期の105号住居址に北側の大半を切られ、詳細は不明である。平面プランは3.50×5.0mほどの隅丸長方形プランが予想される。柱穴は２本検出しているが位置的には不規則なもので、主柱穴配列等は不明である。炉等その他の施設も確認されていない。床面は比較的明瞭なものであったが貼り床等の施設はない。

床面より壺口縁部（２）、ならびに甕（２）が出土している。弥生中期栗林式期終末期に位置付けられよう。

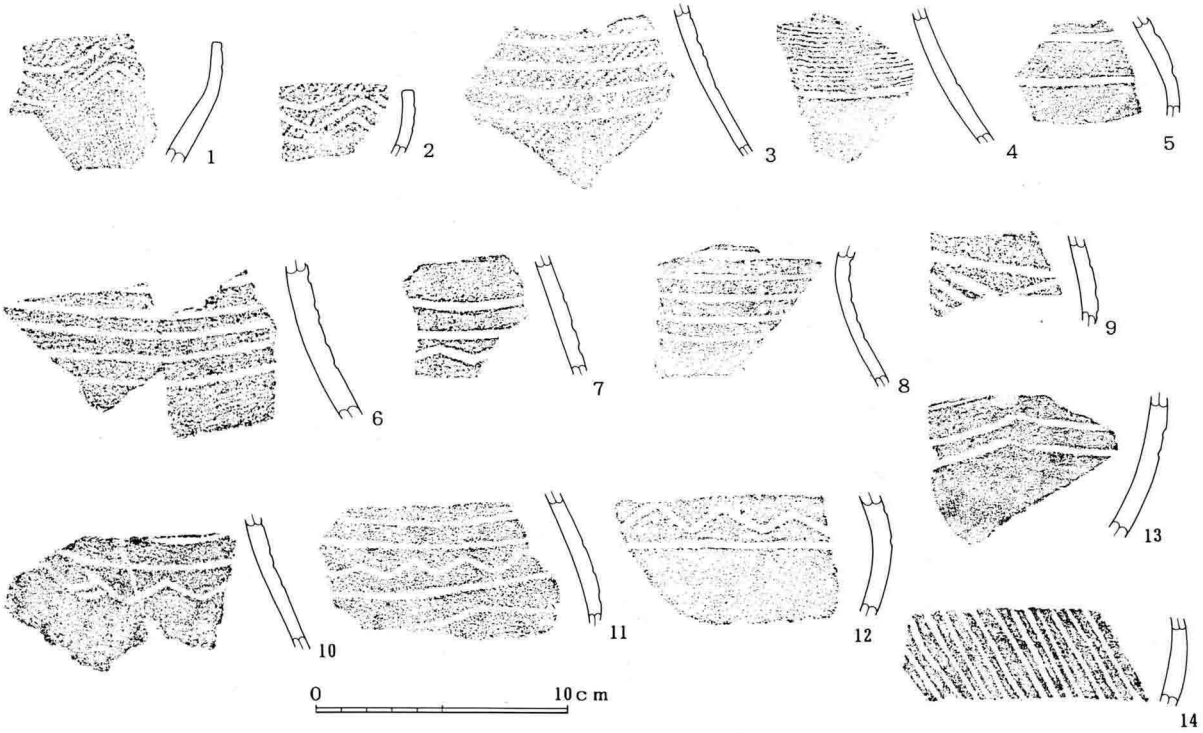


図16　遺構外出土中期弥生土器拓影

2　弥生時代後期の遺構と遺物

11号住居址　（図17～19）

西側は古墳時代の12号住居址に切られ、北側は調査区外となる。平面プランは7.4×9.1mほどのやや大型の隅丸長方形が予想される。柱穴はP1～P13まで検出したが、主柱穴はP1～P5の6本長方形配置と考えられる。P6・P7は出入り口施設に関連する2ケ一対の支柱穴で、となりのP8は貯蔵穴と考えられる。また壁際のP9・P10も支柱穴と考えられる。炉はP2・P3間やや東壁寄りのところに、深さ4cmほどの地床炉を検出している。副炉と考えられ、主炉は奥壁側柱穴間中央付近に位置するものと思われる。周溝等その他の施設は確認されていない。覆土下層より多量の円礫と共に古式土師器が出土している。本住居廃絶後の埋没過程のある段階にて、投棄されたものと考えられる。

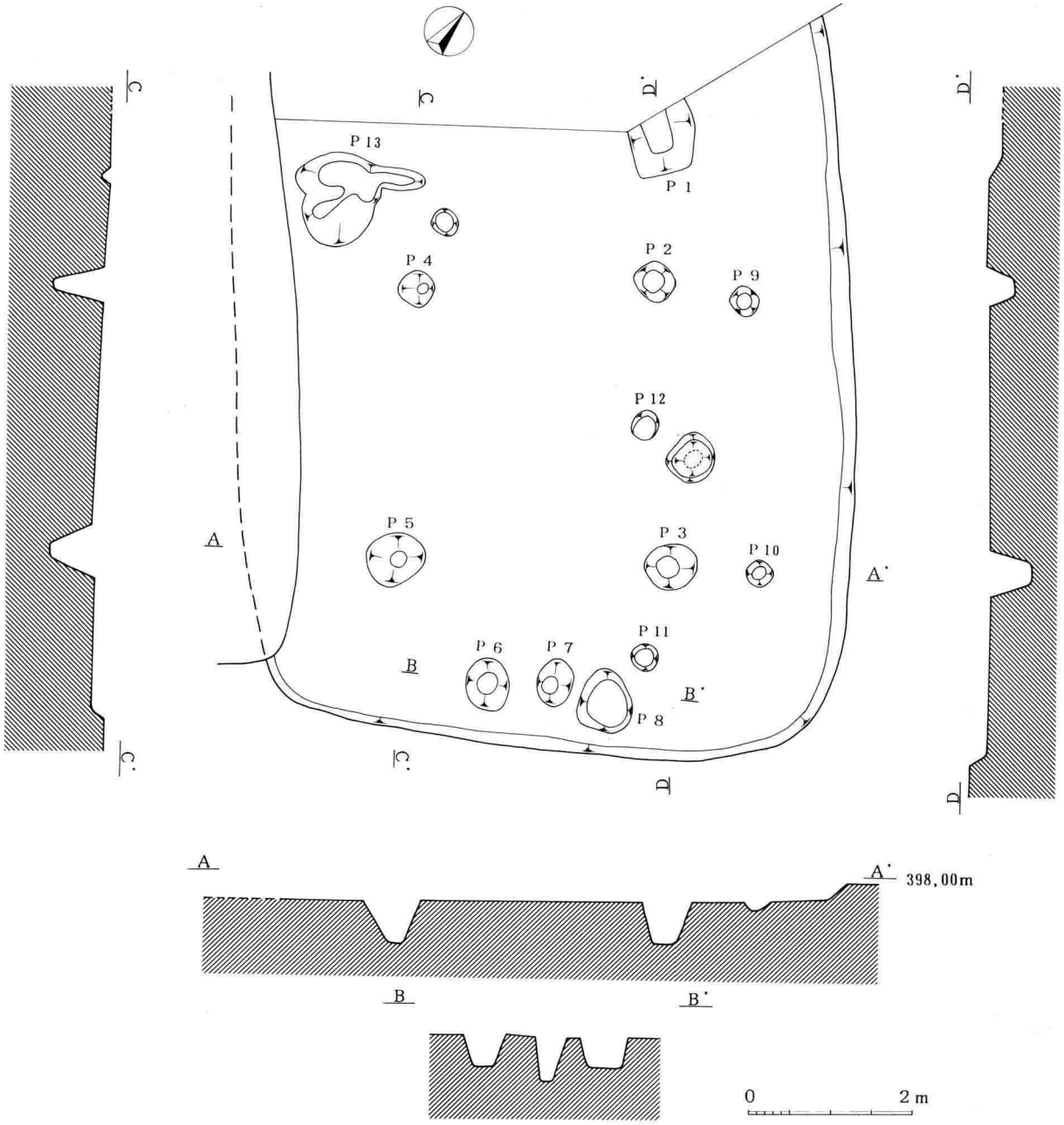
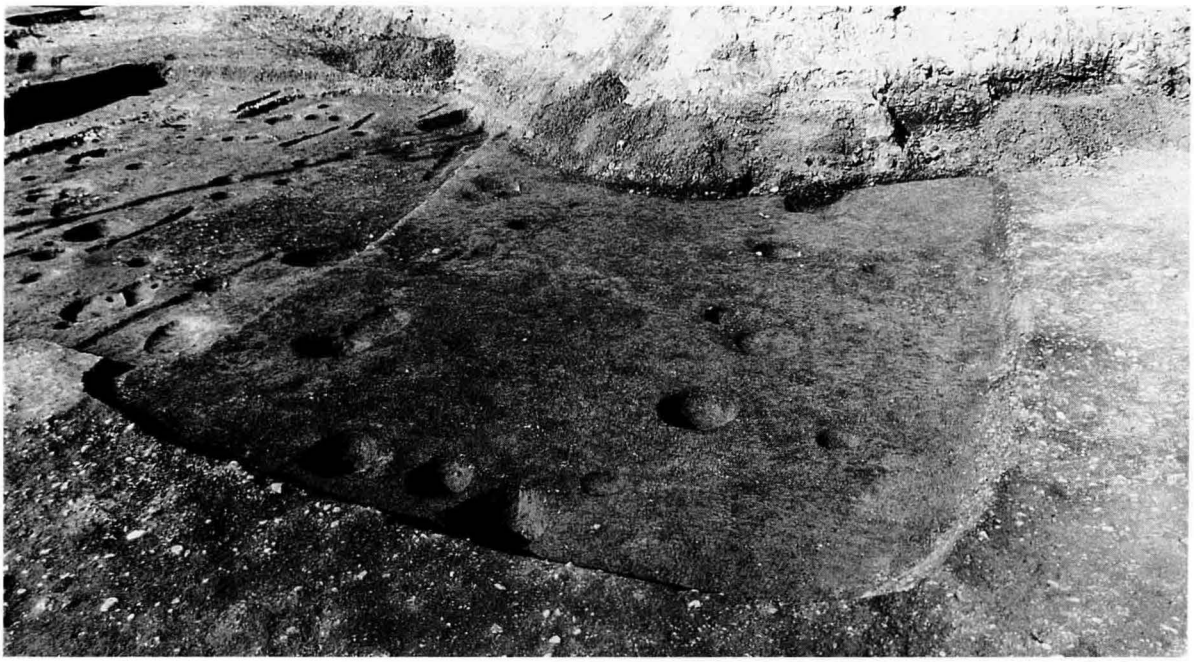


図17　11号住居址実測図



11号住居址

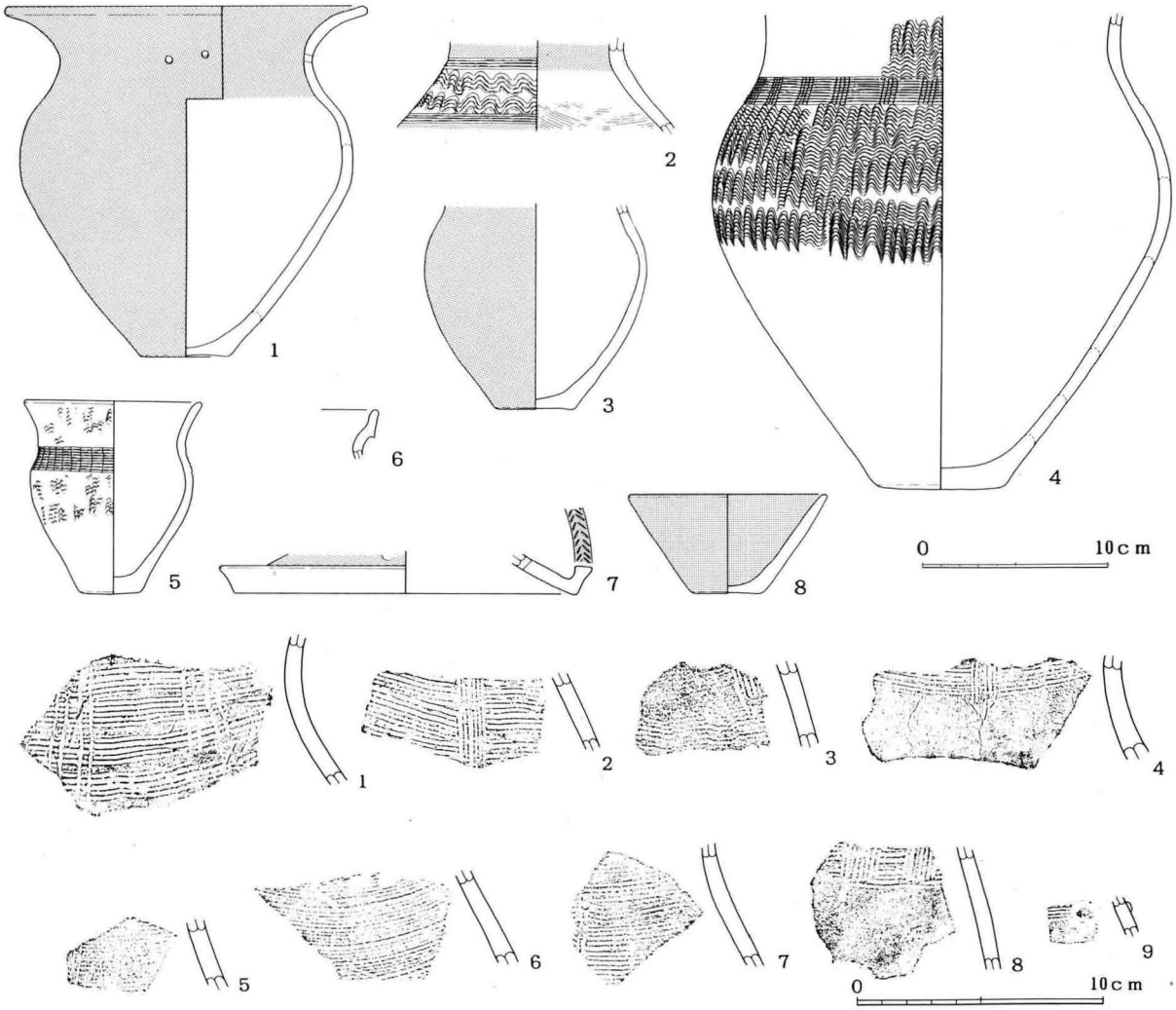


図18　11号住居址出土土器実測図ならびに拓影①

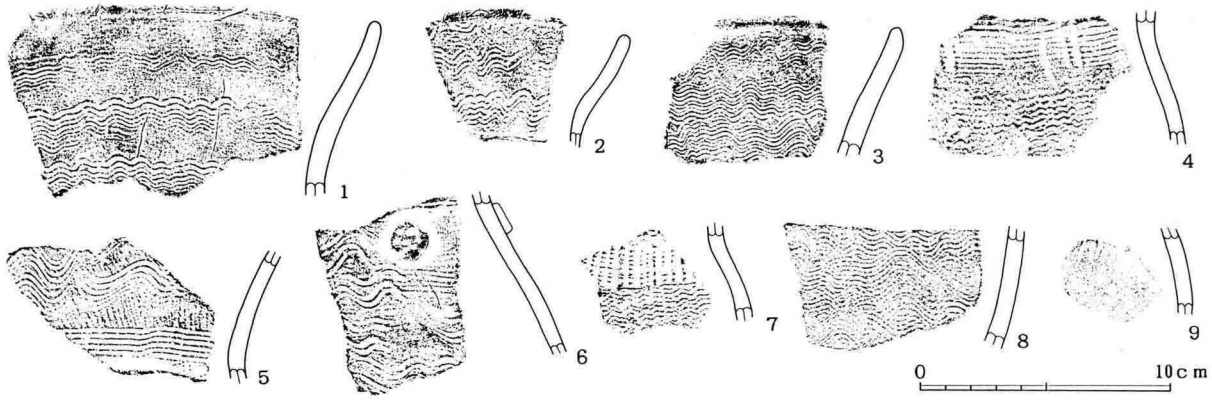


図19　11号住居址出土土器拓影②

16号住居址　（図20）

古墳時代の15号・17号住居址に上層を切られる。

5.5×5.9mの隅丸方形住居址で、確認面からの掘り込みは比較的深く、平均35cm程である。柱穴はP1～P11まで検出したが、主柱穴はP1～P4の4本方形配列で、P5・P6は棟持柱的な性格も考えられる。炉は奥壁側柱穴間内側に位置し地床炉である。その横にさらに焼土の存在を確認したが性格は不明である。覆土上層に多量の円礫と弥生土器破片が投棄されていたが図示しうる遺物は出土していない。

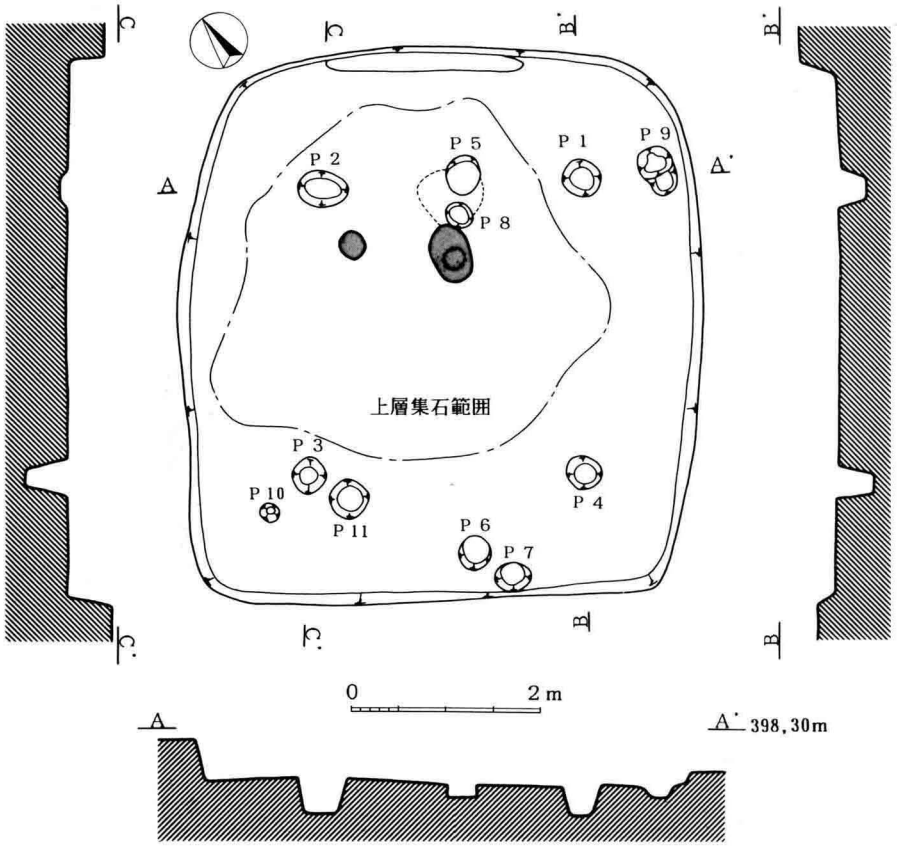
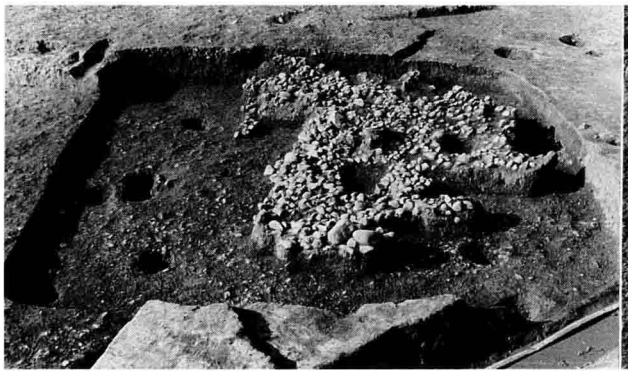


図20　16号住居址実測図



16号住居址上層集石

16号住居址

18号住居址　（図21・22）

奥壁側は1/4ほどが調査区外となるが、平面プランは6.80×9.90mほどのやや大型の隅丸長方形住居と考えられる。確認面からの掘り込みは深く壁高は平均40cmである。柱穴はP1～P7まで検出しているが、主柱穴はP1～P4で4本長方形配列である。壁際のP5・P6は出入り口施設に関連する2ケ一対の支柱穴で、その横に位置するP7は、径50cm・深さ30cmの貯蔵穴である。炉は奥壁側柱穴間中央に位置し、径50cm・深さ5cmほどの地床炉である。入り口側主柱穴のP3・P4間には焼土と炭化物が集中して検出されているが性格は不明である。覆土上層にはかなり大きな円礫と古墳時代中期の土器が、本住居の埋没過程に投棄されたような状況で検出されている。

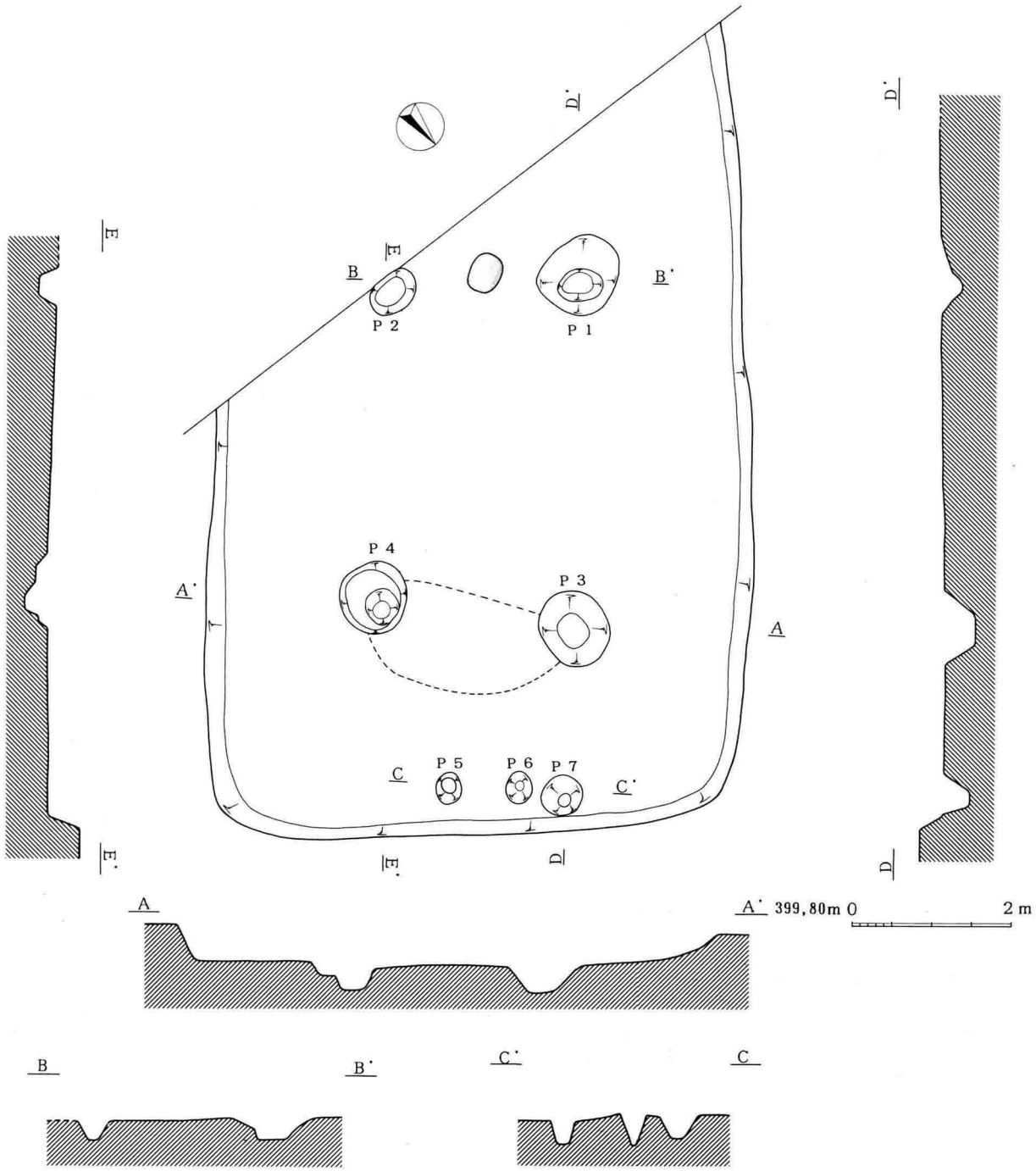


図21　18号住居址実測図

18号住居址

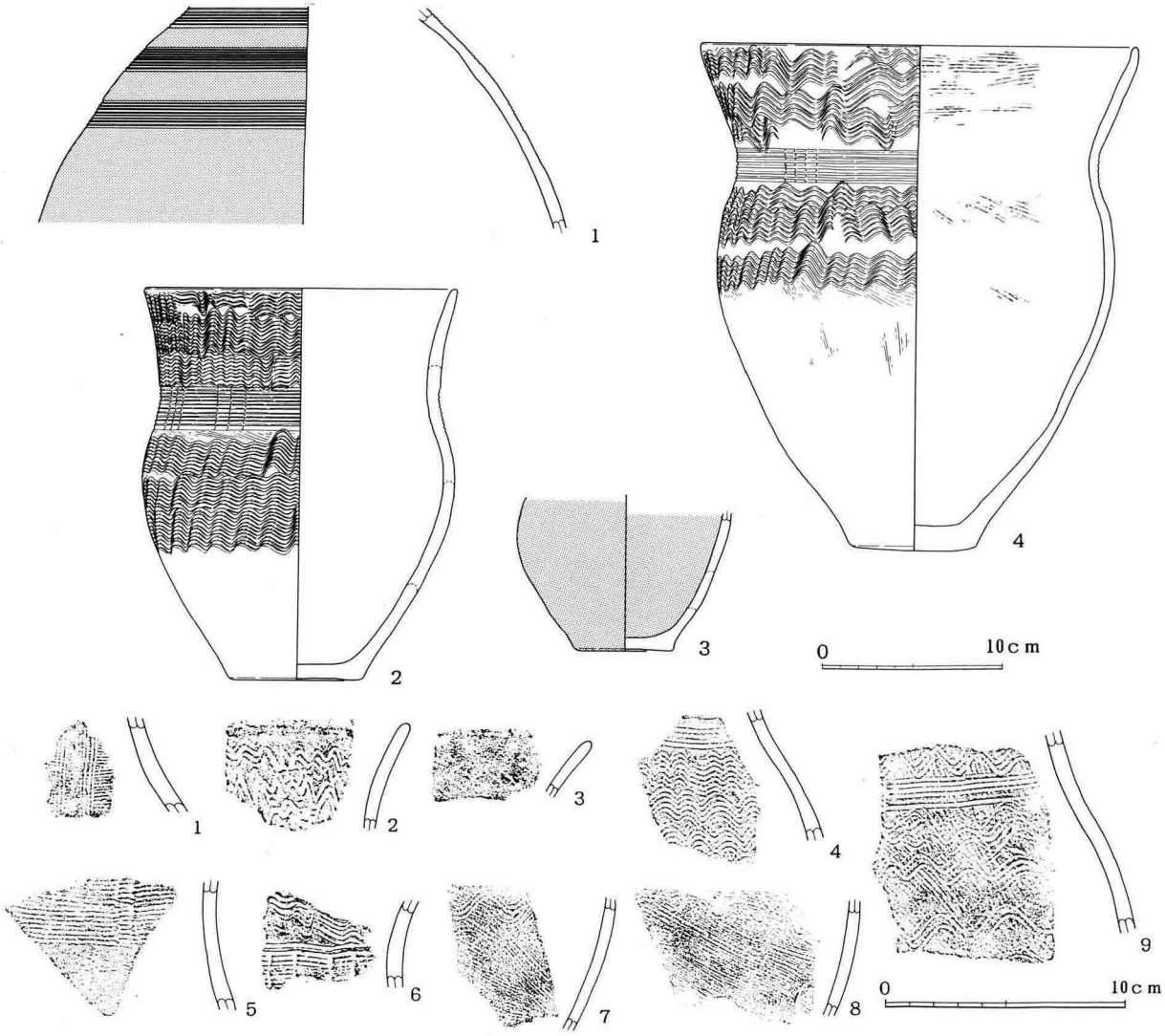


図22　18号住居址出土土器実測図ならびに拓影

19号住居址　（図23～25）

北壁と西壁側はほとんどが調査区外となり、全体の2/3ほどを検出したにすぎない。

平面プランは5.70×9.30mのやや大型の隅丸長方形住居と考えられる。確認面からの掘り込みは比較的浅く、平均20cm程である。

柱穴はP1～P6を検出している。主柱穴と考えられるのはP1～P4で6本の長方形配列である。P5・P6は出入り口施設に関連する2本一対の支柱穴である。となりに位置するP7は貯蔵穴と考えられ、径60cm・深さ30cmを測る。炉は検出されていない。

床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。

住居址中央部分の覆土下層より多量の円礫と共に土器が投棄された状態で出土している。

図示した土器のうち(1)～(6)は床面付近より、(7)～(11)は円礫と共に投棄された状態で出土したものである。

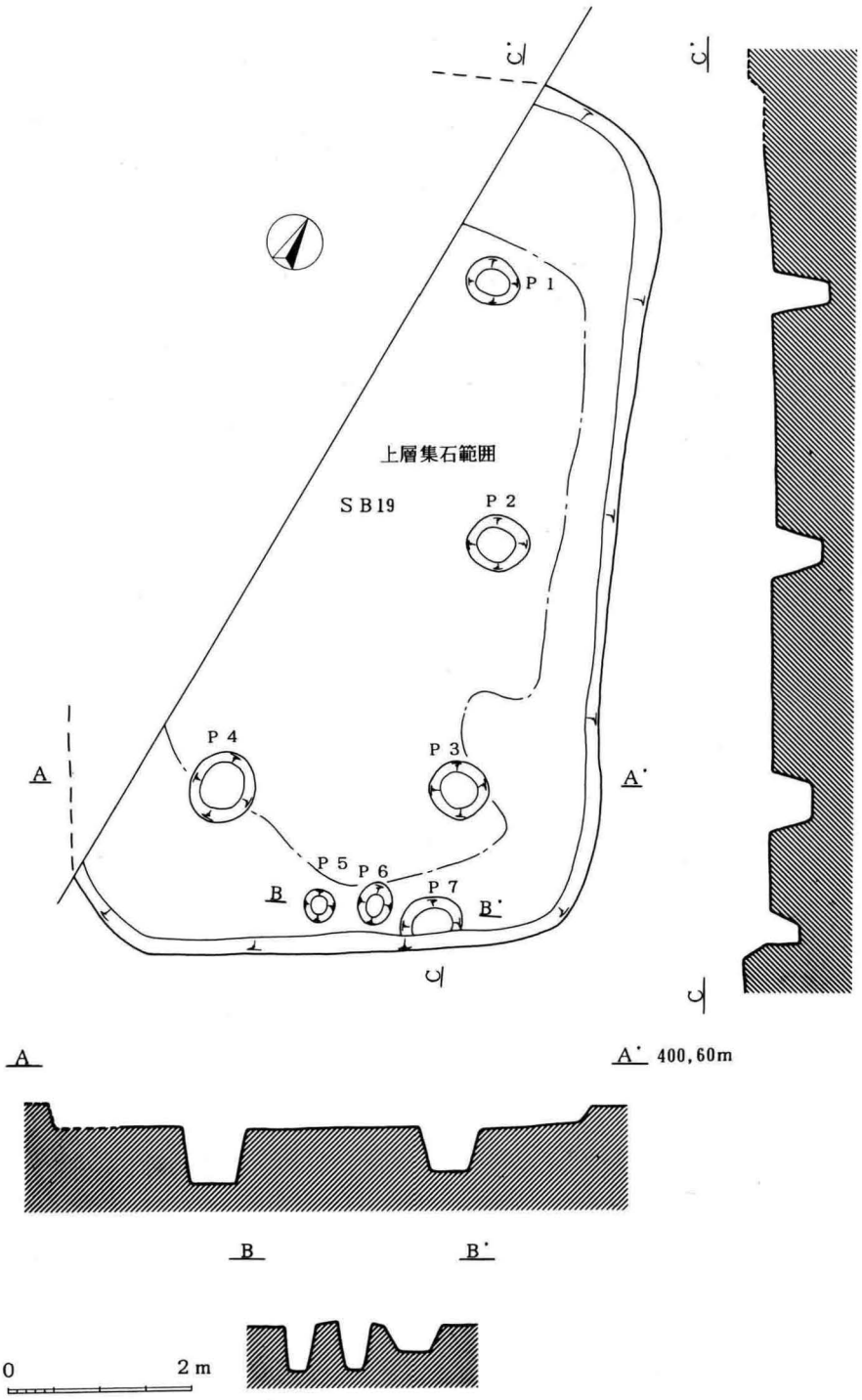


図23　19号住居址実測図

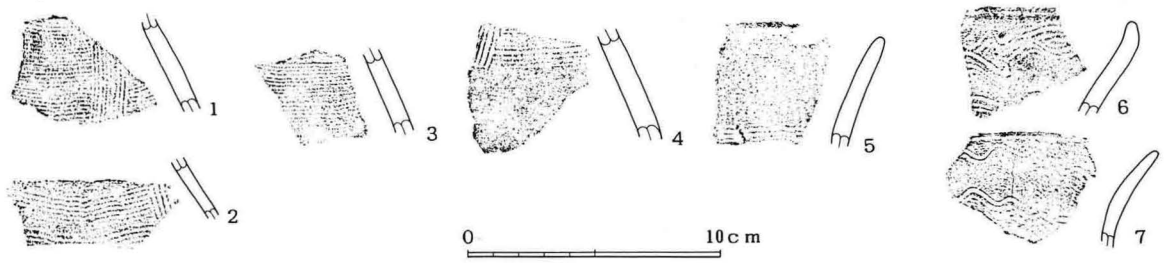


図24　19号住居址出土土器拓影

19号住居址覆土集石

集石・土器出土状況

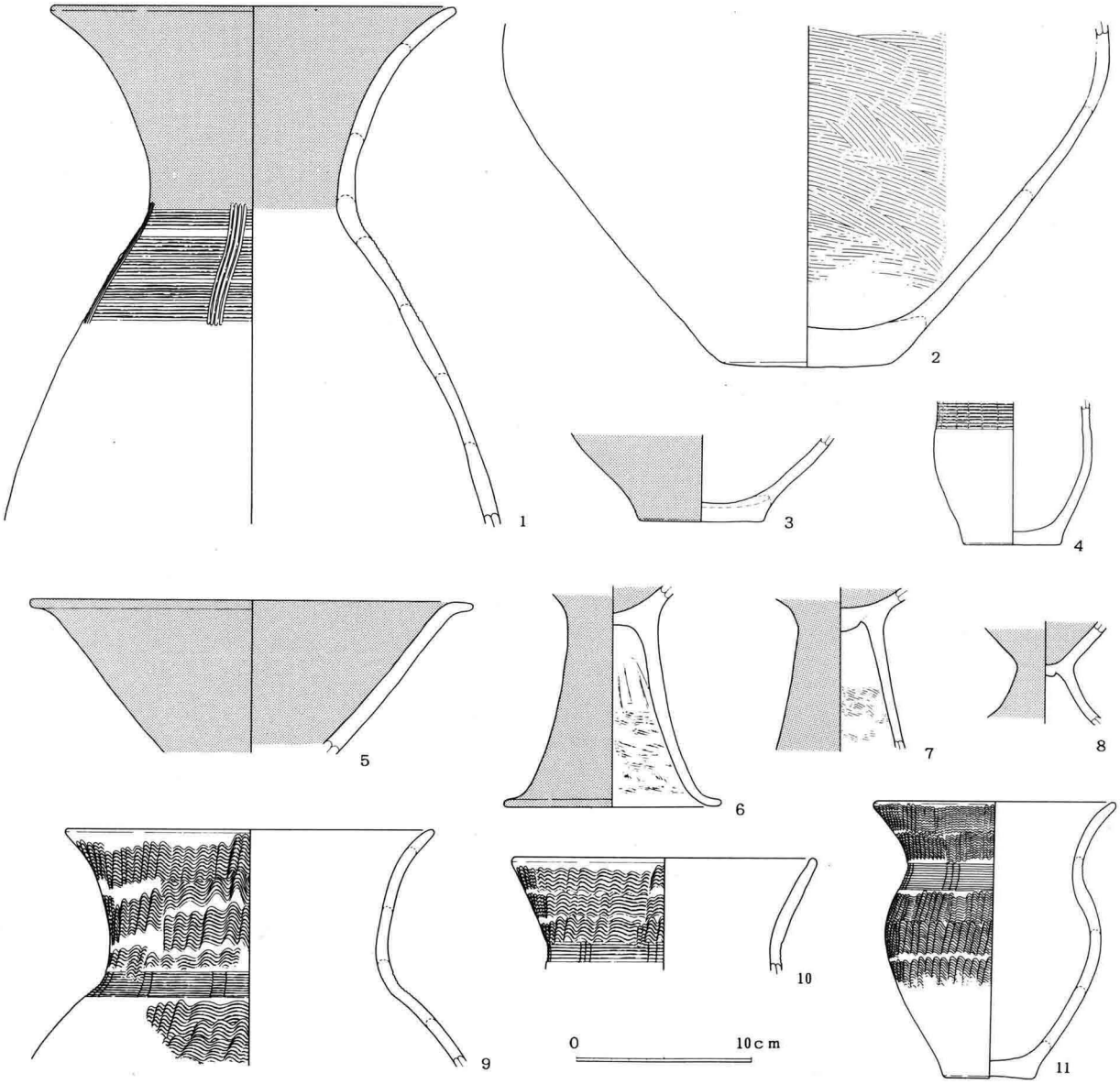


図25　19号住居址出土土器実測図

21号住居址　（図26・27）

南隅を古墳時代中期の６号土壙に切られる。確認面からの掘り込みは平均22cmほどで、床面は軟弱で不明瞭である。平面プランは、4.40×6.90mの隅丸長方形住居址である。柱穴はP1～P8まで確認された。主柱穴はP1～P4で４本の長方形配列で、短辺2.0m、長辺3.2mほどで奥壁際のP5は棟持柱と考えられる。P6・P7は入り口施設に関連する２ケ一対の支柱で、P8も関連施設であろう。P9は貯蔵穴で、径50cm・深さ16cmを測る。炉は奥壁側柱穴間中央に位置し、径50cm・深さ３cmほどの地床炉である。

覆土内よりかなりの量の土器破片が出土しているが、拓本以外に図示しうるものはない。

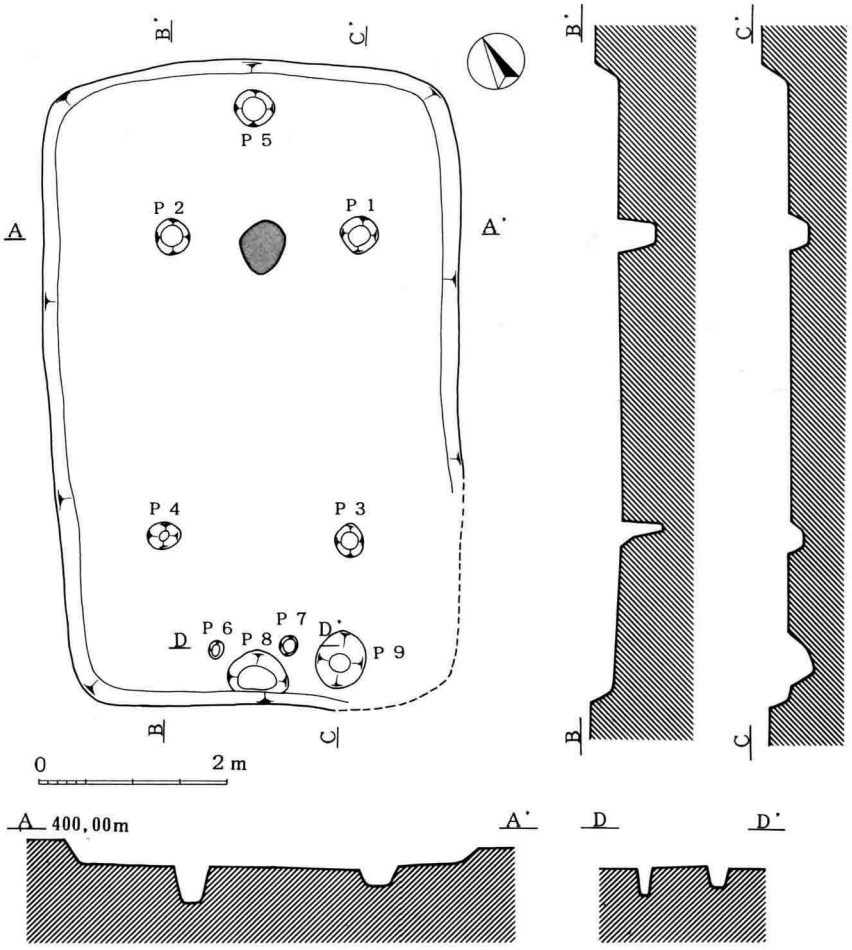


図26　21号住居址実測図

21号住居址

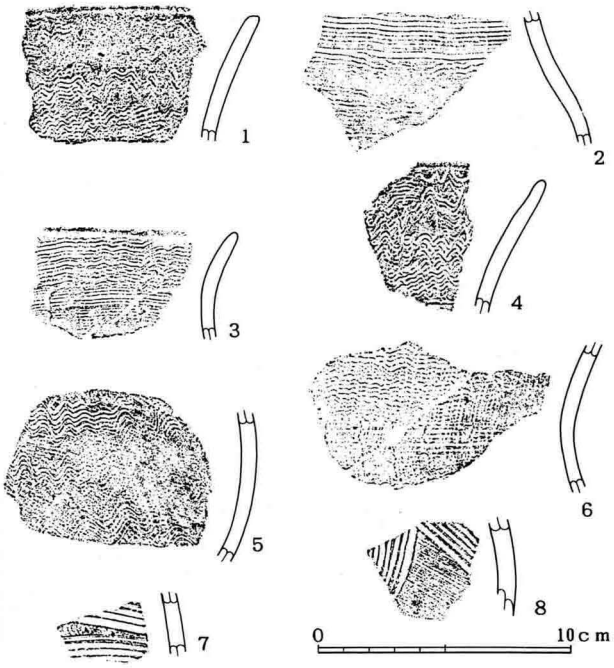


図27　21号住居址出土土器拓影

23号住居址　（図28）

大半が調査区外となり東隅1/4程を検出したのみで詳細は不明である。確認面からの掘り込みは10cm程と浅く、床面も軟弱なものであった。規模は不明だが、プランは隅丸長方形と予想される。柱穴はP1～P8まで検出された。主柱穴はP1・P2でP3・P4ならびにP5・P6は出入り口施設に関連する支柱と考えられ、共に貯蔵穴と考えられるP9・P10をそれぞれ伴っている。主柱穴での確認はできぬものの、住居の拡張もしくは出入り口施設の作り替えが行なわれた可能性が考えられる。出入り口部付近に炭化物と焼土の堆積が確認されたが性格は不明である。

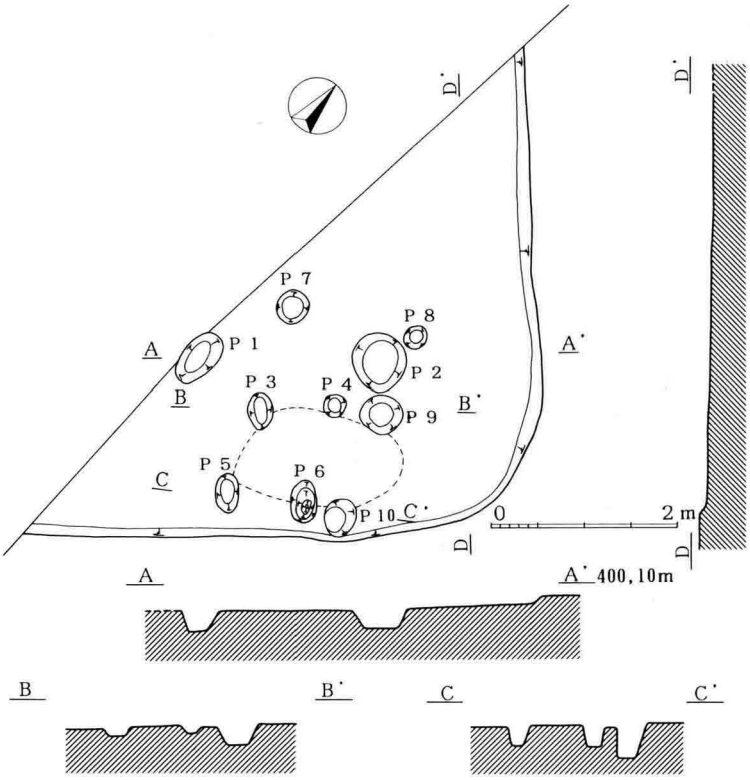


図28　23号住居址実測図

32号住居址　（図29・30）

大半が調査区外となり、住居址北東隅の

23号住居址

一部を検出したにすぎず、詳細は不明である。平面プランは隅丸長方形の住居址と予想されるが規模等不明である。確認面からの掘り込みは平均22cmほどで比較的浅く、床面は軟弱なものであった。出土土器には甕が2個体あるがともに床面上からの出土である。

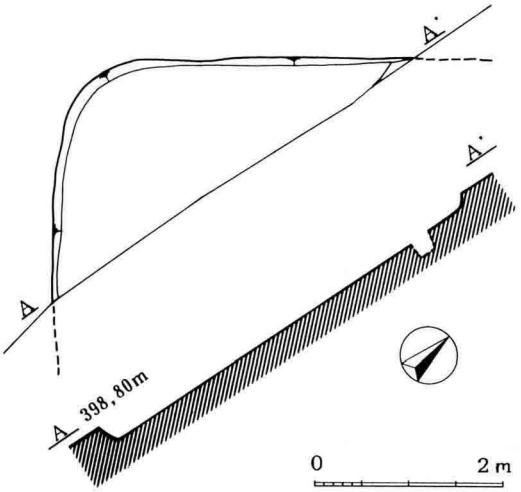


図29　32号住居址実測図　（1：80）

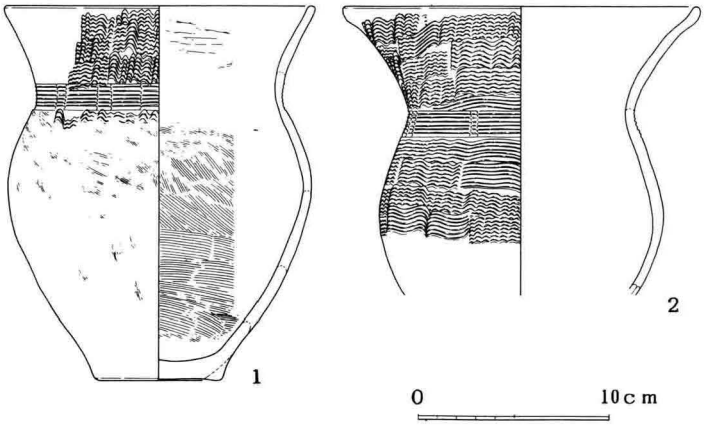


図30　32号住居址出土土器実測図

34号住居址　（図31・32）

住居址北西隅の一部を検出したのみで詳細不明。P1を棟持柱と考えるならば、平面プランは短辺4.40mほどの隅丸長方形が予想される。確認面からの掘り込みは平均33cm程で、床面は軟弱である。床面上より高杯脚部が、入れコ状に立った状況で出土している。

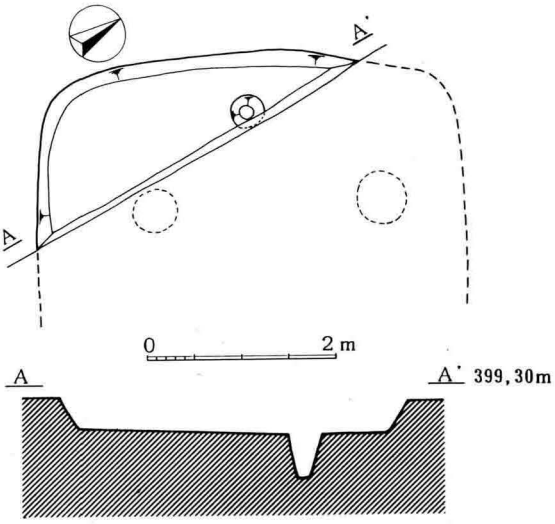


図31　34号住居址実測図　（1：80）

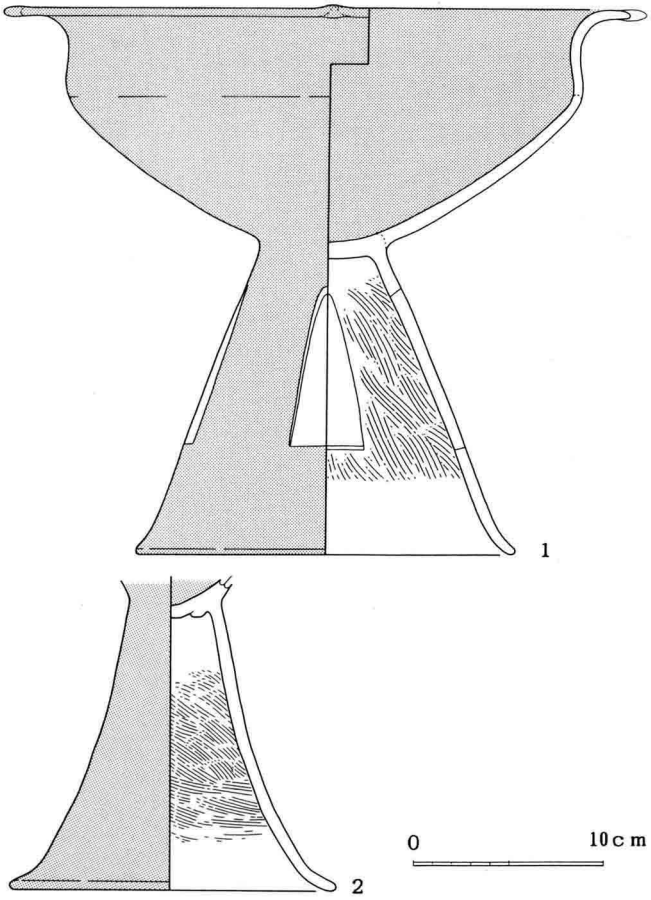
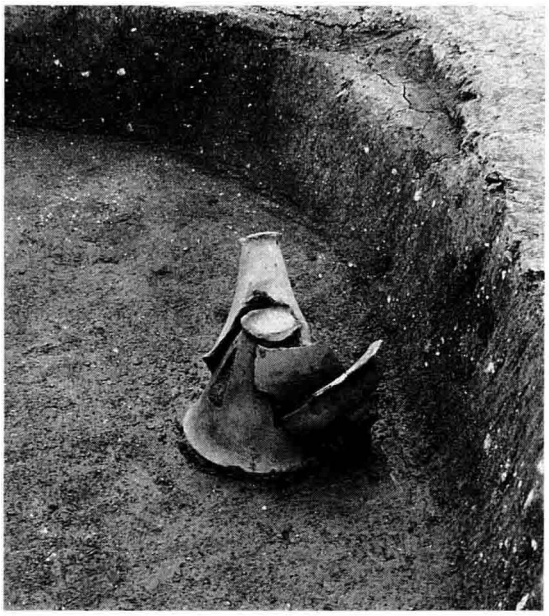


図32　34号住居址出土土器実測図



34号住居址土器出土状況

38号住居址　（図33～35）

古墳時代の26号・27号・37号住居址に切られる。平面プランは5.50×9.70mのやや大型の隅丸長方形住居址である。確認面からの掘り込みは平均10cm程と浅い。床面は非常に良好で、特に実測図中破線で示した部分は固く叩き締められていた。また本住居は焼失住居で、実線で示した部分は多量の炭化材・焼土が集中して出土している。柱穴はP1～P8まで検出している。主柱穴はP1～P4で、短辺3.00～3.30m・長辺5.80～5.90mほどの4本長方形配列である。P9は貯蔵穴と考えられ、径45cm・深さ30cmである。炉は奥壁側柱穴間中央に位置し深さ5cmほどの地床炉である。

床面より壺、高杯を中心として比較的多量の土器が出土している。

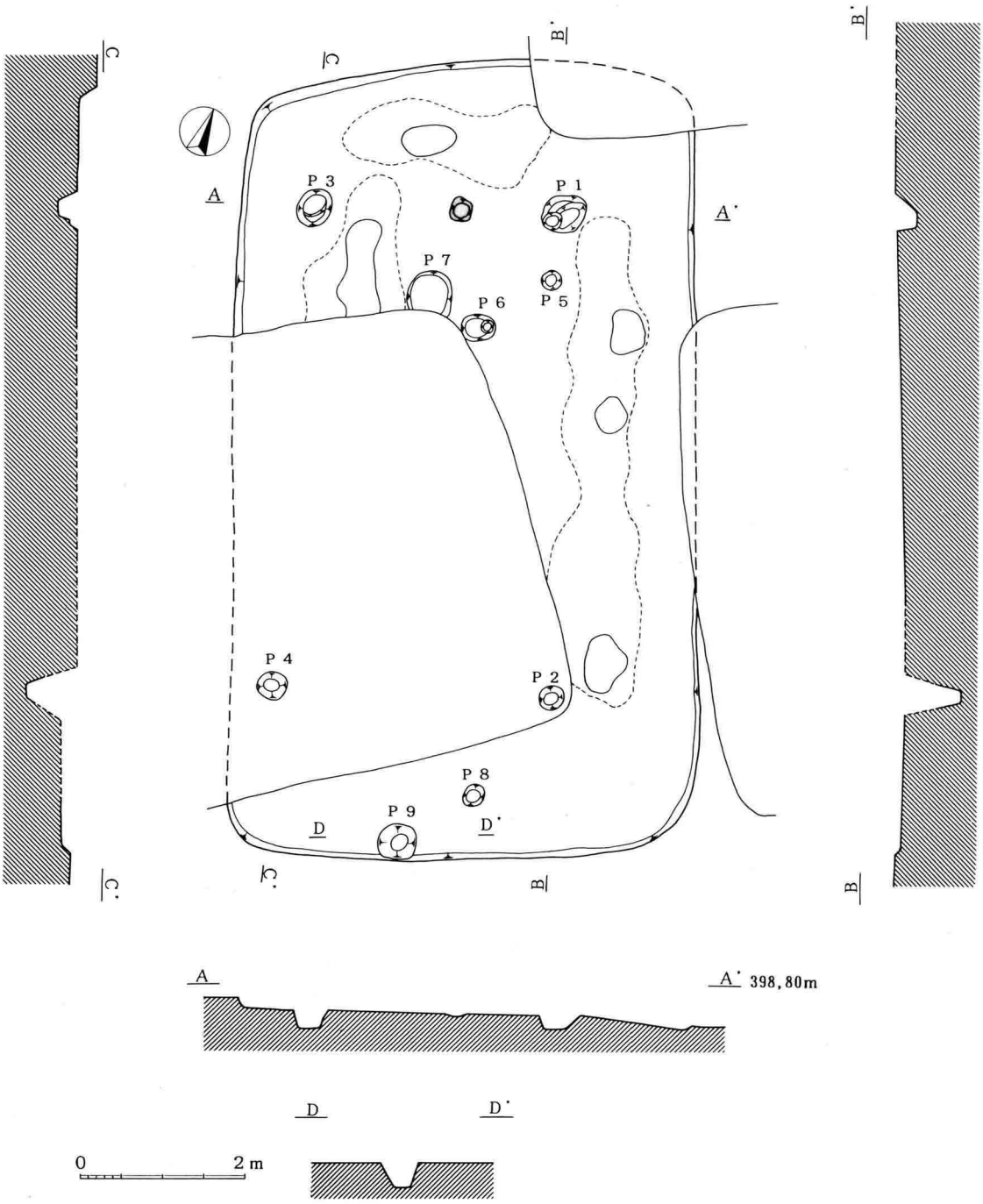


図33　38号住居址実測図　（1：80）

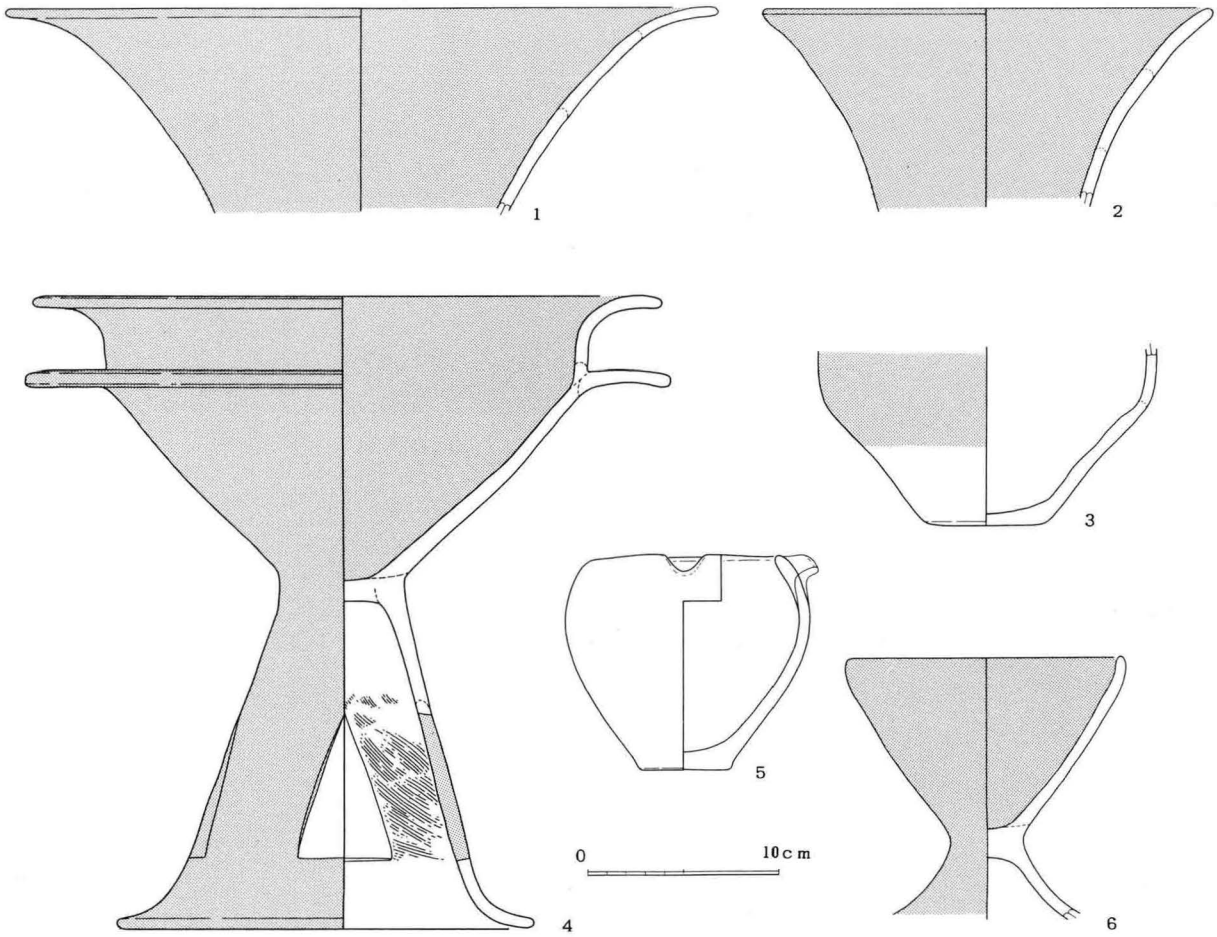


図34　38号住居址出土土器実測図　（1：4）

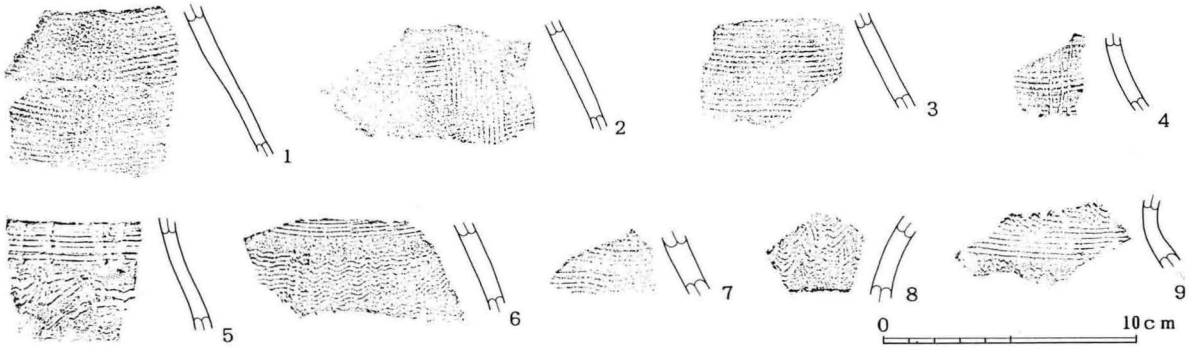


図35　38号住居址出土土器拓影　（1：3）

40号住居址　（図36・44）

古墳時代の51号住居址、弥生後期の52号住居址に大部分を切られ、詳細は不明である。柱穴より推定して短辺5.10mの隅丸長方形住居と考えられる。柱穴はP1～P3が検出されており、短辺2.20m・長辺3.80mの4本長方形配列の主柱穴と考えられる。確認面からの掘り込みは平均15cm前後と浅く、床面も軟弱なものであった。

40号住居址

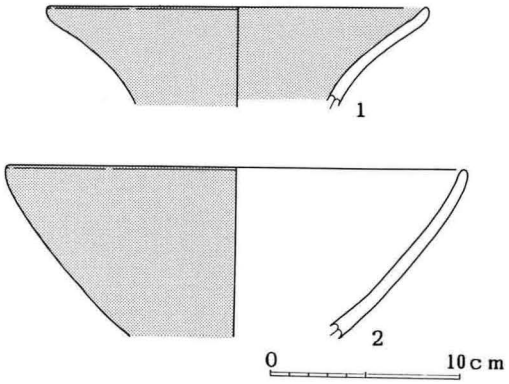


図36　40号住居址出土土器実測図　（1：4）

41号住居址土器出土状況

41号住居址　（図108・37）

大部分を古墳時代の30号住居址に切られ、詳細は不明な部分が多い。平面プランは3.70×6.00mの隅丸長方形住居址で、床は軟弱で不明瞭なものであった。柱穴は出入り口施設に関連する2ケ一対のP1・P2を検出したのみである。P3は貯蔵穴で、径50cm・深さ34cmを測る。床面からかなりの量の土器が出土している。甕(4)(5)は北陸的な要素が強くうかがわれ、特に(5)は上げ底状の底部成形技法や内面へら削りの手法など北陸そのものといえる。また胎土も在地のものとは異質である。

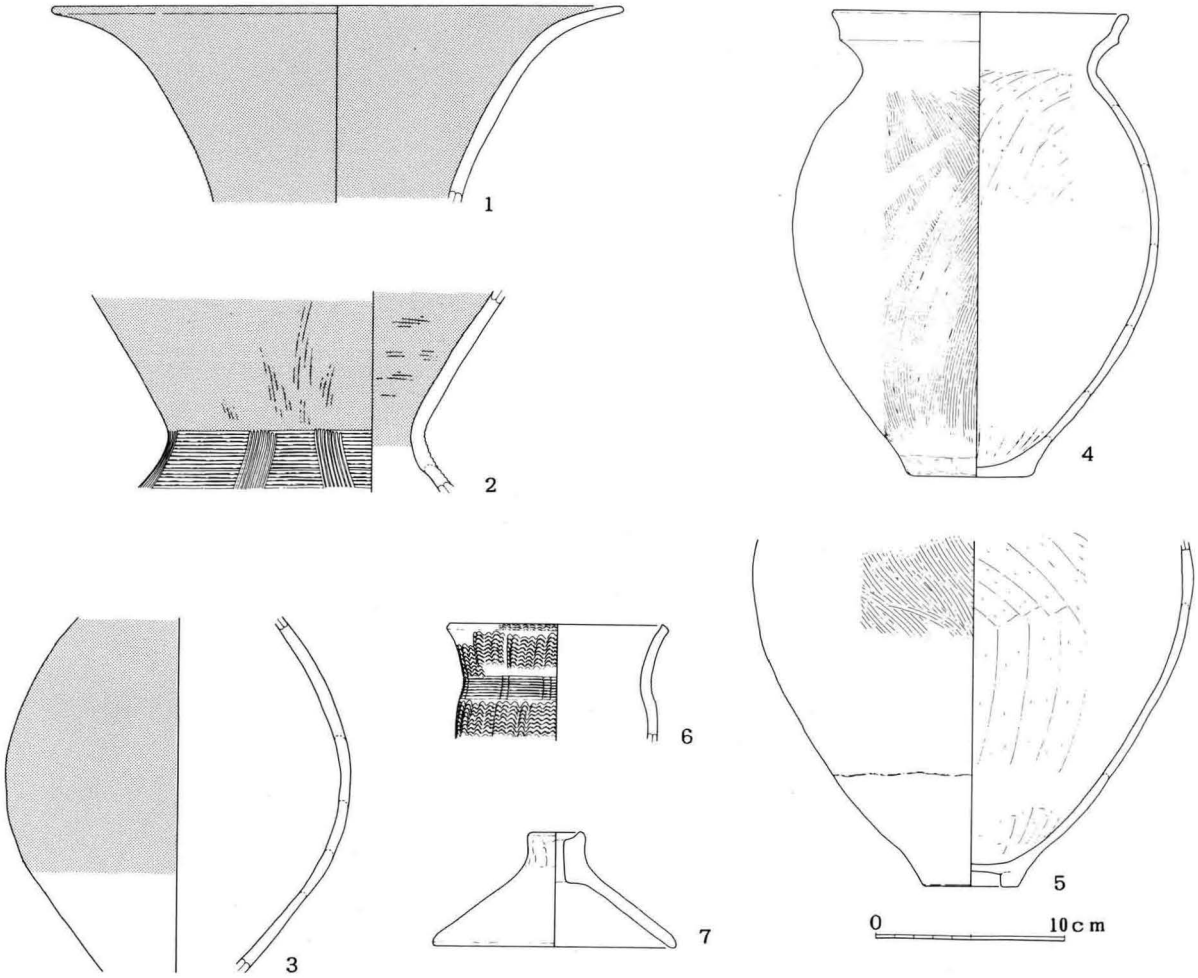


図37　41号住居址出土土器実測図　（1：4）

42号住居址　（図38～40）

上層を古墳時代の７号土壙、奈良時代の29号住居址に切られ、北側は調査区外となる。平面プランは短辺6.50ｍの大型の隅丸長方形住居址と予想される。確認面からの掘り込みは40㎝前後と深い。床面は軟弱で不明瞭である。主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ３で、短辺3.10ｍ・長辺7.00ｍほどの６本長方形の配列が予想される。Ｐ４～Ｐ６は出入り口施設に関連する支柱である。炉は検出されていない。覆土上層より土師器が大量に投棄された状態で検出されているがこれらに関しては後述する。

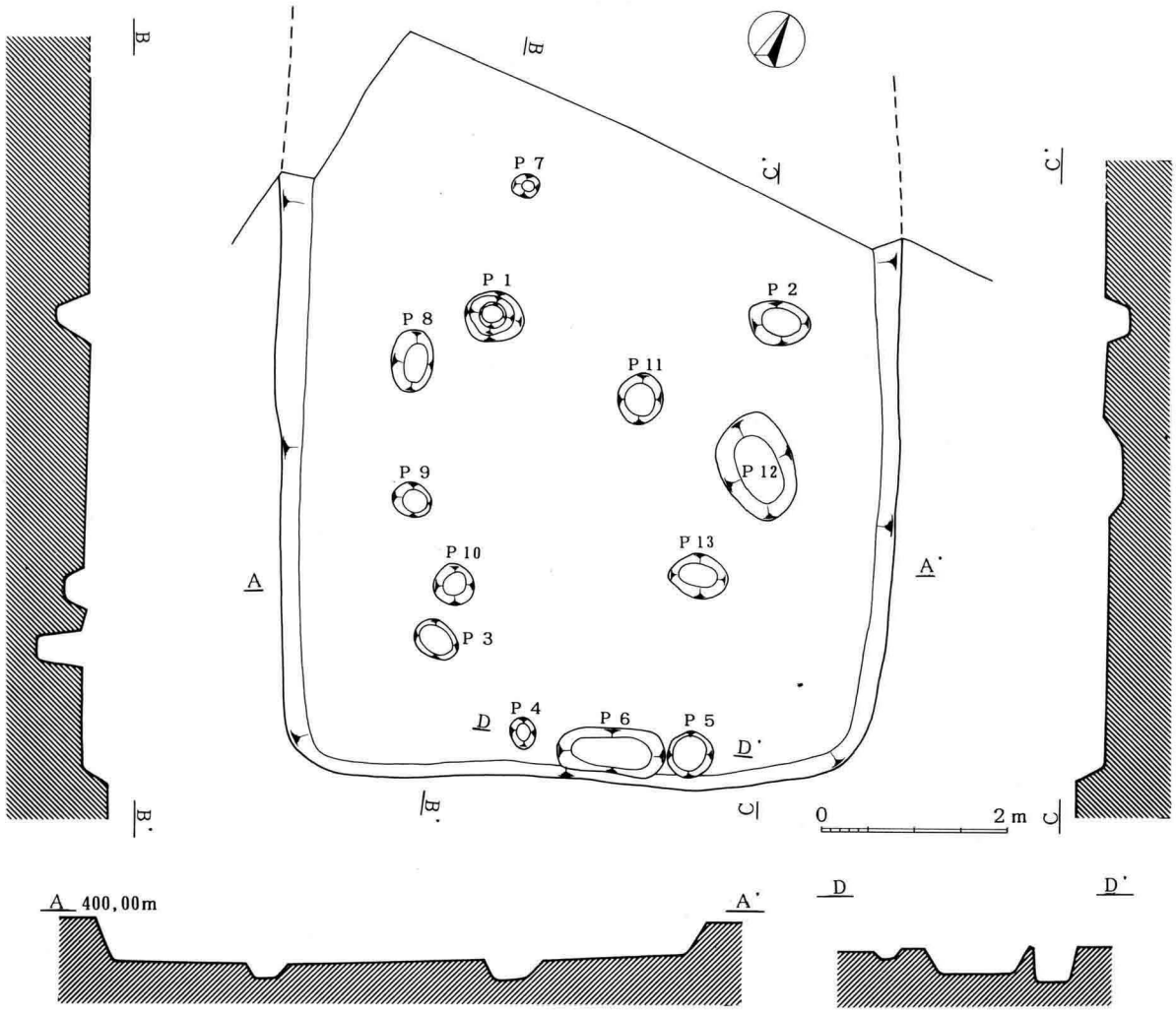


図38　42号住居址実測図　（１：80）

42号住居址

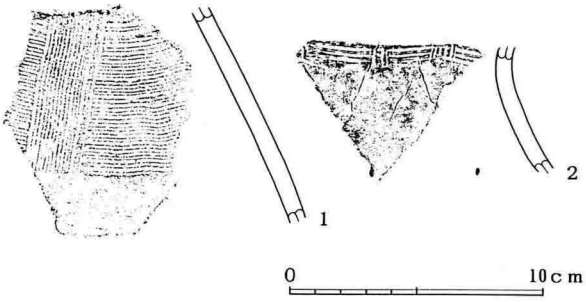


図39　42号住居址出土土器拓影

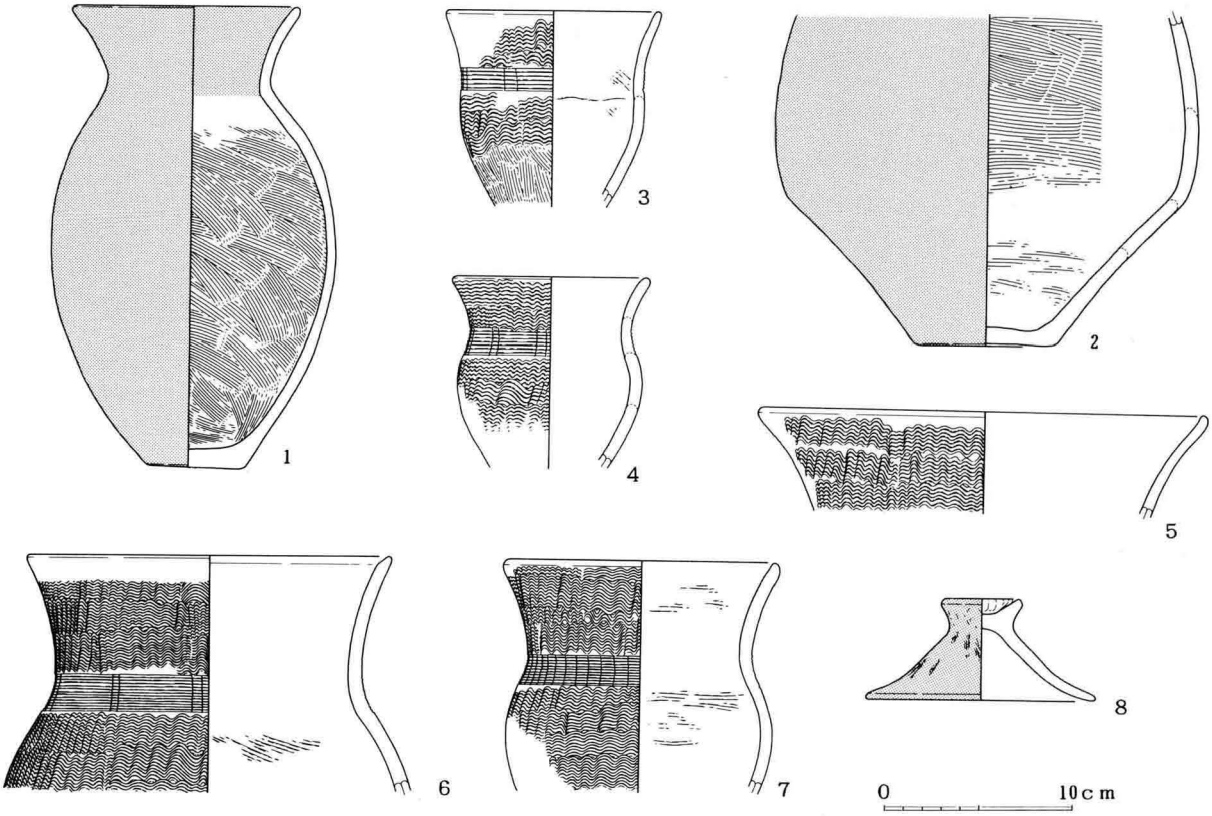


図40　42号住居址出土土器実測図　（1：4）

45・46号住居址

45号住居址　(図41・42)

古墳時代の46号住居址に切られ、南壁側は1/3ほどが調査区外となる。

平面プランは5.00×8.80mのやや大型の隅丸長方形住居址である。確認面からの掘り込みは平均30cmとやや深く、床面は全体に軟弱であった。主柱穴はP1～P3と考えられ4本長方形の配列と思われる。P4は棟持柱、P11は貯蔵穴と考えられる。炉は奥壁側柱穴間中央やや外側に位置し地床炉である。炉の奥壁よりのところにP9とそれを取り囲む形で小ピットが検出されているが性格は不明である。

本住居址は焼失住居であり、床上に多量の炭化材が検出されている。

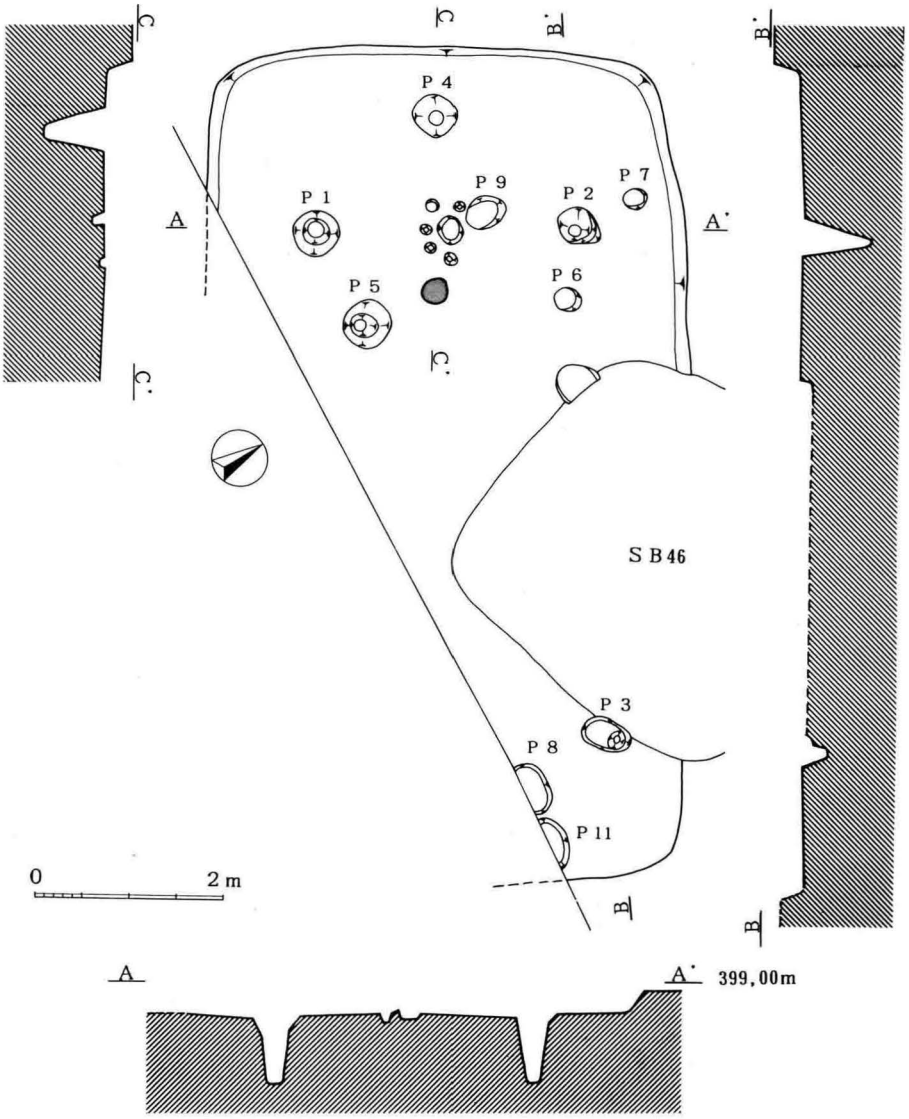


図41　45号住居址実測図　(1：80)

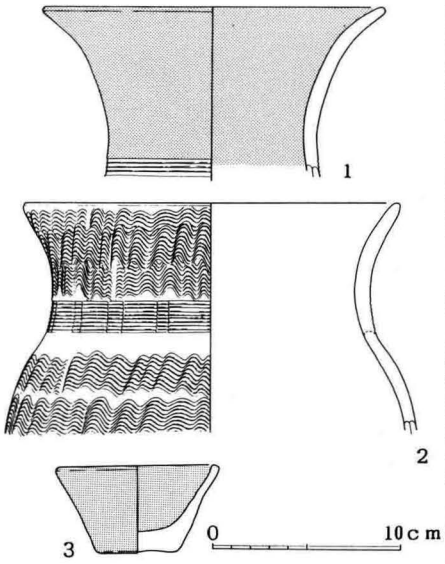


図42　45号住居址出土土器実測図

45号住居址炭化材検出状況

49号住居址　（図43）

古墳時代の62号住居址に切られ、北側は暗渠によって破壊される。平面プランは短辺3.90mの小型の隅丸長方形住居址と考えられる。確認面からの掘り込みは20cm前後で、床面は軟弱である。主柱穴はP1・P2で短辺1.40mの4本長方形配列と考えられる。P3は棟持柱であろう。炉はP1・P2間中央に位置し、長径50cm・深さ5cmほどの地床炉である。

図示しうる遺物は出土していない。

52号住居址　（図44～46）

古墳時代の11号住居址に南側を切られ、弥生後期の40号住居址を切る。

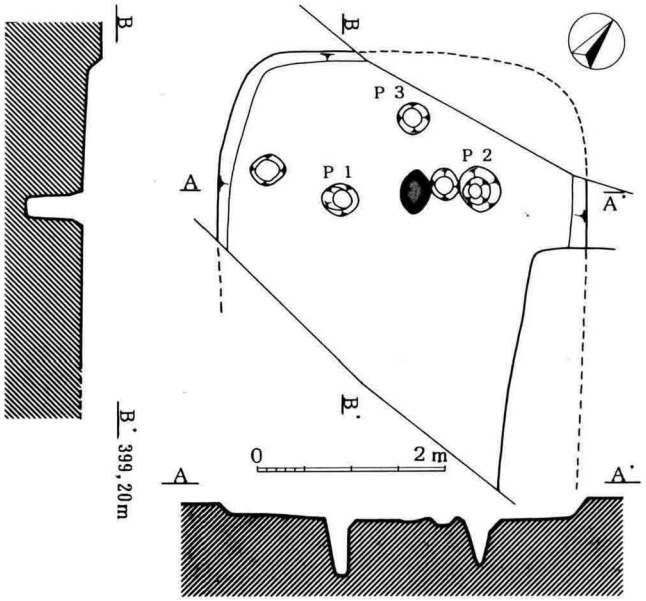


図43　49号住居址実測図　（1：80）

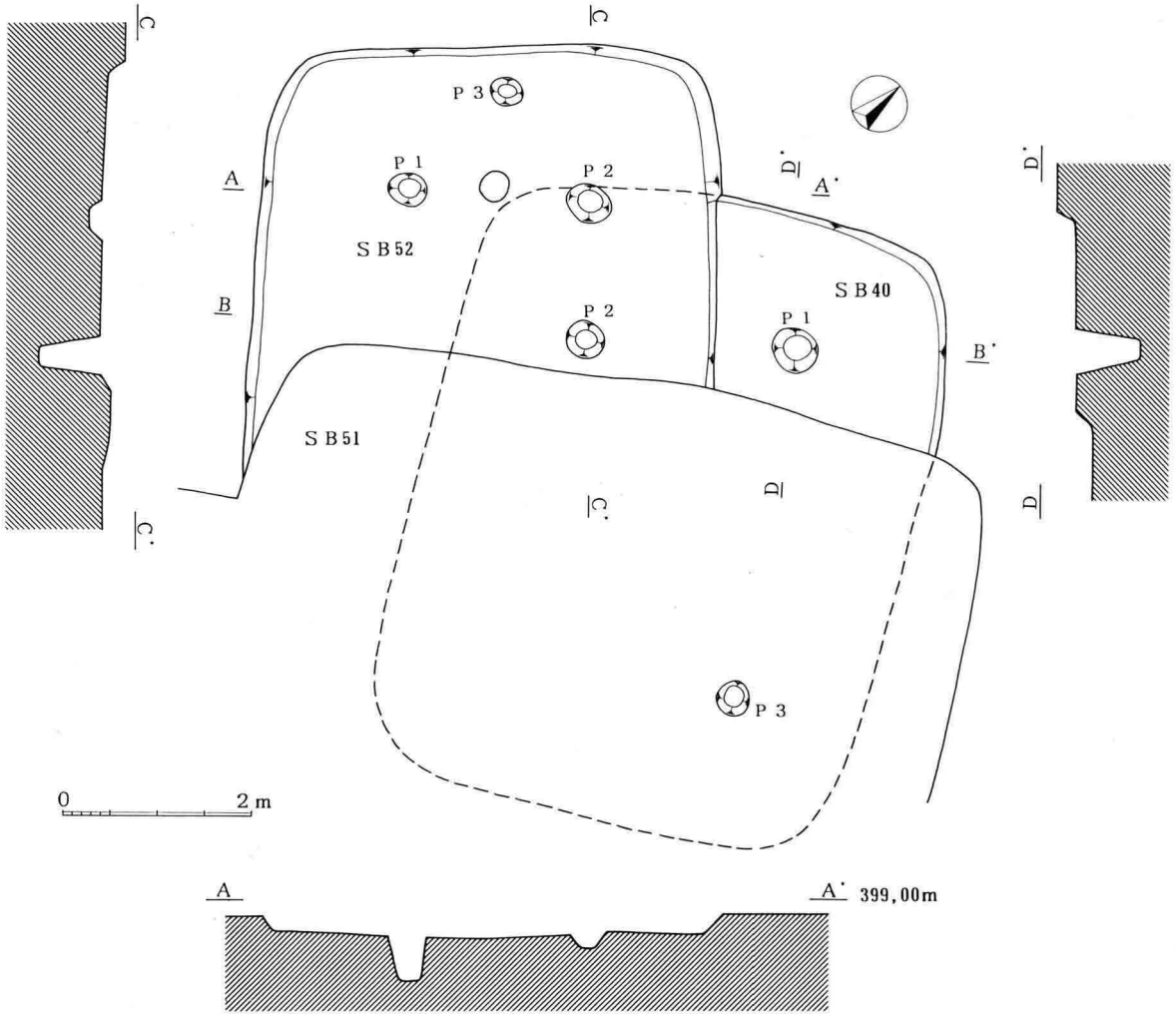


図44　40号・52号住居址実測図　（1：80）

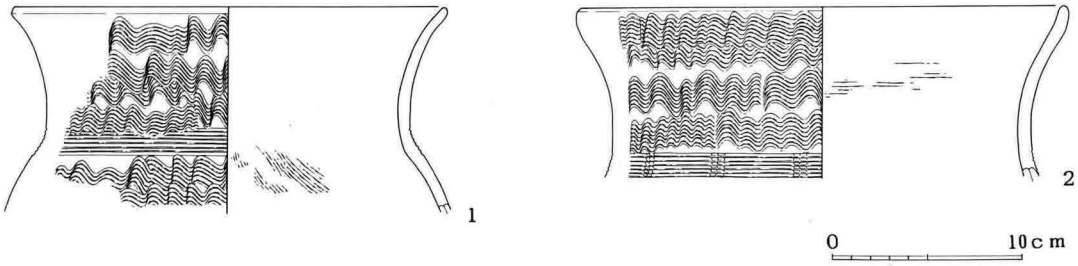


図45　52号住居址出土土器実測図　（1：4）

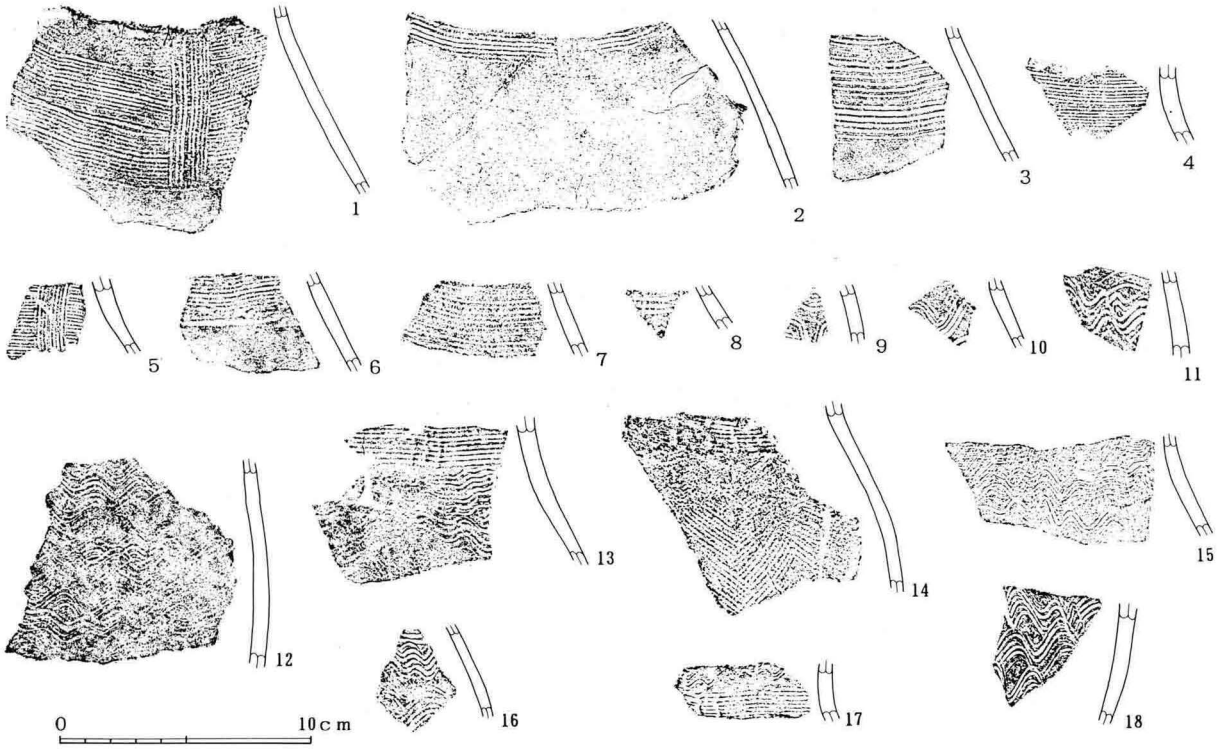


図46　52号住居址出土土器拓影　（1：3）

平面プランは、短辺4.90mほどの隅丸長方形住居址と考えられる。確認面からの掘り込みは25cm前後で床面は全体に軟弱なものであった。

主柱穴はP1・P2で短辺1.90mの4本長方形配列と想定される。P3は棟持柱であろう。炉はP1・P2間中央に位置し、径30cm・深さ3センチメートルの地床炉である。床面より甕が2個体分出土している。

52号住居址

58号住居址　（図47・48）

平面プランは4.80×6.00mの隅丸長方形住居址で、他遺構との切りあい関係はない。確認面からの掘り込みは30～50cm前後と深い。床面は全体に軟弱で不明瞭である。柱穴はP1～P8を検出したが、主柱穴はP1～P4で、短辺1.60m・長辺2.70～2.90mの4本長方形配列である。P5・P6は出入り口施設に関連する二ケ一対の支柱でP7もそれに伴うものである。P8は棟持柱であろう。炉は奥壁側柱穴間中央に位置し、径40cm・深さ3cmの地床炉である。

住居址中央付近の覆土上層から円礫と共に多量の土器が投棄された状態で出土している。

48図に示した土器はすべて礫群の内部もしくは礫群にのる状態で出土したものである。

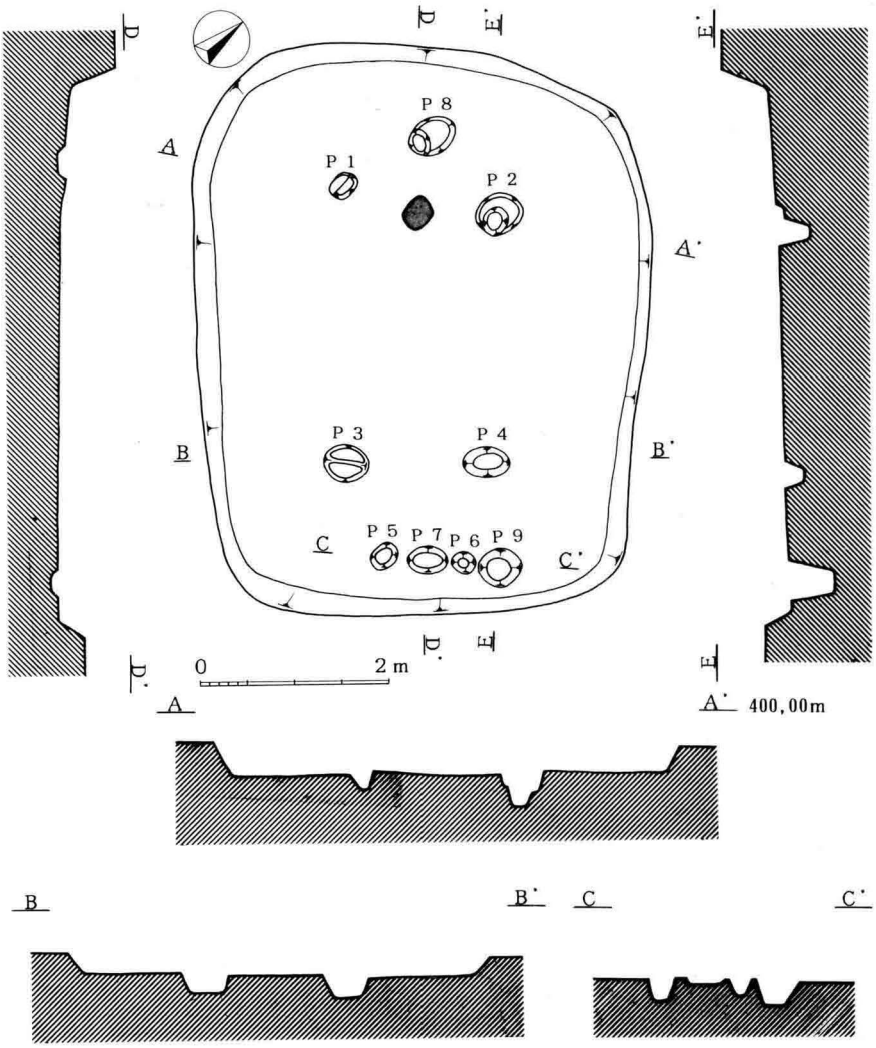
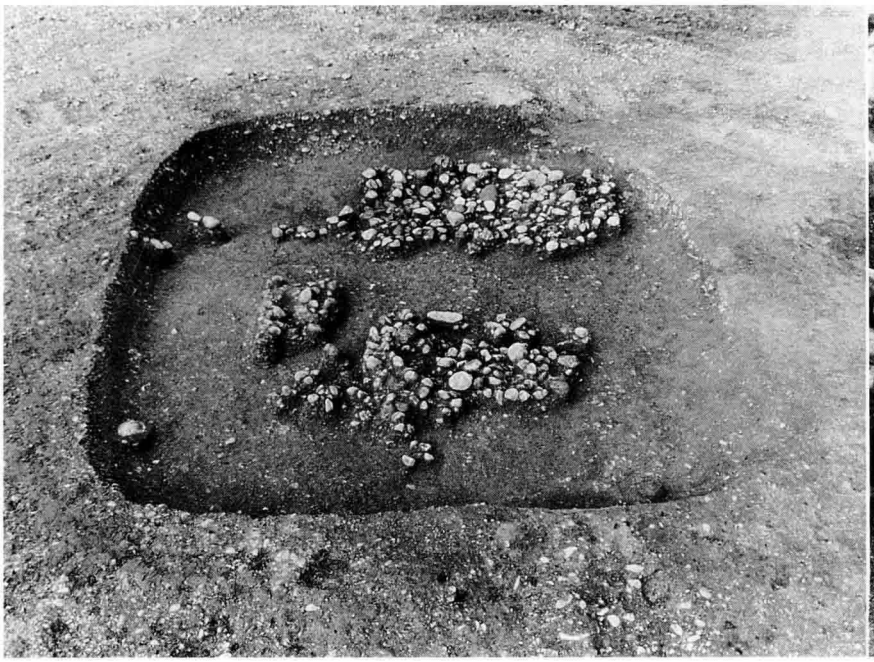


図47　58号住居址実測図　（1：80）



58号住居址覆土集石検出状況

同・土器出土状況

58号住居址

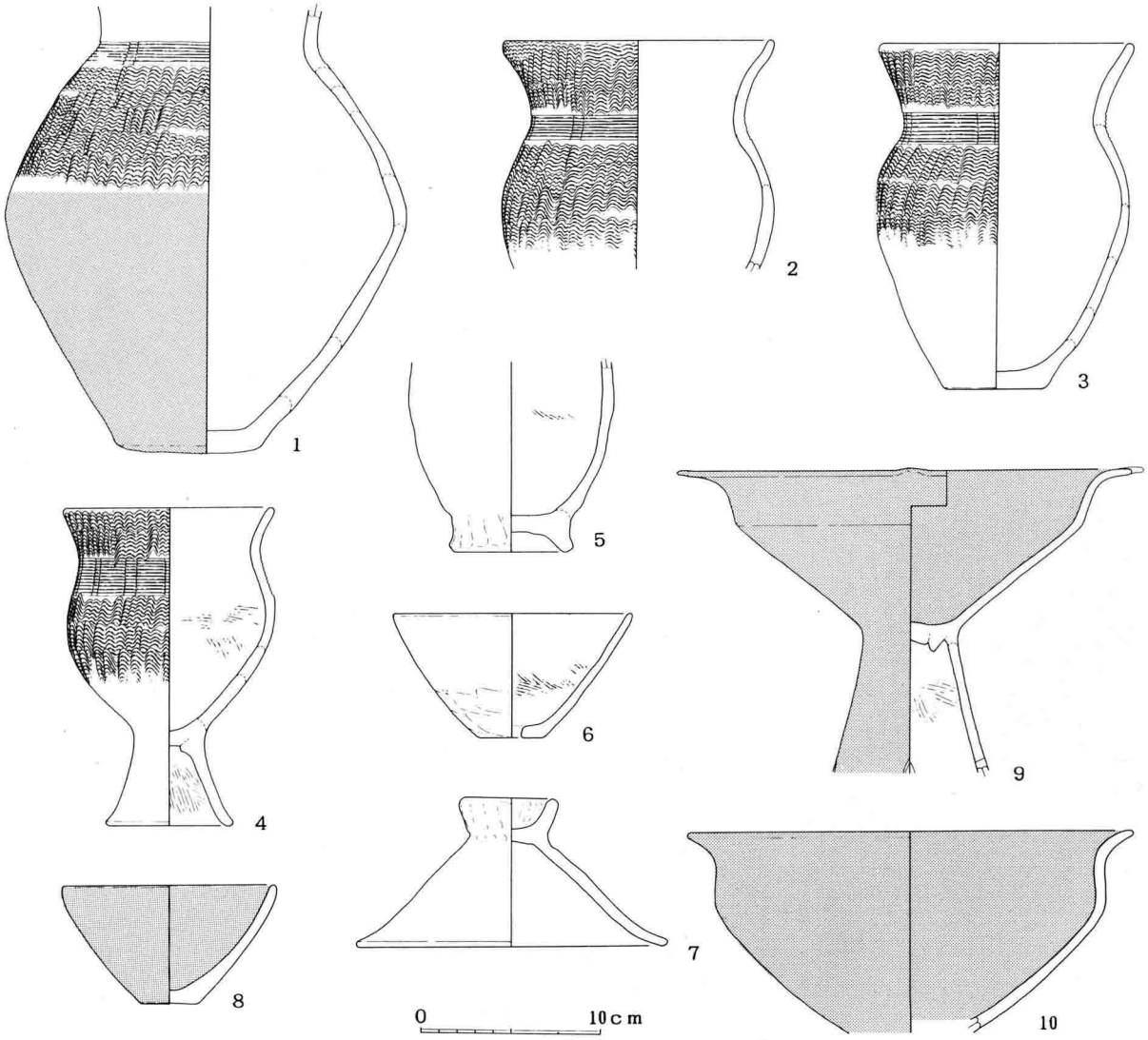


図48　58号住居址出土土器実測図　（1：4）

60号住居址　（図49・50）

平面プランは3.30×4.20mの小型の隅丸長方形住居址で、他遺構との切りあいはない。確認面からの掘り込みは北壁側で25cm前後、南壁側で12cm前後と比較的浅い。床面は全体に軟弱で不明瞭である。柱穴はP1～P7を検出している。主柱穴はP1～P4で、短辺1.20m・長辺1.75mの4本長方形配列である。P6・P7は性格不明、また出入り口施設に関連する支柱も検出されていない。P8は貯蔵穴で深さ30cm。炉は奥壁側柱穴間中央に位置し地床炉である。本住居は焼失住居であり、床面より多量の炭化材が焼け落ちた状態で検出されている。また奥壁側の炭化材の上層覆土中からは多量の円礫が投棄された状態で検出されている。土器小破片が出土しているのみで、図示しうる遺物は出土していない。

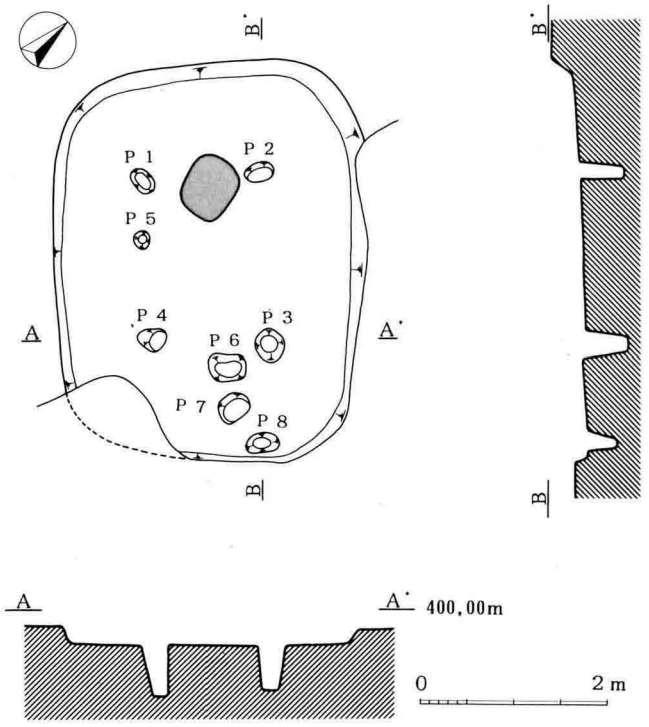


図49　60号住居址実測図　（1：80）

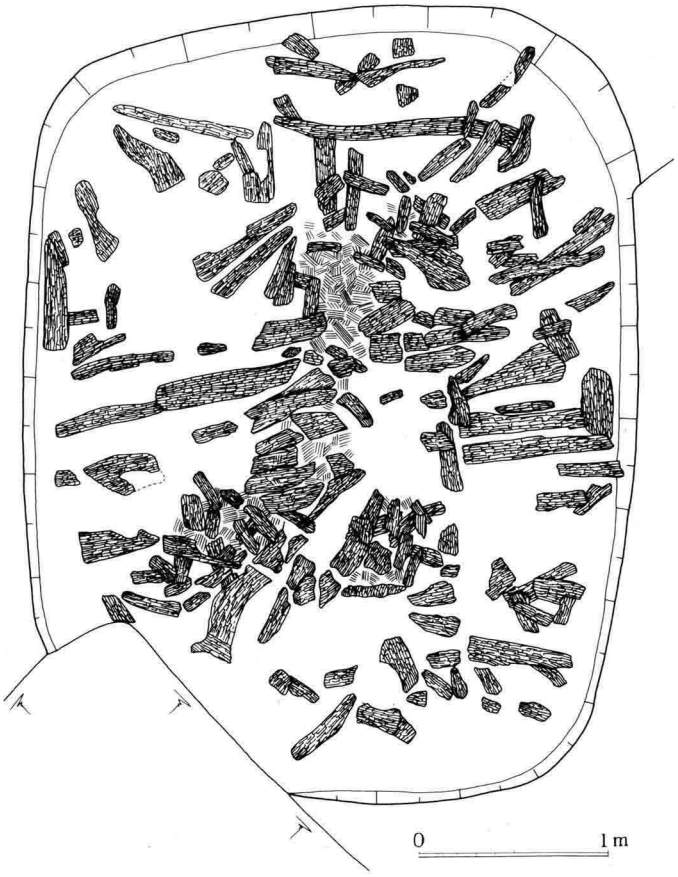
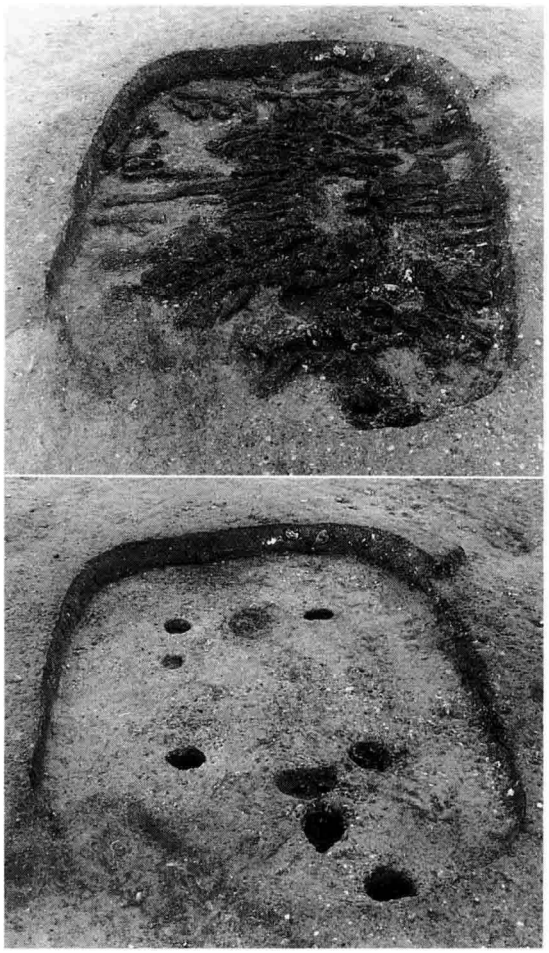


図50　60号住居址炭化材出土状況実測図　（1：40）



60号住居址

61号住居址　（図51～53）

古墳時代の59号住居址に住居址北西隅の上層を切られる。平面プランは、4.40×6.00mの中型の隅丸長方形住居址である。確認面からの掘り込みは北壁側で32cm前後、南壁側で30cm前後と比較的深い。床面は住居址中央付近を中心に、全体に固く締まっており良好な状況であった。柱穴はP1～P7を検出している。主柱穴はP1～P4で、短辺1.60～1.80m・長辺2.50～2.80mのやや不整な4本長方形配列をとる。P5・P6は出入り口施設に関連する二ケ一対の支柱である。P8は貯蔵穴で、径70cm・深さ20cmを測る。炉は2個検出されている。主炉は奥壁側柱穴間中央やや壁よりのところに位置し、径30cm・深さ5cmの地床炉である。副炉はP4のすぐ北側に位置し同様の地床炉である。

本住居も焼失住居であり、床面ならびに壁面はかなり焼き締まった状態であった。また住居址中央部を中心に覆土内から多量の円礫と土器が投棄された状況で検出された。

図52（1～4）は床面より出土したもの、（5～19）は礫群内もしくは礫群にのった状況で出土したものである。

甕（11・12）、高杯（16）、器台（19）など北陸系土器群が多量に出土している点注目される。

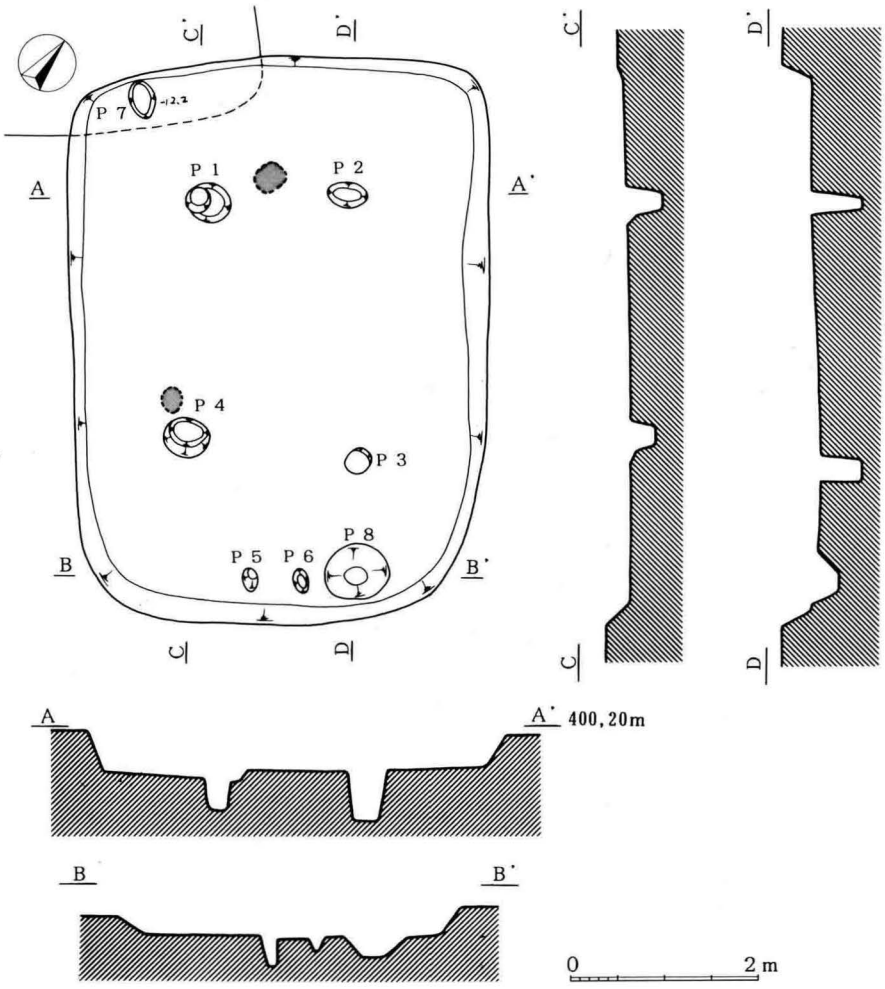


図51　61号住居址実測図　（1：80）

61号住居址覆土内集石検出状況

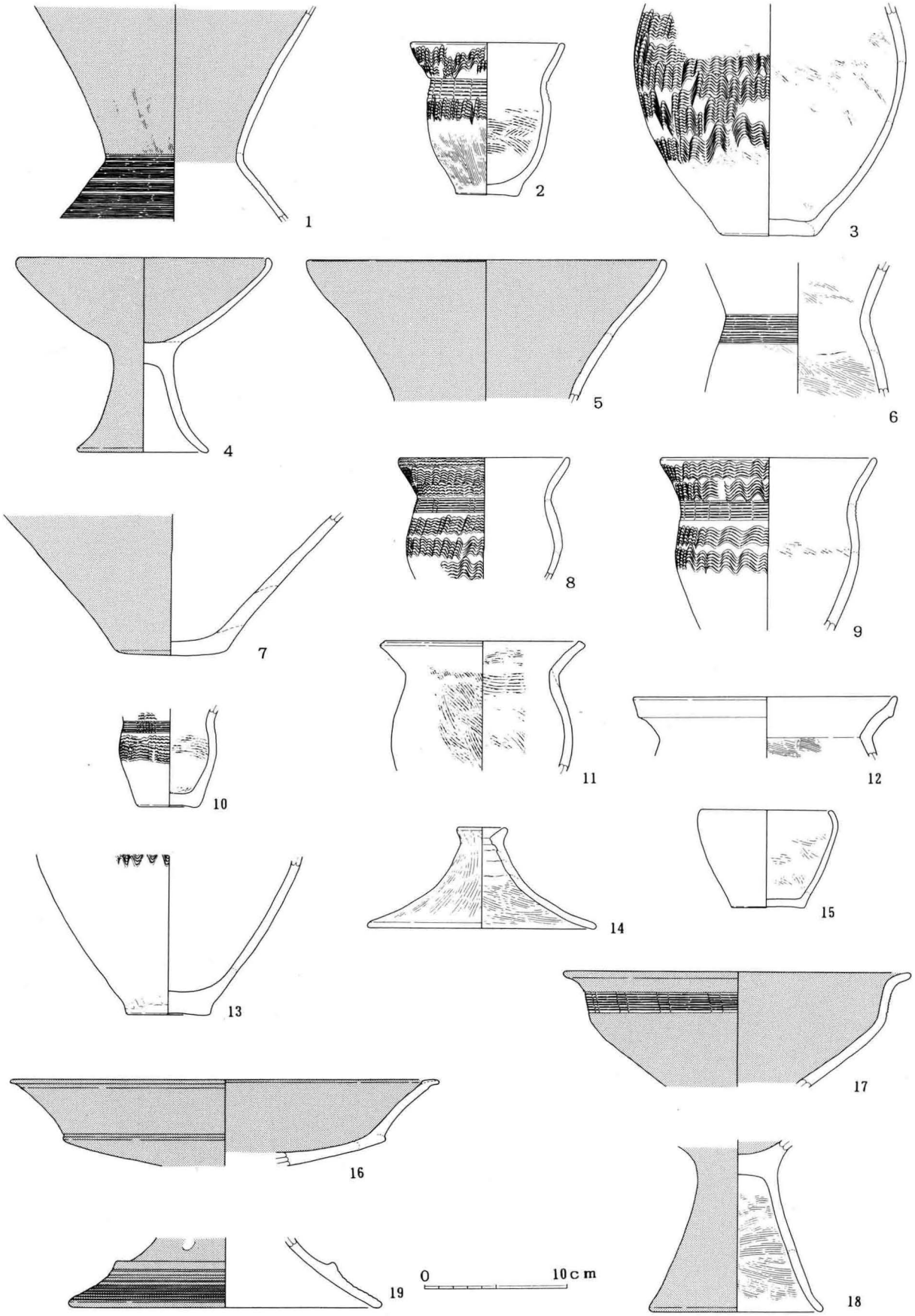


図52　61号住居址出土土器実測図　（1：4）

61号住居址

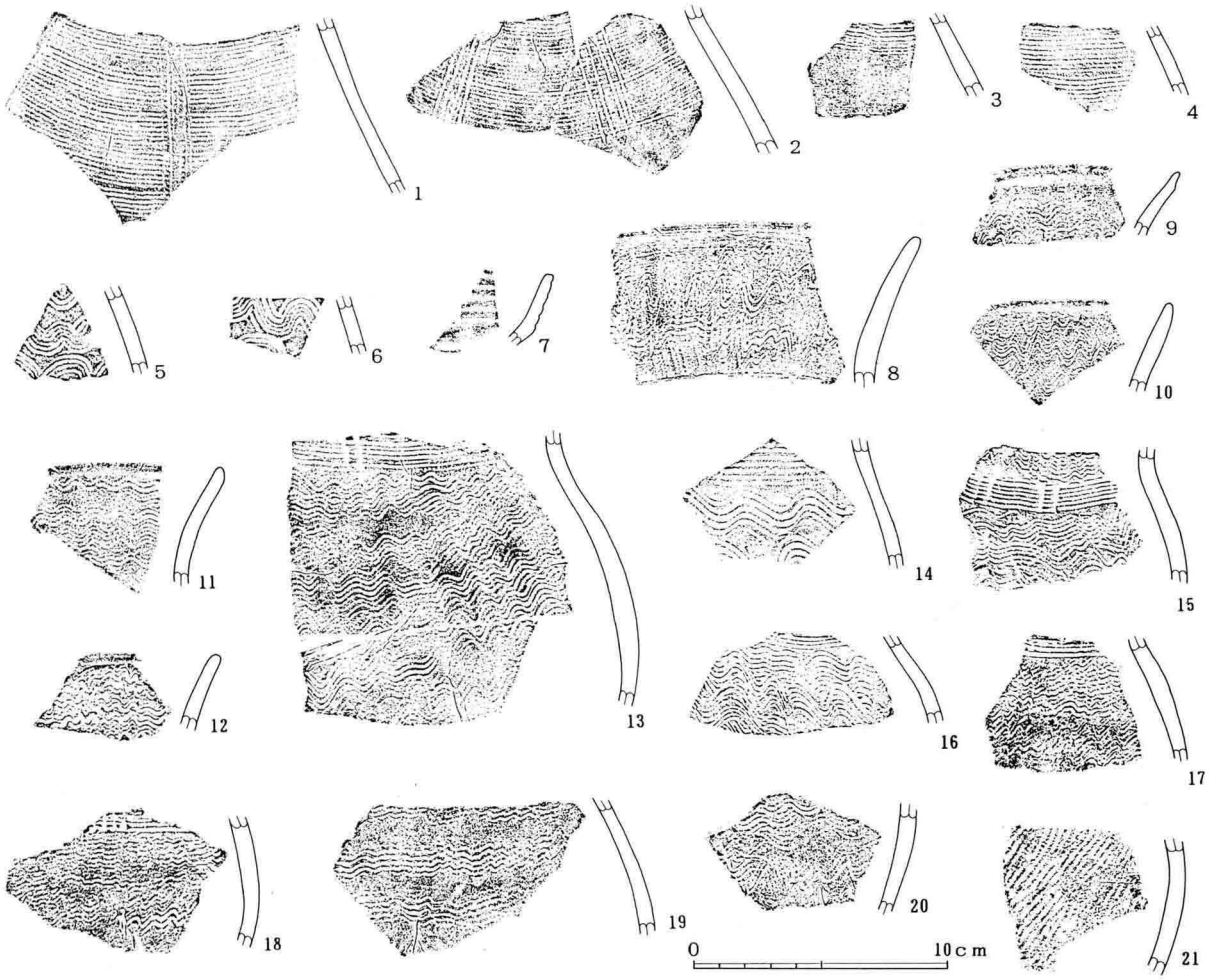


図53　61号住居址出土土器拓影　（1：3）

64号住居址　（図54）

平面プランは3.50×4.70mの小型のやや不整な隅丸長方形住居址で、他遺構との切りあい関係はない。確認面からの掘り込みは平均10cmほどと浅く、床面は非常に軟弱で不明瞭なものであった。柱穴はP1～P7を検出したが、主柱穴はP1～P4で、短辺1.30～1.50m・長辺2.00～2.20mのやや不整な4本長方形配列である。P5・P6は出入り口施設に関連する二ケ一対の支柱と考えられ、P8は貯蔵穴で、径40cm・深さ17cmを測る。炉は検出されていない。また図示しうる遺物も出土していない。

65号住居址　（図55）

南東側1/2以上が調査区外となり詳細は不明な部分が多い。平面プランは短辺5.30mの隅丸長方形と予想されるが、奥壁はやや張り出す形態を取る。確認面からの掘り込みは平均20cm前後で床面は非常に軟弱で不明瞭なものである。柱穴はP1～P4を検出したが、主柱穴はP1・P2で短辺2.00mの4本長方形配列と考えられる。P3は棟持柱であろう。炉等その他の施設は確認されていない。図示しうる遺物も出土していない。

67号住居址　（図138・56）

古墳時代の66号住居址に大部分を切られ詳細不明。5.00×7.50mの隅丸長方形住居で南壁はかなり張出し小判形に近い形態を呈する。出入り口施設のP1・P2、貯蔵穴P3を検出したのみでその他の施設は不明。P3内より壺が1点出土している。

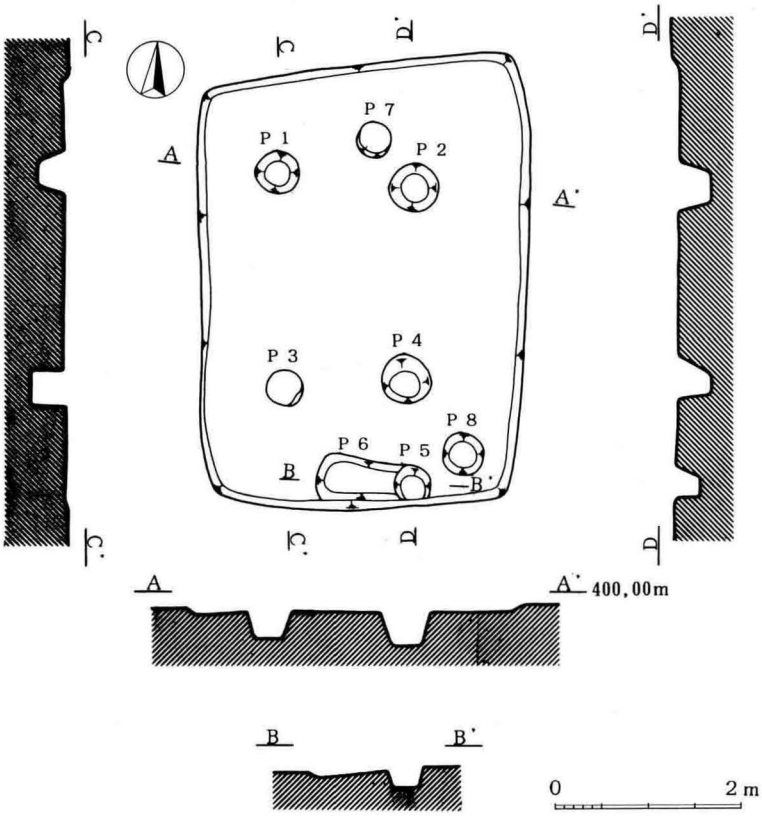


図54　64号住居址実測図　（1：80）

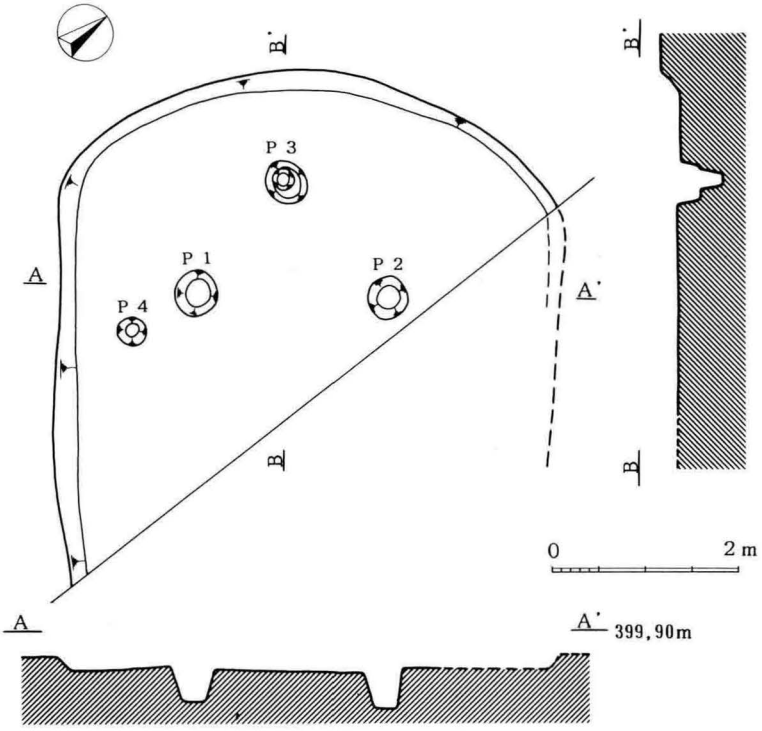


図55　65号住居址実測図　（1：80）

64号住居址

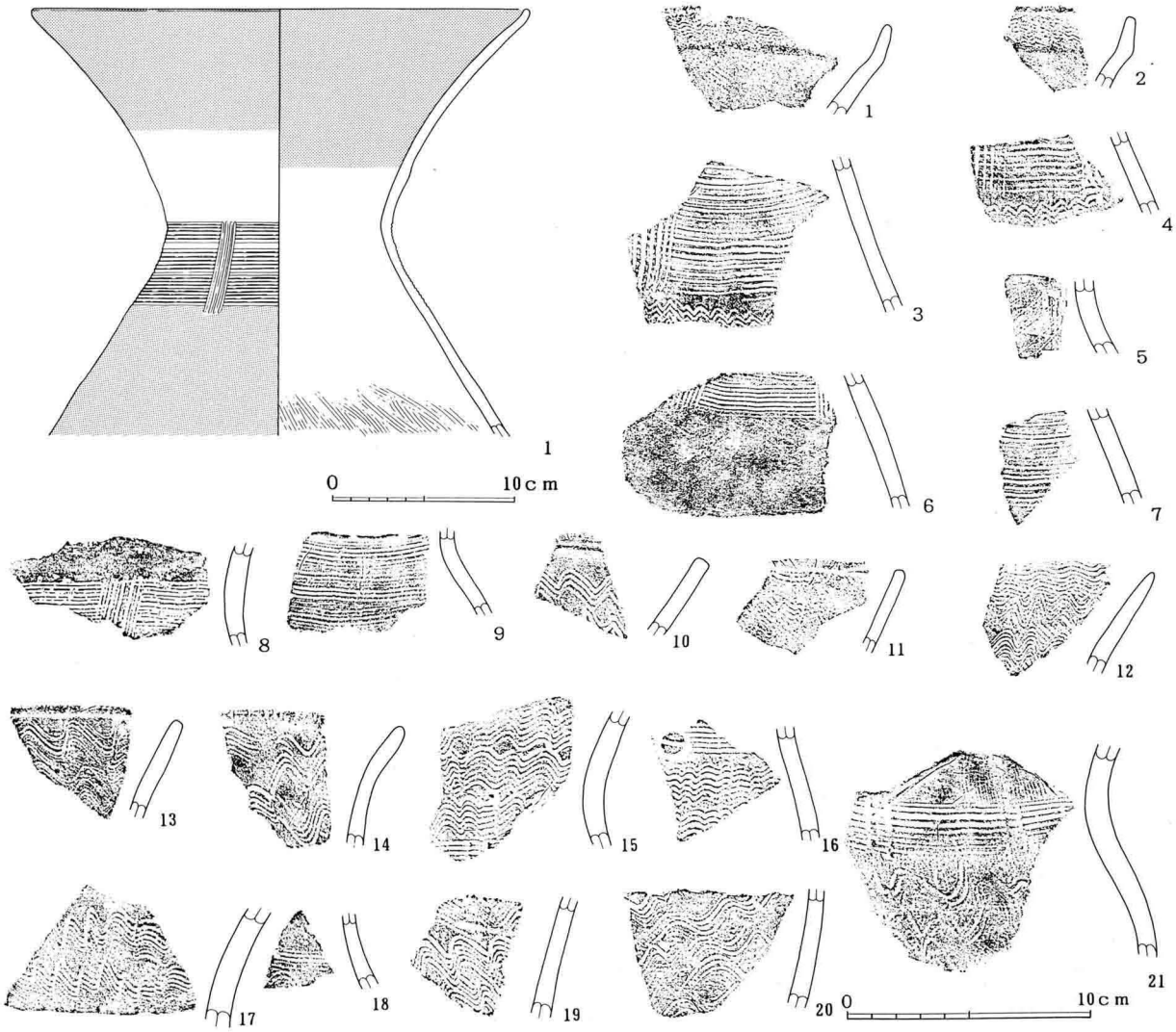


図56　67号住居址出土土器実測図並びに拓影

71号住居址　（図57・58）

古墳時代の68号住居址に上層を切られ、北西隅は調査区外となる。

平面プランは5.30×6.60mの隅丸長方形住居址である。確認面からの掘り込みは平均50cm前後と深い。

床面は住居址中央付近を中心に比較的固く締まっていたが、他は軟弱で不明瞭であった。

柱穴はP1～P9を検出した。主柱穴はP1～P4で、短辺1.50～1.60m・長辺2.60～2.90mのやや不整な4本長方形配列である。出入り口施設に関連する二本一対の支柱は検出されていない。P5～P9は性格不明である。P10は貯蔵穴で、長径60cm・深さ31cmを測る。

炉は奥壁側柱穴間中央に位置し、径25cm・深さ5cmほどの地床炉である。

出土土器には甕（1～4）・高杯（5・6）・杯（7）があるがいずれも床面上よりの出土である。

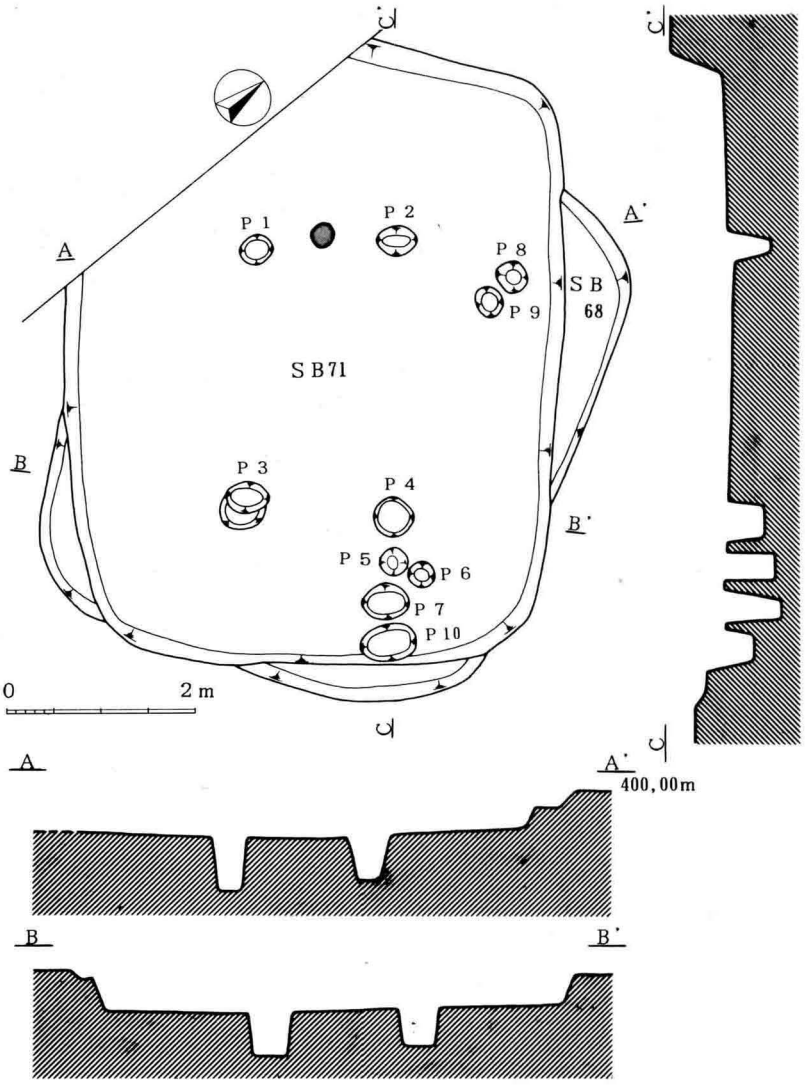


図57　71号住居址出土土器実測図　（1：80）

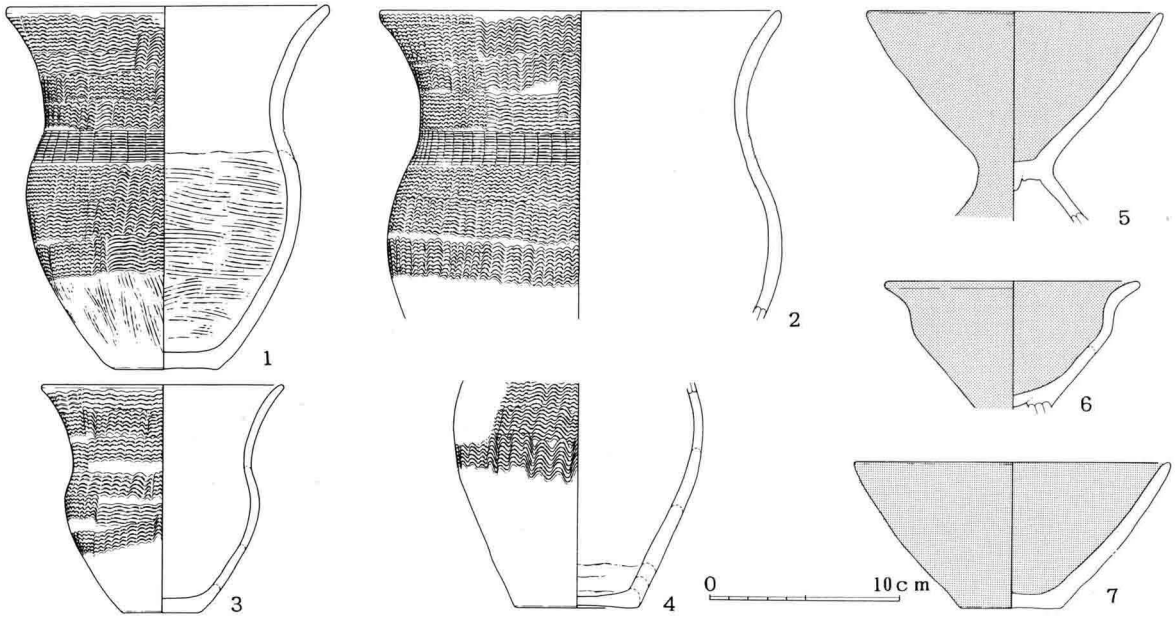


図58　71号住居址出土土器実測図　（1：4）

71号住居址

73号住居址

73号住居址　（図146）

古墳時代の74号住居址に切られ、また北東側は1/2が調査区外となり詳細は不明である。規模は不明であるが、平面プランは隅丸長方形住居と予想される。確認面からの掘り込みは20cm前後と浅く、床面は軟弱である。柱穴は奥壁側の主柱穴P1と棟持柱P2を検出した。炉は奥壁側柱穴間中央に位置するものと予想され、地床炉である。図示しうる遺物は出土していない。

77号住居址　（図59～61）

平面プランは4.50×5.50mの隅丸長方形住居址で、他遺構との切りあい関係はない。確認面からの掘り込みは30～40cm前後と深く床面も比較的明瞭であった。柱穴はP1～P6を検出した。主柱穴はP1～P4で短辺1.80m・長辺3.10mの4本長方形配列である。P5・6は出入り口施設に関連する二本一対の支柱、P7は貯蔵穴である。炉は2個確認した。主炉は奥壁側柱穴間中央に、副炉は住居址中央付近に位置し共に地床炉である。P1・P3間にさらに2個の焼土の堆積を確認したが炉と認定できるものではない。

床面より鉄製品が1点出土している。

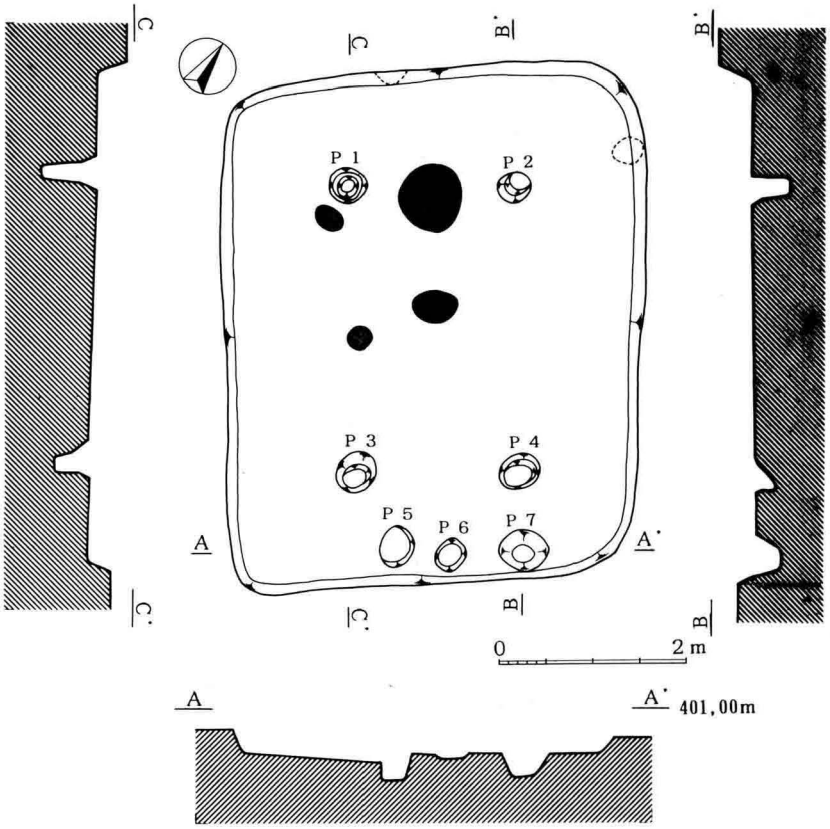


図59　77号住居址実測図　（1：80）

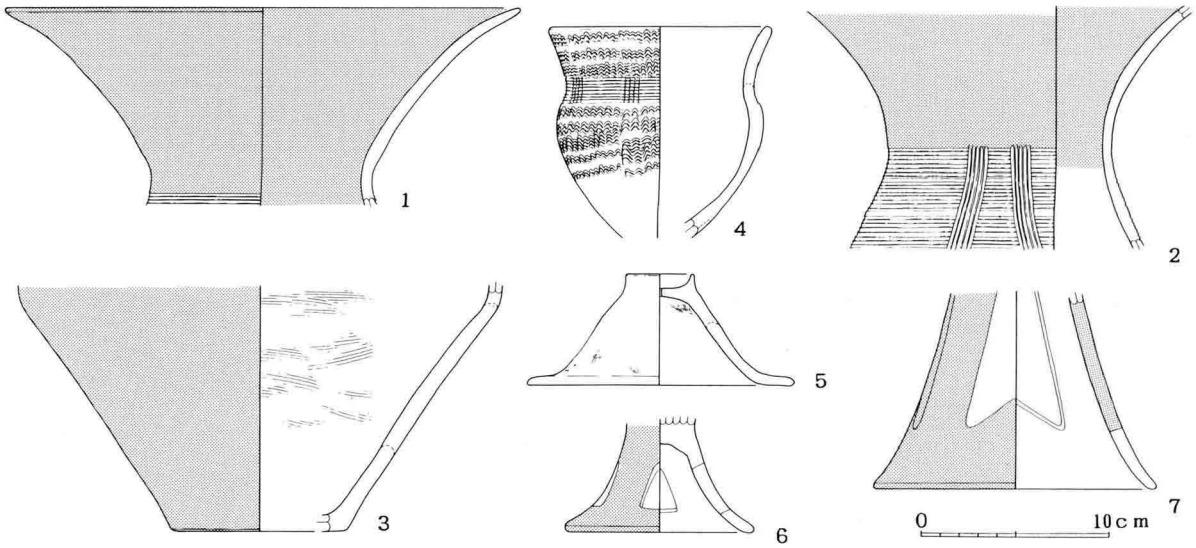
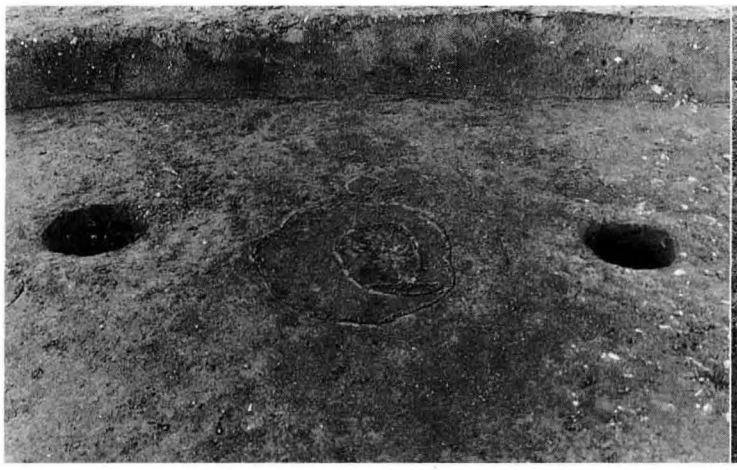


図60　77号住居址出土土器実測図　（1：4）

77号住居址



奥壁側柱穴・炉

鉄製品出土状況

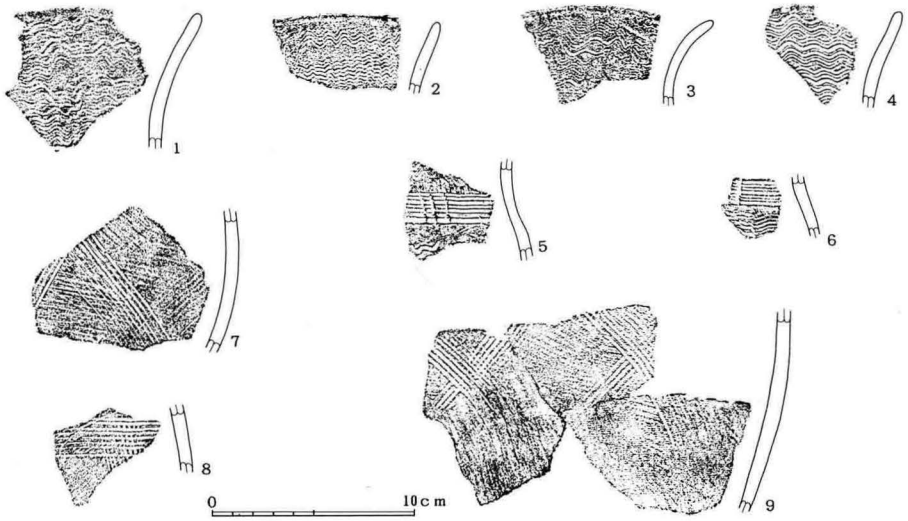


図61　77号住居址出土土器拓影　（1：3）

78号住居址　（図62）

平面プランは3.30×4.30mのやや小型の隅丸長方形住居址で、他遺構との切りあい関係はない。確認面からの掘り込みは10cm前後と比較的浅く、床面は全体に軟弱である。

柱穴はP1～P8を検出している。主柱穴はP1～P4で、短辺1.60m・長辺2.10mほどの4本長方形配列である。出入り口施設に関連する二本一対の支柱は検出されていない。P5は棟持柱であろう。P9は貯蔵穴で、径50cm・深さ11cmを測る。炉は奥壁側柱穴間中央に位置し、径50cm・深さ7cmほどの地床炉である。その他の施設は確認されていない。また図示しうる遺物も出土していない。

82号住居址　（図63）

弥生後期の83号住居址を切って構築されるが、古墳時代の75号住居址に1/2以上を切られ、詳細不明な部分が多い。平面プランは短辺4.70mの中型の隅丸長方形住居址と考えられる。

確認面からの掘り込みは50cm前後と深く、床面も比較的固く

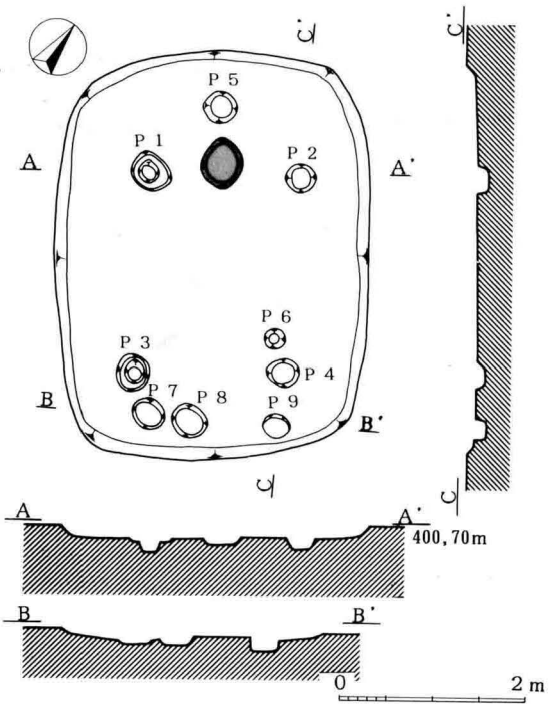


図62　78号住居址実測図　（1：80）

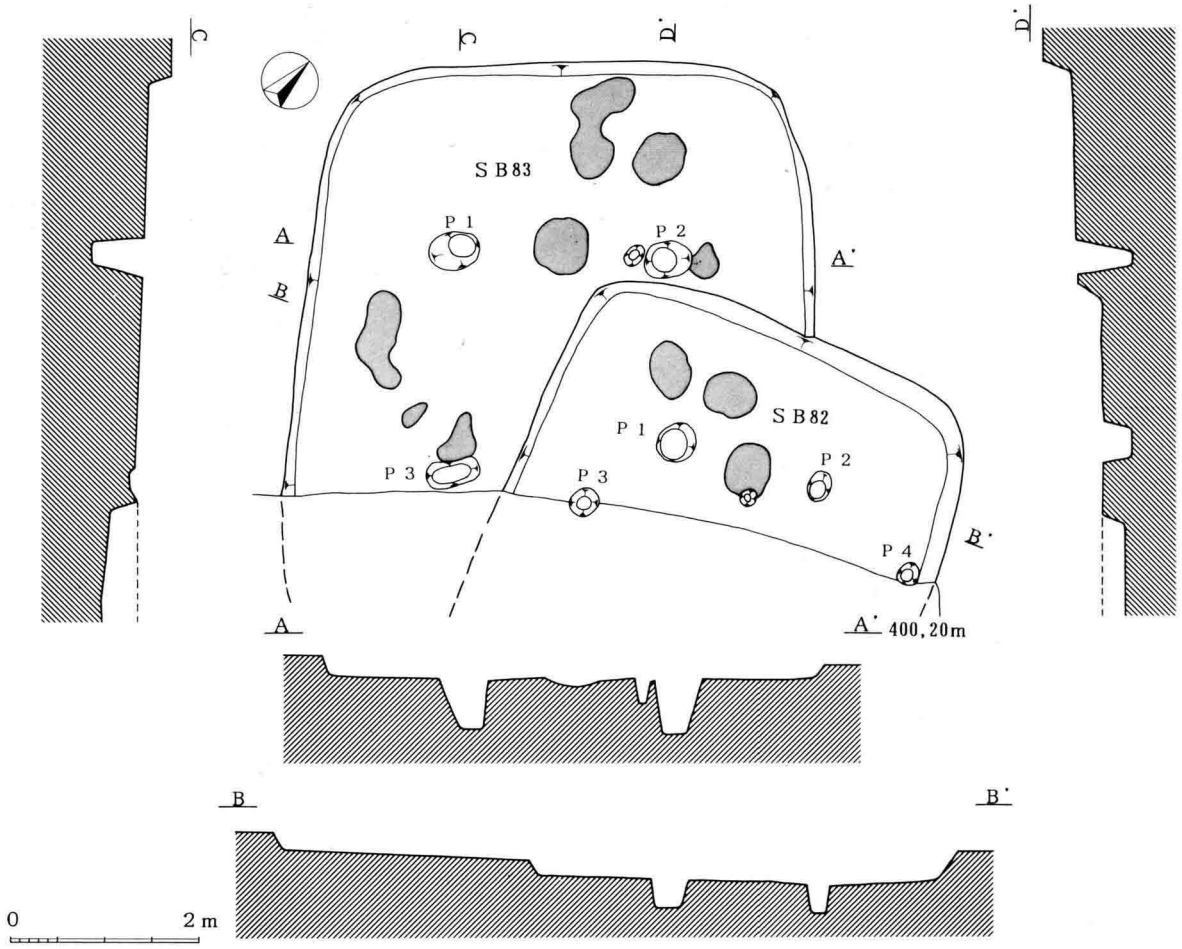
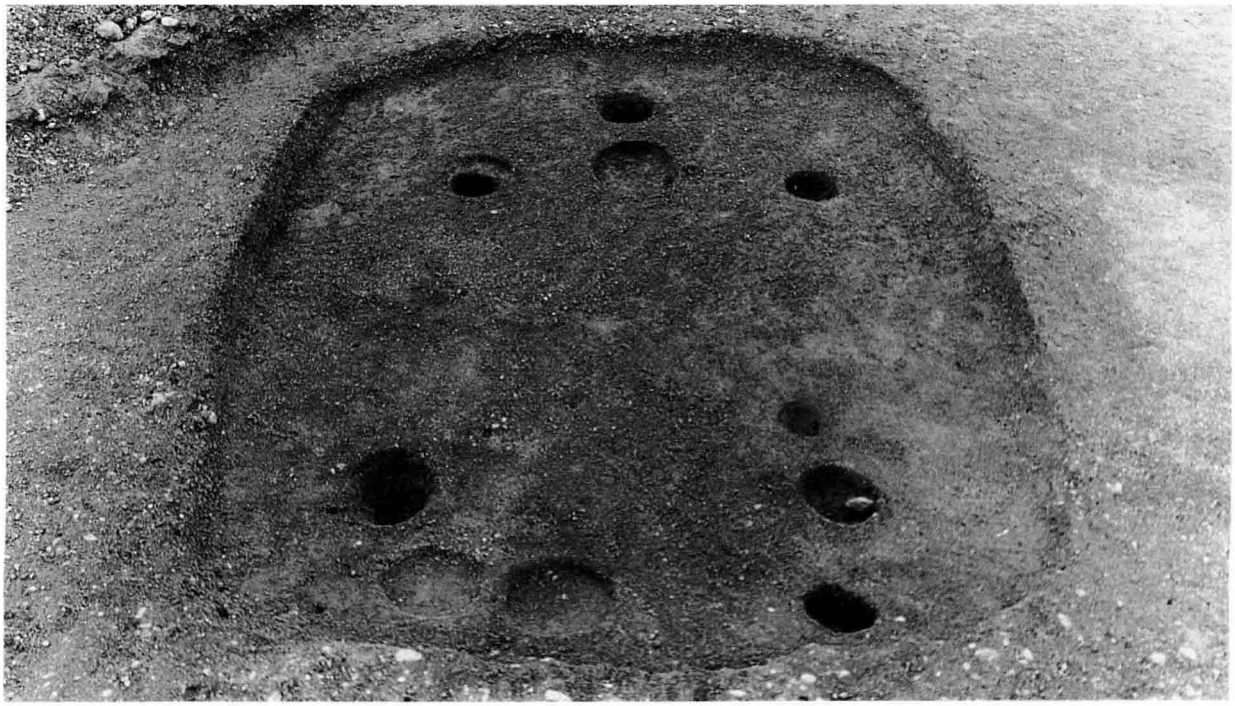


図63　82号・83号住居址実測図　（1：80）



78号住居址

83号住居址

炭化材出土状況

82号住居址

明瞭である。柱穴はP1～P4を検出した。P1・P2は奥壁側の主柱穴で、短辺1.60mの4本長方形配列と考えられる。炉は奥壁側柱穴間中央に位置し、長径60cm・深さ7cmほどの地床炉である。奥壁側に焼土の堆積が2箇所確認されているが性格は不明である。

図示しうる遺物は出土していない。

83号住居址　(図63)

弥生後期の82号住居址、古墳時代の75号住居址に切られる。平面プランは5.40×8.50mほどのやや大型の隅丸長方形住居址と考えられる。確認面からの掘り込みは平均30cm前後で、床面は全体に軟弱で不明瞭であった。柱穴はP1～P3を検出した。P1・P2は奥壁側の主柱穴で、短辺2.20mの4本長方形配列と考えられる。炉は奥壁側柱穴間中央に位置し、径55cm・深さ5cmほどの地床炉である。南側に炉縁石を有する。本住居は焼失住居であり、床面上に多量の炭化材ならびに焼土の堆積を検出している。図示しうる遺物は出土していない。

84号住居址　(図64)

大部分を古墳時代の79号住居址に切られ、詳細は不明である。平面プランは短辺5.20mほどの隅丸長方形住居址と考えられる。確認面からの掘り込みは平均10cm前後と浅く、床面は全体に軟弱で不明瞭である。柱穴は出入り口施設に関連する二本一対のP1・P2を確認したのみである。P3は貯蔵穴で、径45cm・深さ60cmを測り、内部より杯が1点出土している。

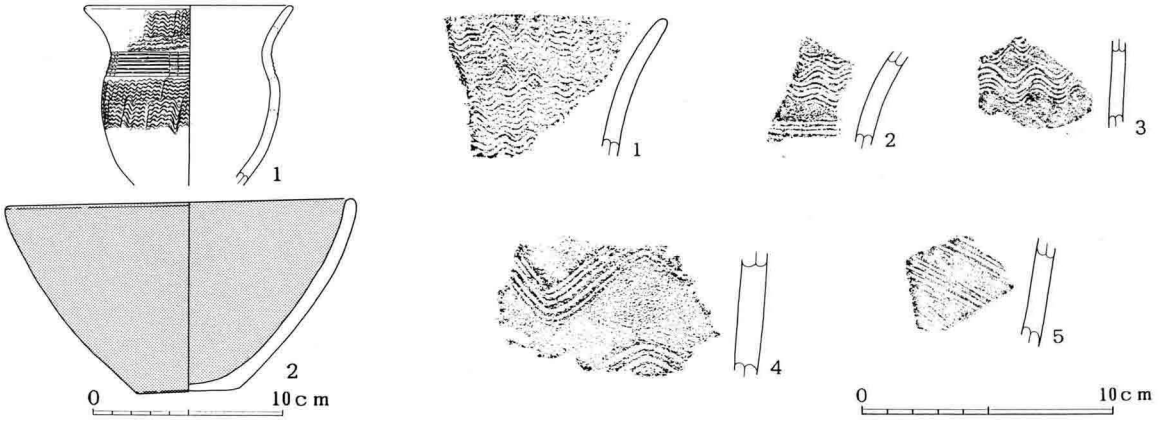


図64　84号住居址出土土器実測図ならびに拓影

84号住居址

土器出土状況

85号住居址　（図65～67）

平面プランは4.20×5.80mの中型の隅丸長方形住居址で、13号土壙を切って構築される。

確認面からの掘り込みは平均40㎝前後と深い。床面は住居址中央付近を中心に若干締まっていたが全体に軟弱で不明瞭であった。

柱穴はP1～P7を検出した。主柱穴はP1～P4で短辺1.60m・長辺3.30～3.40mの4本長方形配列である。P5・P6は出入り口施設に関連する二本一対の支柱である。P9は貯蔵穴で、径60㎝・深さ50㎝とやや規模が大きい。炉は奥壁側柱穴間中央に位置し、径20㎝・深さ3㎝ほどの地床炉である。

床面ならびに貯蔵穴内より壺（1）・甕（2～4）・蓋（5・6）・高杯（7）が出土している。

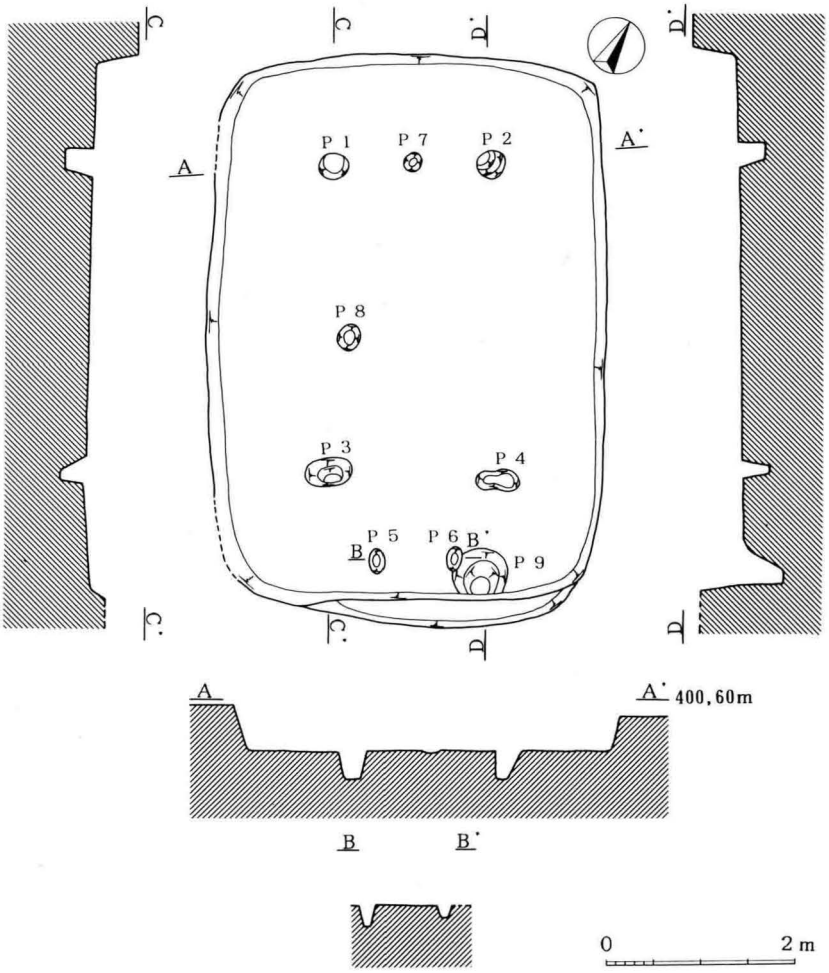


図65　85号住居址実測図　（1：80）

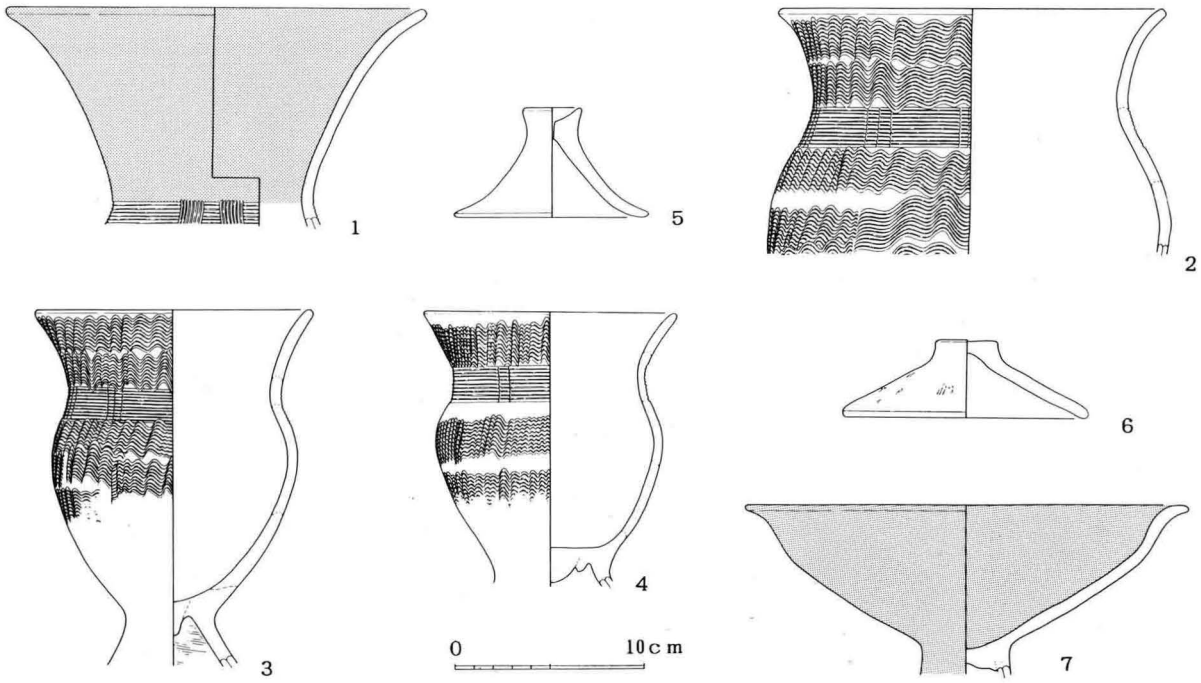


図66　85号住居址出土土器実測図　（1：4）

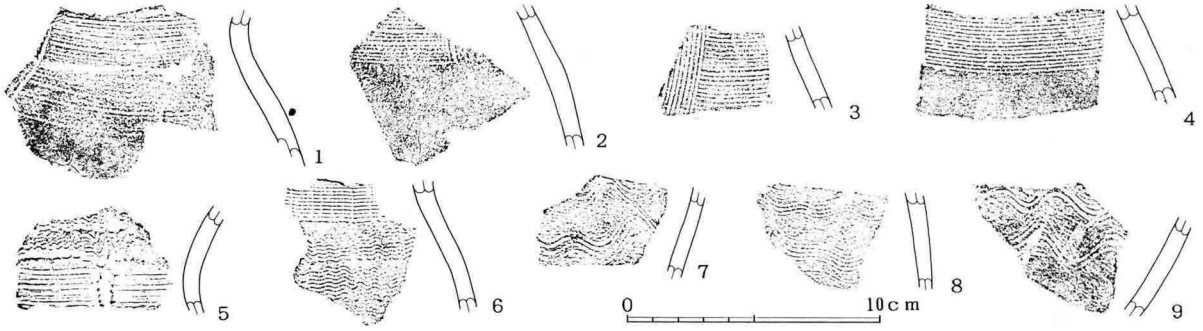
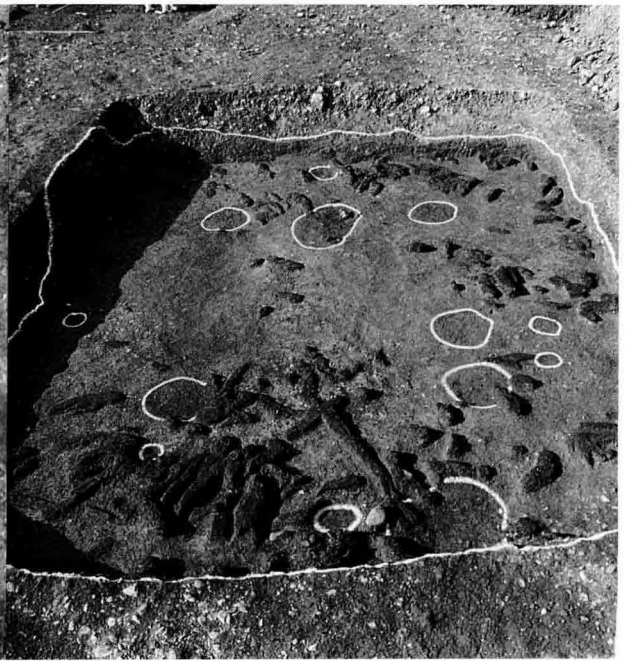


図67　85号住居址出土土器拓影　（1：3）

85号住居址

土器出土状況

87号住居址



炭化材出土状況

87号住居址　（図68～71）

平面プランは4.90×6.20mの中型の隅丸長方形住居址である。他遺構との切りあい関係はない。

確認面からの掘り込みは、奥壁側で50cm以上、南壁側でも平均30cm前後と深い。

本住居址は焼失住居で、床面ならびに壁の一部はかなり焼け締まった状況を呈していた。

柱穴はP1～P13を検出している。主柱穴はP1～P4で、短辺2.10m・長辺2.80～2.90mの4本長方形配列である。

P5・P6は出入り口施設に関連する二本一対の支柱の可能性があり、またP7は棟持柱の可能性が考えられる。

壁際に検出されているP9～P13については性格不明である。

炉は奥壁側柱穴間中央に位置し、長径1.00m・深さ9cmの地床炉である。

焼失住居のため、壁際を中心に炭化材が焼け落ちた状況で出土している。また奥壁側を中心とする覆土上層には円礫が投棄された状況で比較的多量に検出されている。

壺（1～3）・甕（4・5）・蓋（6）・甑（7～9）・杯（10・11）・高杯（12・13）が出土しているが、覆土より出土したものが多い。

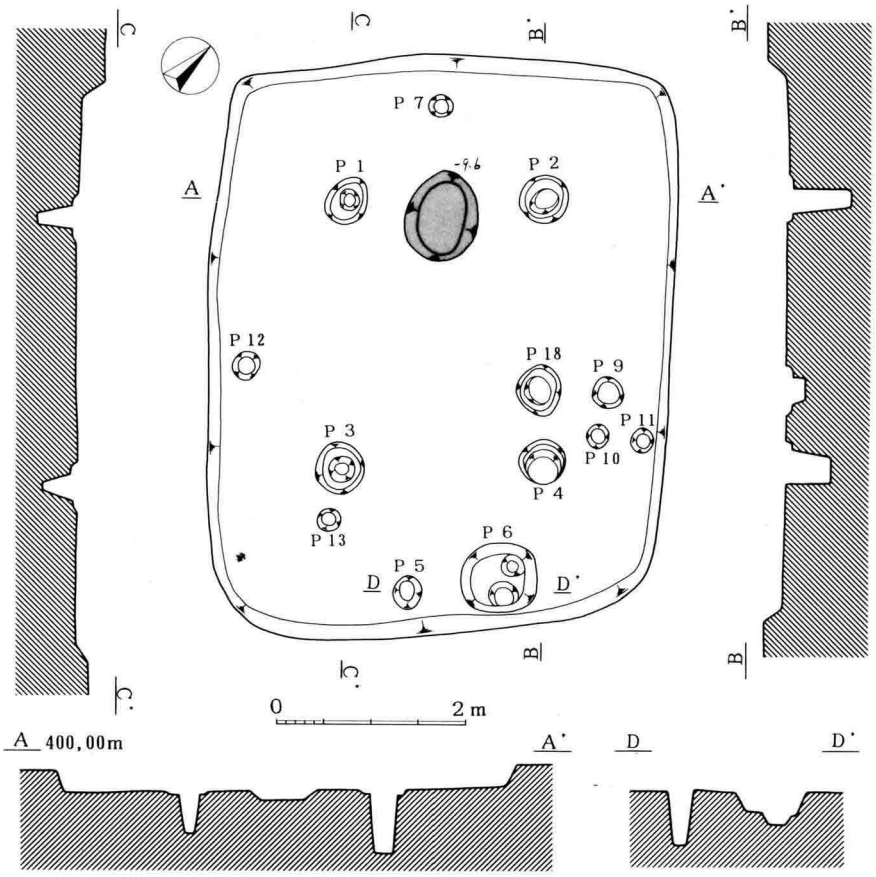


図68　87号住居址実測図　（1：80）

図69　87号住居址炭化材出土状況実測図　（1：80）

図70　87号住居址出土土器実測図　（1：4）

図71　87号住居址出土土器拓影　（1：3）

90号住居址　（図72～74）

古墳時代の86・89号住居址に上層を切られ、詳細は不明な部分が多い。平面プランは4.10×5.30mのやや小型の隅丸長方形住居址である。床面は全体に軟弱で不明瞭であった。柱穴はP1～P5を検出した。主柱穴はP1～P4で、短辺1.90～2.10m・長辺3.30～3.80mのやや不整な4本長方形配列である。P6は貯蔵穴で1.00×0.70mの長方形を呈し、深さ28cmを測る。炉は奥壁側柱穴間中央に位置し、径50cm・深さ5cmほどの地床炉である。住居址中央付近にも焼土の堆積が確認されたが床面はさほど焼き締まっておらず、炉とは認められない。住居北西隅から西壁にかけて、幅20cm・深さ5cmほどの壁周溝が検出されているが、全周はしない。床面より壺・甕・高杯が出土している。

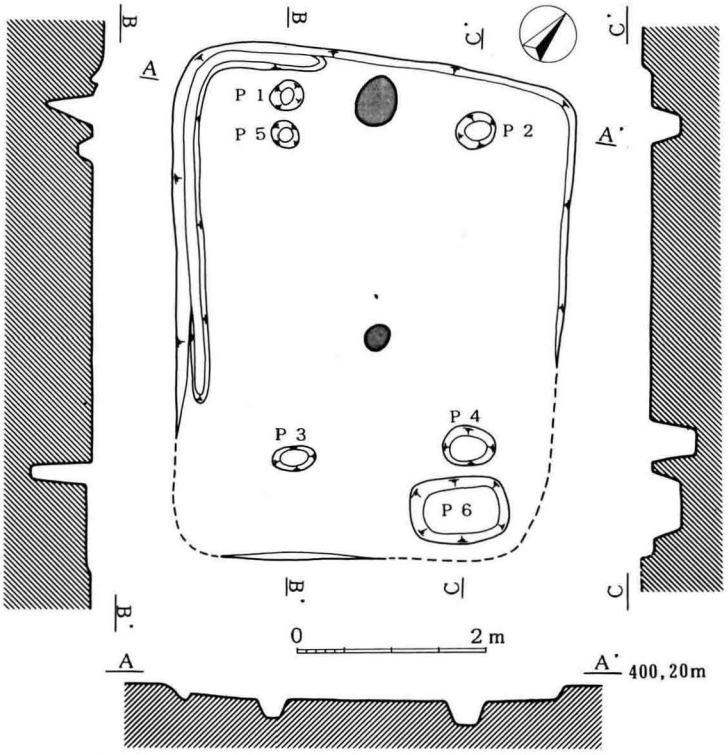


図72　90号住居址実測図　（1：80）

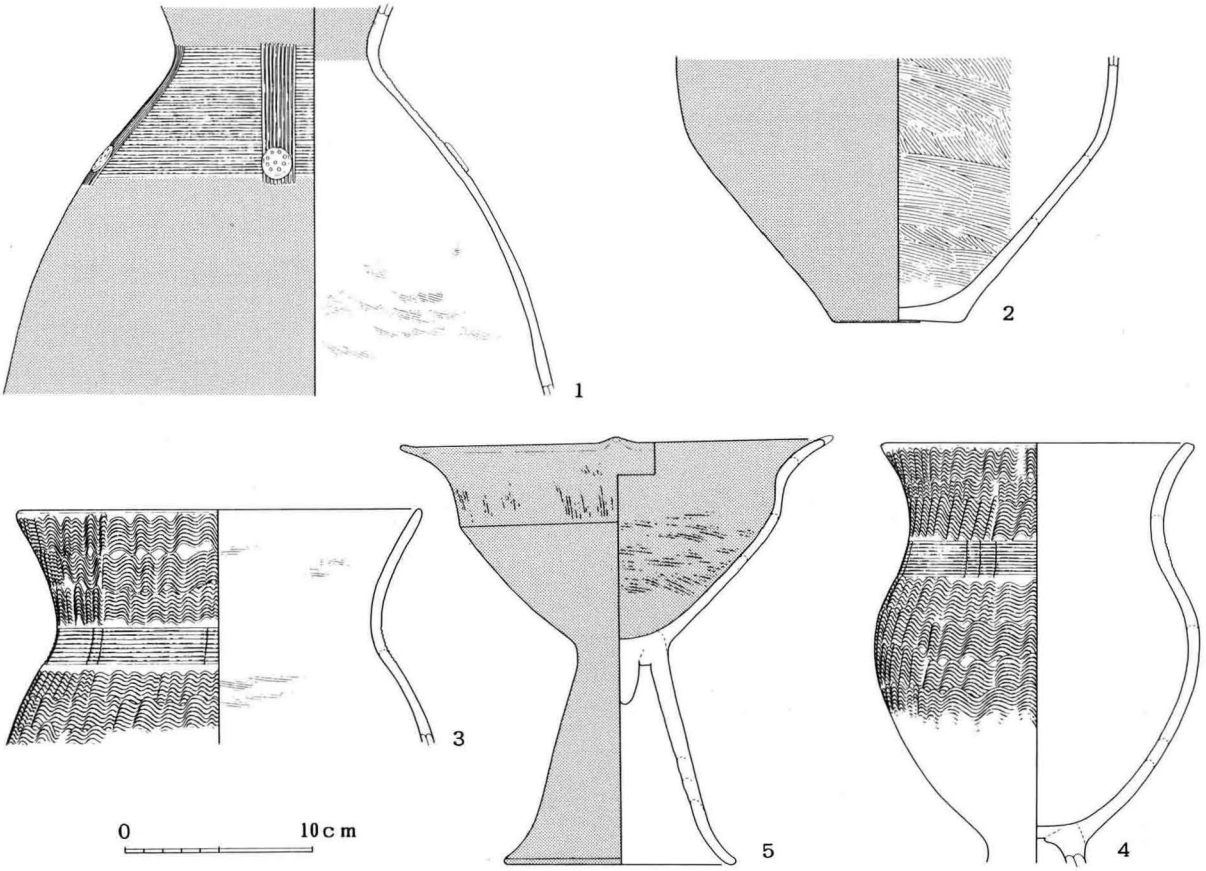


図73　90号住居址出土土器実測図　（1：4）

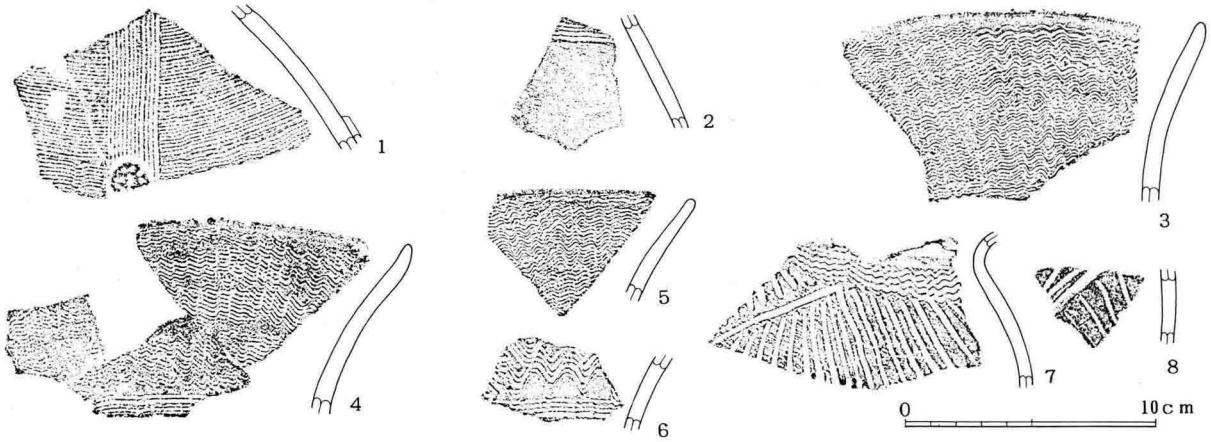
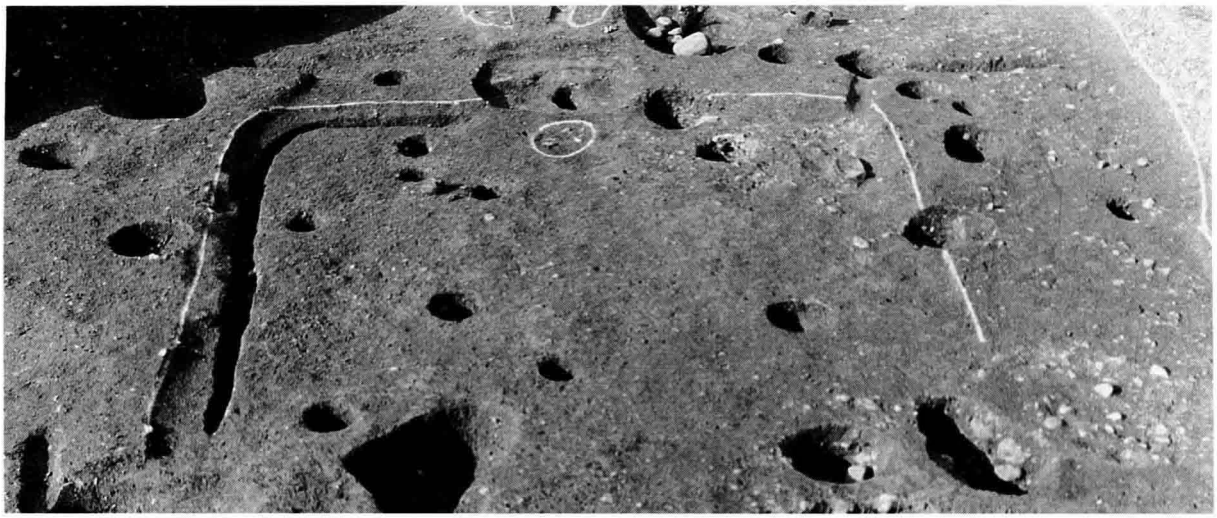


図74　90号住居址出土土器拓影　（1：3）



90号住居址

97号住居址

97号住居址　（図75）

古墳時代の57号･62号住居址に上層を切られ、また住居址南西隅は若干が調査区外となる。平面プランは4.70×8.20mの大型の隅丸長方形住居址である。確認面からの掘り込みは平均70cm前後と深い。床面は住居址中央付近を中心に固く締まっており、比較的良好な状態であった。柱穴はP1～P10を検出した。主柱穴はP1～P6で、短辺1.70m・長辺4.40mの6本長方形配列である。P7・P8は出入り口施設に関連すると考えられる、二本一対の支柱である。P11は貯蔵穴で、径50cm・深さ50cmとやや規模が大きい。炉は奥壁側柱穴間中央やや壁寄りのところに位置し、径40cm･深さ5cmほどの地床炉である。住居址北東隅からP2にかけて、2本の間仕切り溝が検出されている。図示しうる遺物は出土していない。

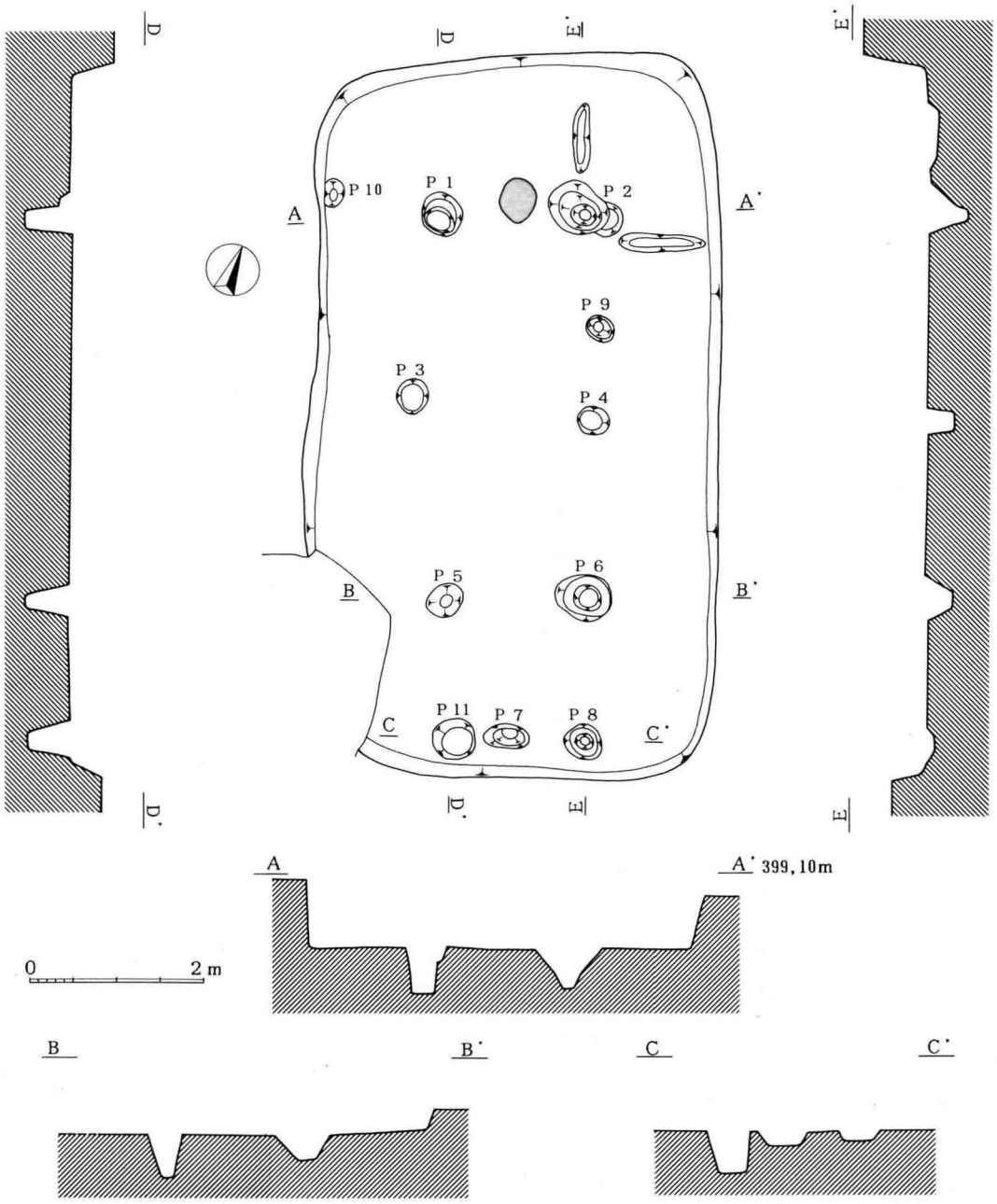


図75　97号住居址実測図　（1：80）

100号住居址　（図76～78）

弥生中期の102号住居址、後期の101号住居址を切って構築されるが、古墳時代の92号住居址に切られる。確認面からの掘り込みは平均30cm前後である。床面は住居址中央付近を中心に若干締まっており、比較的良好な状態であった。平面プランは6.90×9.20mの大型のやや不整な隅丸長方形住居址である。柱穴はP1～P11を検出している。主柱穴はP1～P4で短辺2.60～2.70m・長辺4.30～4.70mのやや不整な4本長方形配列である。P6・P7は出入り口施設に関連する二本一対の支柱である。P5は棟持柱と考えられる。P12は貯蔵穴で、径40cm・深さ25cmを測る。炉は奥壁側柱穴間中央やや壁よりのところに位置し、径40cm・深さ10cmほどの地床炉である。

床面ならびに柱穴内よりかなり多量の土器が出土している。特に北陸系高杯（7）の出土は注目される。

100号住居址

101号住居址　（図76）

弥生後期の100号住居址の下層に検出された住居址である。平面プランは3.10×3.80mの横長の隅丸長方形住居址である。

掘り込みは平均40cm程で、床面は全体に軟弱である。柱穴はP13が検出されているが本住居址に直接伴うものか不明である。炉は住居址中央奥壁よりのところに位置し長径70cm・深さ5cmほどの地床炉である。その他の施設は検出されていない。

若干の土器破片が出土しているが図示しうるものはない。

101号住居址

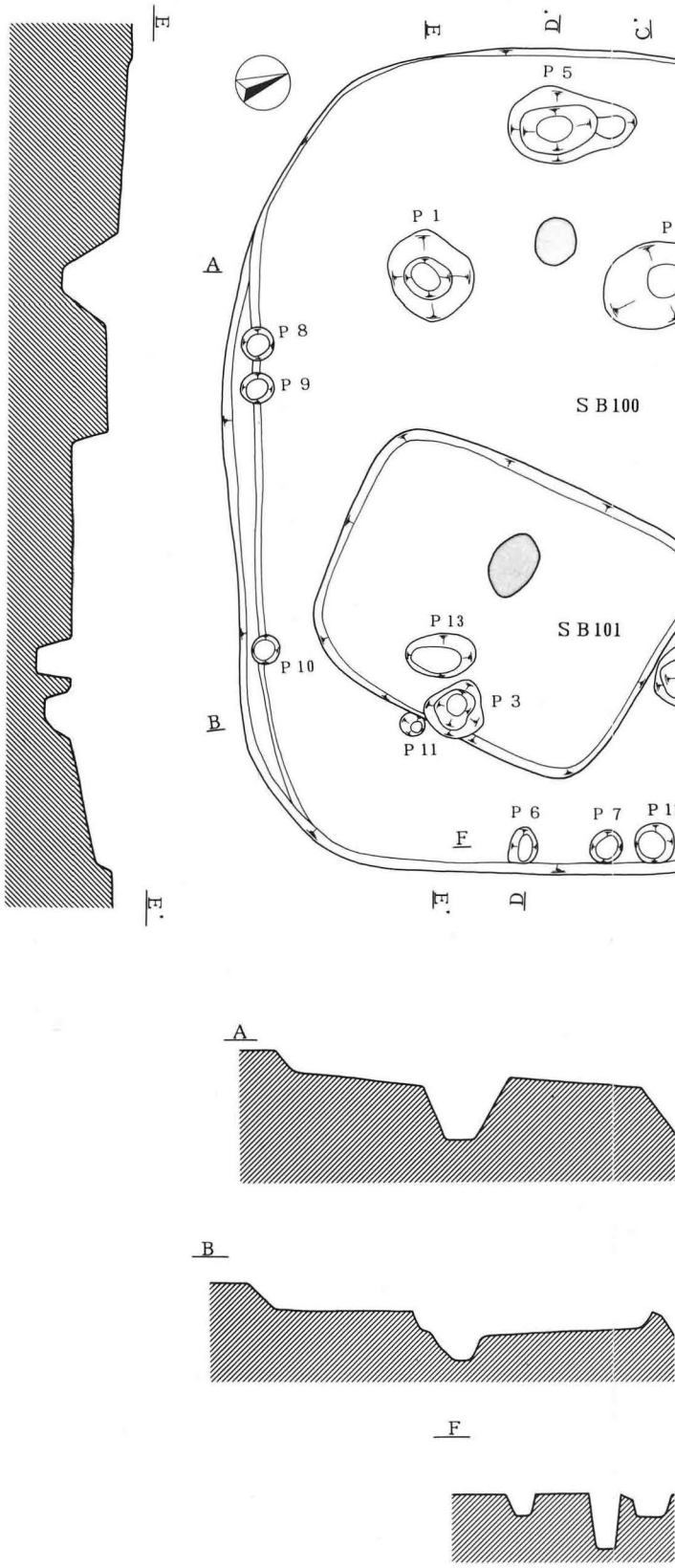


図76　100号・101号住

図77　100号住居址出土土器実測図　（1：4）

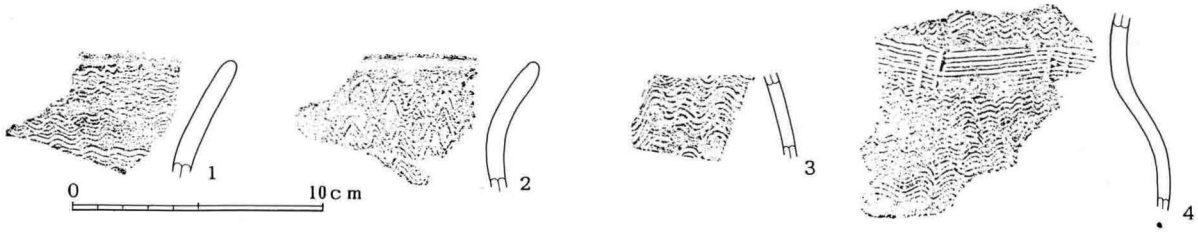


図78　100号住居址出土土器拓影　（1：3）

105号住居址　（図79・80）

弥生中期の104号住居址を切って構築されるが、奥壁側を古墳時代の103号住居址ならびに近世の土壙に切られる。

平面プランは3.40×5.10mのやや小型の隅丸長方形住居址である。確認面からの掘り込みは平均20cm前後と浅い。本住居址は焼失住居であり、床面や壁面は焼け締まった状況を呈している。柱穴はP1～P7を検出している。主柱穴はP1～P4で短辺1.30m・長辺2.50mの4本長方形配列である。P5・P6は出入り口施設に関連する2本一対の支柱で、P7は貯蔵穴である。炉は奥壁側柱穴間中央に位置し、径50cm、深さ5cmの地床炉である。

床面より壺（1）と、甕（2）が出土している。（2）は外来系の甕である。

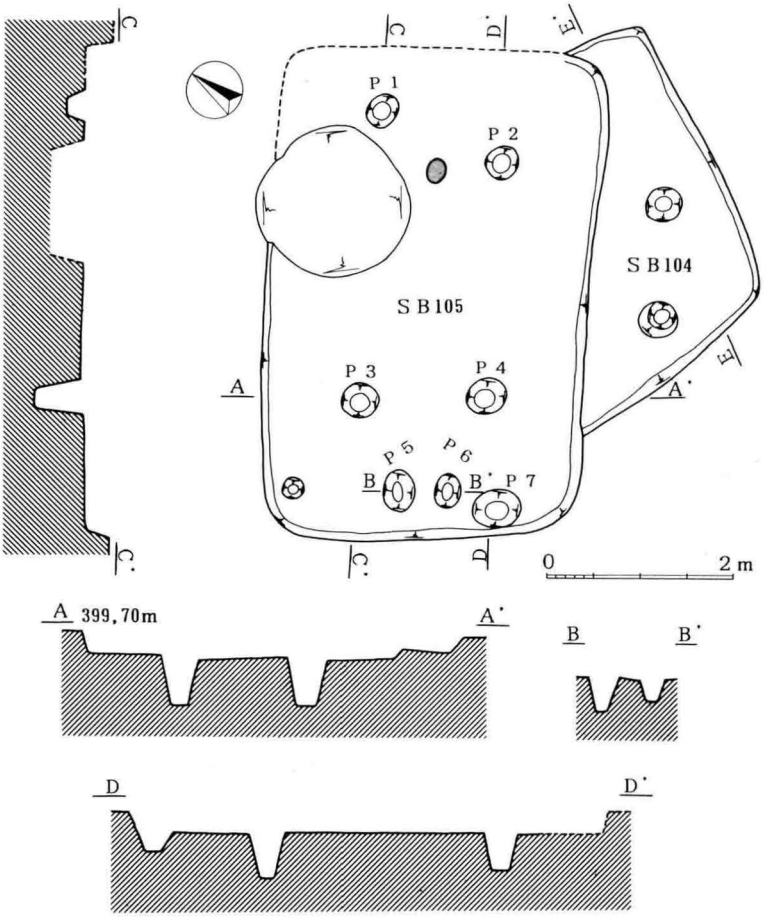


図79　104・105号住居址実測図　（1：80）

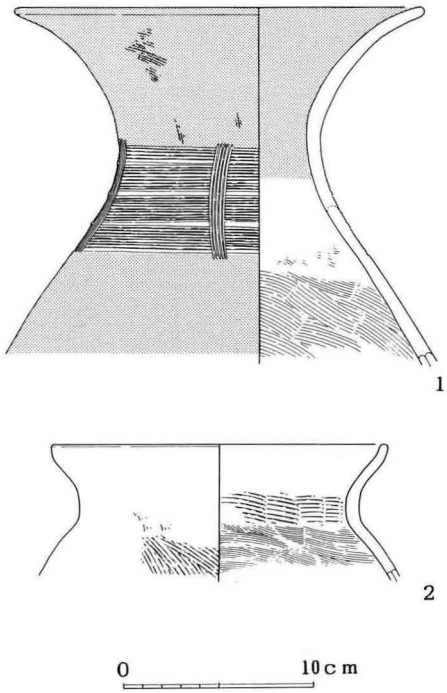


図80　105号住居址出土土器実測図

105号住居址